



2019年度

課外・ボランティア活動支援センター紀要

the Journal of the Center for Service Learning and Extra Activities 2019

東北大学 高度教養教育・学生支援機構
課外・ボランティア活動支援センター

2020年3月発行



はじめに

2019年度は、前年度にひきつづき、課外・ボランティア活動支援センターにとって、運営と活動の両面、とりわけ運営の面において激動の年となりました。

まず、運営の面では、2016年4月に特任助教として着任され、その行動力でセンターをけん引してこられた江口怜さんが和歌山信愛大学に助教として、2018年4月に教育研究支援者（現・学術研究員）として着任され、これまた江口さん並みの馬力で課外・ボランティア活動に関わる教育・研究・実践を進めてくださった菊池遼さんが日本福祉大学に助教として、ともに2019年3月に転出されました。そして、菊池さんの後任として、9月まで阿部晃成さんが学術研究員として、10月からは松原久さんが特任助教として、おのおの着任・勤務くださることとなりました。また、江口さんの後任としては、4月に横関理恵さんが特任助教として着任されました。教職員3人のうち金田理紗さん以外の2人が一気にメンバー交代したことになります。センターもまた、新しい時代を迎えた、ということになりましょうか。

また、2019年は、秋になって、東日本各地で台風や温帯低気圧を原因とする自然災害が多発しました。とりわけ台風19号は、本学が位置する宮城県、とりわけ丸森町や大郷町に大きな被害をもたらしました。本センターでは、とりわけ被害が大きかった丸森町に極力多くの学生ボランティアを派遣するべく、はじめて学務情報システムの利用を認めていただき、全学生に対するボランティア募集をおこないました。いわば「地元」の災害ということもあって、一日で100人近い希望者が集まりました。これは、ぼくらにとってうれしい驚きでした。

さらに、2018年にひきつづき、課外活動と授業の相互フィードバックを構築する「課外・正課リンク」の構想、「社会的関心（エンゲージメント）、エンパワメント、居場所作り（ピロギング）」の方法、といったアイデアについても、研究を進めています。

他方、学生スタッフ諸君は、例年どおり、みずからの力で（多額の!!）各種外部資金を獲得したり、あたらしい活動を開始したりするなど、活発な活動を展開しています。彼らのエンパワメントが着実に進んでいることを実感しています。

本センターは、社会が抱える様々な課題に対して学生という立場から取組む諸活動をサポートするという重要な課題を担っています。昨年も書きましたが、学生諸君の人間的な成長にとって、課外活動やボランティア活動は重要な役割を果たせるし、また果たしていると確信しているからです。本センターの活動が、本学の学生諸君、さらには本学教職員や他大学の学生・教職員諸氏にとって、大学という場における教育・研究を考えるうえで、少しでも参考になれば幸いです。

2020年3月

東北大学 高度教養教育・学生支援機構

課外・ボランティア活動支援センター

センター長 小田中直樹

目次

第Ⅰ部 授業開発・学生支援、課外・ボランティア活動に関する研究・論考

【研究ノート】

正課・課外リンクによる被災地支援の試みー宮城県石巻市の事例からー（松原久）	1
サービス・ラーニングプログラムの成果と課題ー市民性教育を視点にー（横関理恵）	14

第Ⅱ部 課外・ボランティア活動支援センター等の活動報告

1. 課外・ボランティア活動支援センターの事業報告	23
1-1. 課外・ボランティア活動支援センター2019年度の概括	23
1-2. 事務連絡会議（運営会議）	24
1-3. 日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）との協定事業	26
1-4. 課外・ボランティア活動研修会	28
1-5. 学生ボランティア登録団体の支援	30
1-6. 開講した授業	31
1-7. 国内外の中学校・高校・大学との交流	37
1-8. 緊急災害時の学生ボランティア派遣	38
1-9. 課外活動団体合同研修会および滝澤理事との意見交換会	51
1-10. 学友会との連携	57
2. 学生スタッフチーム SCRUM の活動報告	60
2-1. 2019年度学生スタッフチーム SCRUM の概要	60
2-2. 総務	61
2-3. 渉外	63
2-4. 広報	65
2-5. 会計	66
2-6. 企画担当	67
2-7. その他学内イベント	68
2-8. 国際部	70
2-9. 震災伝承部	72
2-10. 人権共生部	73
2-11. 東北大学災害伝承プロジェクト“もしとさ”	74

2-12. 地域共創部	76
2-13. 東北大学ボランティア団体合同研修（いっぽこ合宿）	77
3. 学生ボランティア団体の活動	80
3-1. 陸前高田応援サークルぽかぽか.....	80
3-2. インクストーンズ	82
3-3. 福興 youth.....	84
3-3. 地域復興プロジェクト“HARU”	88
3-5. 震災復興・地域支援サークル ReRoots.....	90
3-6. 国際ボランティア団体“AsOne”	90
3-7. 東北大学ボランティアサークルたなぼた	92
3-8. 高校生支援団体 bridge.....	94
3-9. 東北大学フェアトレード推進サークル amo.....	95
3-10. 東北大学光のページェント Navidad.....	97
第Ⅱ部執筆者一覧	99

第 I 部 授業開発・学生支援、課外・ボランティア活動に関する研究・論考

【研究ノート】

正課・課外リンクによる被災地支援の試みー宮城県石巻市の事例からー

松原 久¹

課外・ボランティア活動支援センター

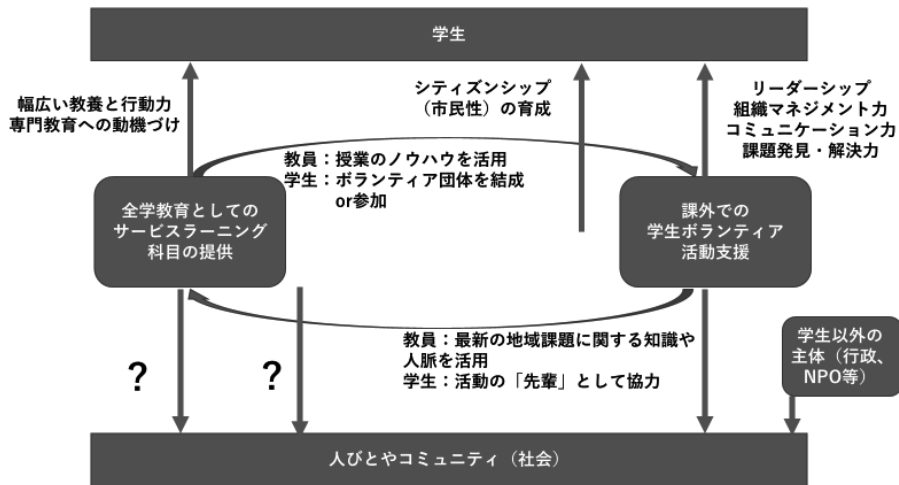
1. はじめに

本稿の目的は、課外・ボランティア活動支援センター（以下、センター）が提供してきた、東日本大震災被災地の支援に取り組むサービス・ラーニング科目を取りあげ、その社会貢献活動（支援）としての意義や課題を検討することである。具体的には、2016年度から石巻市を活動場所として開講してきた科目「ボランティア活動と地域課題」を主な素材とする。

東北大学では、多種多様なボランティア活動のなかで、とりわけ東日本大震災被災地を対象としたボランティア活動が活発であり、複数の学生ボランティア団体が被災三県で活動してきた。センターにおいても、東日本大震災を契機に設立された「東日本大震災学生ボランティア支援室」を母体を持つこともあって、東日本大震災被災地で活動する学生ボランティア団体に対しては、組織運営の支援にとどまらず、活動内容のアドバイス、現地支援団体との引き合わせ、団体間のネットワークづくりなど、学生の自主性を尊重しながらも総合的な支援を進めている。それと同時に推進してきたのが、正課教育のなかで「サービス・ラーニング」科目を開講し、被災地でのボランティア活動に関わる機会を提供することで、被災地の課題やボランティア活動について関心拡大等を目指す取り組みである。

サービス・ラーニングとは、桜井（2007）によると、学生の学びや成長を増進するような意図を持って設計された構造的な機会を用意する（とくに振り返りの機会）、サービス提供を通じて現実社会に何らかのインパクトを与えること（互惠関係）をともに重視するという特徴をもつ実践である（桜井 2007：23-24）。言い換えると、サービス・ラーニングの特徴は、サービス提供者と受け手社会双方の変化を意図する点であり、取り組みを評価するうえでは、学生による学びの経験、人びとやコミュニティに対して生みだした成果（支援）双方の視点を入れることが重要となってくる。センターでは、2014年度から全学教育としてサービス・ラーニングを導入しているが、その意義について、学生による学びの側面からは「地域視点」や「人権感覚」の獲得という要素があること（藤室・江口 2017：9-12）、人びとやコミュニティに対する支援の側面からは「学生が地域のカウンターパート（自治会等）に課題解決のアイデアを投げかけることで、学生・地域の間で互いの理解を深めながら共通の目標を協働で作成し、実行へと結びついていくこと」（菊池・藤室 2020：159-162）などを確認してきた。またセンターでは正課のサービス・ラーニング科目と課外でのボランティア活動支援の連関（正課・課外リンク）に取り組んできたが、学生に対する教育的効果の視点からみると、図1のように、有機的な循環関係によって学生の市民性育成にも寄与することを示している（江口 2018：7）。

¹ まつばら ひさし、課外・ボランティア活動支援センター特任助教 kyu.matubara@gmail.com



【図 1】 課外活動支援とサービス・ラーニング科目の関係性と本稿の関心

出典：江口（2018）をもとに筆者作成

その一方でこれまでの論考では、支援活動として捉えた際に、サービス・ラーニング科目の開講がもつ固有の意義や、自主的なボランティア活動との連関を試みることの意義といった点が十分に論じられてこなかった。この点について、先に紹介した菊池・藤室（2020）では、サービス・ラーニング科目の場合、対象地域の現状をしっかりと分析したうえで求められる活動をするため、ボランティア活動よりも活動規模が大きくなること、ボランティア活動の現場でサービス・ラーニング科目を開講する場合、自治会などのカウンターパートと信頼関係が構築できているため、対象地域に求められる活動を把握しやすいことが軽く述べられている（菊池・藤室 2020: 149）。しかしながら地域の現状を理解したうえでの活動はボランティア活動にも通じる要素であるし、既にボランティア活動の行なわれている現場では、支援活動としてサービス・ラーニング科目の対象とする意義が問われることになる。さらにサービス・ラーニング科目を支援活動として捉えた場合、授業の一環であるために、活動期間は短ければ1回、長くても半年程度に限定される、全学教育だと受講学生が支援に活用できる専門性を有している訳でもないといった限界があり、サービス・ラーニングは優れたサービス提供にならない可能性も十分に考えられる。では支援活動の視点からみると、サービス・ラーニング科目の開講やその自主的なボランティア活動との連関づくりにはどのような意義があるのか。

以上のような問いは、東日本大震災被災地で様々な主体による支援の取り組みがあり、東北大学生による自主的なボランティア活動も行われている状況で、あえてサービス・ラーニング科目を開講する社会的意義を確認するうえでも不可欠である。そこで本稿では、最初に東日本大震災の被災地が現在置かれた状況について、宮城県石巻市を事例に、支援の動向をふくめて確認する（2節）。次に石巻市で実施してきたサービス・ラーニング科目「ボランティア活動と地域課題」における取り組みを、自主的なボランティア活動の展開との関連も踏まえて紹介する（3節）（4節）、最後に、その意義や課題について、自主的なボランティア活動や他の主体によるサービス提供と比較しながら考察を加える（5節）。

2. 津波被災地・石巻市の現状と支援の展開：つながりの側面を中心に

(1) 東日本大震災被災地9年目の課題

日本社会に衝撃をもたらした東日本大震災の発生から9年あまりが経過し、被災者を取りまく状況は、発災当初と比べるとさまざまな面で変化が進んでいる。根こそぎに破壊されたインフラ（堤防、道路、鉄道等）はおおむね復旧が完了し、被災したまちでは安全性を確保した新たなまちなみが形成されてきた。仮設住宅等で避難生活をおくる被災者も、福島県の帰還困難区域をのぞいてわずかとなり、自主再建した住宅、災害公営住宅等、恒久住宅への入居が進んでいる。その一方で被災地に暮らす一人ひとりの視点からみると、必ずしも被災前にあった暮らしをとり戻している訳でなく、復興の実感の低さ、家計面に残

る影響、もとに戻らない地域の活動など、様々な面で震災のダメージから立ち直れていない現状が見いだされる²（NHK 2020）。とりわけ被災者のつながりに着目すると、ほとんどの被災者は、今の恒久住宅へ入居するまでに複数回の転居を経験しているが、その過程でつながりを喪失し「家にこもりがちになる」「近隣との交流が減る」などの変化に直面してきた（木村 2017）。しかし恒久住宅で新たなつながりをつくらうとしても、被災地に数多く建てられた集合型の災害公営住宅では、「鉄の扉」の存在や利便性の高さなどから、互いに顔なじみになる契機が欠落しており、隣りあって住むことに伴う共同作業（集会所や道路・用水路、共同墓地の管理など）の必要性も薄くなっている（佐久間 2018）。ここから被災地では新たなつながりが自然には生まれづらいうえに、交流活動を通じて、急病などの緊急事態のあったときに察知できるつながりや生活の困りごとがあったときに相談できるつながり、楽しみを共有できるつながりなどを生みだしていく取り組み・働きかけ、いわゆる「見まもり」や「コミュニティ形成」が復興に向けた課題の一つとなっている（復興庁 2019）。

津波被災地のなかで最大の犠牲者数となった宮城県石巻市においても、同様の課題に直面してきた。石巻市では最後の仮設住宅入居者が 2020 年 1 月に退去したことで、恒久住宅への入居はおおよそ完了したが、多くの被災者は沿岸部から市内内陸部や仙台、東京などへ移動し、新たな環境での暮らしを始めている。それに伴って石巻市の内陸部では、約 1200 世帯 5000 人が住む新市街地「のぞみ野」から、小～中規模の災害公営住宅、民間賃貸住宅の一室を借り上げた災害公営住宅まで、多様な形で被災者に向けた住宅が供給されてきた。そしていずれの住宅においても供給スピードを急いだために、実質上の抽選入居となっており、仮設住宅と同様に、「新たな場所で互いに顔も見たことのない被災者同士」が集まって生活するという状況がうまれている。仙台の都市部とは異なり、石巻市の沿岸部では、被災前まで同じ場所に住み続けてきた人びとが多く、互いに顔なじみの関係がほとんどであった。そこで住み慣れた場所となじみの関係性から切り離された被災者（とくに高齢者）は、被災前との著しいギャップに孤立感や喪失感を抱きやすくなっており、「見まもり」や「コミュニティ形成」の課題が深刻になってきたといえる。

（2）被災地における多様な支援の展開

被災地では以上のように「見まもり」や「コミュニティ形成」の課題に直面しているが、それに対しては多様な主体による取り組みや支援の動きも展開してきた。主な主体としては、藤室による分類を参考にすると、以下の四種類を挙げることができる（藤室 2019：3-5）。

第一に、被災者自身による取り組みがある。被災地では、恒久住宅の入居者で構成する自治会・町内会などの住民組織による活動（見まもり、集会所でのお茶会、祭りなど）、あるいは有志によるサークル活動（カラオケ会、手芸、菜園づくりなど）が行われてきた。石巻市内でも、新市街地「のぞみ野地区」に代表されるように、住民有志による活発なサークル活動、町内会による定期的なお茶会などが行われている地域が存在する。外部支援団体にとっては、このような被災者自身による取り組みを後押しし、最終的には支援抜きで互いに支えあう関係性を構築することが一つの目標になってきた。ただし最初から被災者のみの力で活動を進めるのは困難であるため、その他の主体による支援も重要な役割を果たしてきたといえる。

第二に、近隣住民による支援が存在する。具体的には、近隣の町内会、地区の社会福祉協議会、民生委員などである。これらの組織・役職は、平時の地域における支援の仕組みとして埋め込まれており、取り組みのパターンとしては、近隣住民自身が新たに住民となった被災者の抱える課題を察知して支援する場合、行政・社会福祉協議会などが近隣住民に働きかけて支援が始まる場合が存在する。具体的な取り組みとしては、地域を紹介するウェルカムマップづくり、近隣住民との交流会、災害公営住宅住民組織の運営支援などがあり（全国コミュニティライフサポートセンター2014）、石巻市においても市行政によって災害公営住宅の建設される近隣地域の町内会に対し、災害公営住宅を受け入れるように働きかけが行われてきた。

第三に、行政や行政から委託を受けた社会福祉協議会によるフォーマルな支援も、被災者にとっては重要な位置を占めてきた。専門の支援員を配置する形のフォーマルな支援としては、福祉系支援員と地域系支援員の二種類があり、福祉系支援員

² 実際、阪神・淡路大震災から 10 年目の調査では自分を「被災者」だと感じている割合が 25%であったが、NHK による東日本大震災から 9 年目の調査では 62%であり、おおよそ 2.5 倍の開きがあった。このような被災者意識には、経済面の影響、地域の活動と関連性が見出される（NHK2020）。

は、一人暮らしの高齢者などを対象に、戸別訪問や集まりの場づくりを、地域系支援員は、仮設住宅時代から継続して災害公営住宅住宅での自治会運営支援などを担ってきた（地星社ほか2018）。このうち福祉系支援員については、被災者自身が担い手となってきた場合が多く、被災者にとって身近な存在の支援者として、仮設住宅時代からのノウハウを活かした「見まもり」や「コミュニティ形成」を推進している（本間 2018）。石巻市においても、地域系支援員こそ配置されていないものの、市内各地に福祉系支援員として地域生活支援員と地域福祉コーディネーターが配置されている。

第四に、NPO やボランティアグループによる取り組みがある。このタイプには震災前から活動してきた団体と、震災後に新たに立ち上がった団体がともに含まれるが、宮城県内でも前者は仙台市が、後者は石巻市など沿岸部の自治体が多くなってきた（日本 NPO 学会震災特別プロジェクト東北班 2017：39-43）。また被災地内に住むメンバーが中心で、地域での継続的活動を前提にする地元支援団体と、一時的支援を前提にする外部支援団体で区別をすると、石巻市では外部支援団体の多さが特徴となってきた。すなわち、石巻市ではメディアが大々的に被害を報じたこともあって、震災直後から全国各地の NPO・ボランティアグループが集結し、連携して支援を進めてきた。この様子は「石巻モデル」と評されることもあり（中原 2011）、震災から 9 年経過した現在においても、全国から様々な団体が定期的に市内を訪れる／市内に活動拠点をおくなどの形で支援が続いている³。

(3) 支援の限界とその背景

石巻市では、このように被災者自身による取り組みやその他の主体による支援活動が活発に行われており、事例ベースでみると先進事例をいくつも挙げるができる。それにも関わらず各種の取り組み・支援を一步引いた視点から眺めると、限界を抱えていることが確認できる。

最初に、万遍なく取り組み・支援を進めることの限界がある。一般論として、被災者自身による取り組みはリーダーがいないと進めるのは困難であるし、リーダーがいたとしても、場所の有無（集会所など）、財源の有無（助成金など）、地域の規模（まとまりやすさ）、住民の属性（リーダーとともに動ける者の割合）、支援者の有無など、様々な要因によって取り組みの進まない可能性がある。このうち支援者の要因だけ取りあげても、近隣住民や NPO・ボランティアグループによるインフォーマルな支援は、その性質上、被災者を支援する立場にならない可能性（町内会組織の弱体化、新住民への排他意識などから）、支援の対象から外れる可能性（地域課題と活動理念・ミッションの不一致、地域側における受援力⁴の低さなどから）といった課題を抱えている。それに対して行政によるフォーマルな支援は公平性を理念としているが、石巻市の自治体規模・被災規模になると、支援対象の多さから、一定の基準を設けて対象を限定する必要がある。例えば石巻市の福祉系支援員は、恒久住宅での支援対象を災害公営住宅入居者に限定しており、仮設住宅時代に支援対象であった被災者であっても、住宅の自立再建、家族のもとに身をよせるといった再建方法をとる場合は対象外になってきた。

次に、取り組み・支援の背景にある課題が、今後ますます拡大するゆえの限界がある。少子高齢化は日本社会全体の抱える課題であるが、被災前から少子高齢化の進んできた被災地では、今後ますます高齢化が進行することから、住民の力のみで、支援を全く受けずに支えあっていくことは困難になることが予想される。また日本の公営住宅政策の課題として、災害公営住宅は段階的に家賃減免措置が廃止されていき、新たな入居者には公営住宅一般の入居基準が適用されている。そうすると一定の収入がある若年層ほど転出していくことになり、代わって入居するのは母子家庭、障害者のいる家庭、高齢独居者など、社会的立場が弱く、周囲からの支援を必要とする人びとである。そこで現時点では自治会活動として清掃やお茶会などができている地域でも、今後は被災者のみでの継続が困難になる可能性がある。

最後に、行政が「自立」（＝支援の縮小）の時間軸を設定しているゆえの限界がある。東日本大震災の復興政策では、発災から 10 年間で復興期間として位置付けられているために、期間内で被災地・被災者の「自立」が成し遂げられ「発展・創生」

³ そのなかには東北大学の学生が過去もしくは現在も、ボランティアやインターンとして活躍してきた団体が複数存在する（TEDIC、ピースポートセンターいしのまき、にじいろクレヨンなど）。

⁴ 受援力とは、本間によると支援を自らの生活や活動に活かす力であり、支援力と受援力の均衡が偏ると支援者の自己満足になる、被支援者の依存傾向をうむといった問題が生じる（本間 2014：62）。

へ至るという時間軸が設定されてきた。この時間軸から、復興政策では恒久住宅への入居を区切りとし、被災者・被災地の「自立」(＝支援の縮小)が促されてきた。それに伴って復興財源に基づく補助金・助成金に依存するNPOやボランティアグループも、支援の縮小を迫られている⁵。石巻市の福祉系支援員は、災害公営住宅のみを支援対象としているが、その一つの背景には、時間の経過とともに配置人数が減少し、災害公営住宅以外の支援にマンパワーを割けない現状がある(松原2019)。

3. サービス・ラーニングと学生ボランティア活動の相互連関：2016年度～2018年度

(1) 自主的なボランティア活動を通じた支援

石巻市では、以上のように現在ある支援には限界があり、今後についても課題の深刻化とは相反するように支援の縮小が見込まれる状況にある。このような課題を抱える石巻市に対して、東北大学では学生ボランティア活動とサービス・ラーニングによる支援活動の双方を推進してきた。ではそれぞれ支援活動をどのような形で進め、いかなる関わり合いをもってきたのか。

学生ボランティア活動については、東北大学の学生で構成されるボランティア団体のうち、4団体が石巻市で活動している。表1と図2は、活動概要とその位置関係をまとめたものである。

【表1】 石巻市で活動する東北大学の学生ボランティア団体

学生団体名 (発足年)	石巻市内における主な活動場所と活動内容 (現在)	石巻市内における主な活動場所と活動内容 (過去)
“HARU” (2011)	門脇西復興住宅(門脇・南浜地区)…サロン活動、イベントの支援	大橋仮設(中心地区)…学習支援、サロン活動、大森仮設(河北地区)…サロン活動
たなぼた (2016)	新西前沼第二復興住宅(あゆみ野地区)…サロン活動、お祭りの支援	新立野第二復興住宅(のぞみ野地区)…サロン活動
インクストーンズ (2013)	吉野町復興住宅(湊地区)、門脇東復興住宅(門脇・南浜地区)…サロン活動、戸別訪問	飯野川仮設、大森仮設(河北地区)、名振仮設(雄勝地区)…サロン活動
AsOne (2013)	門脇・南浜地区…植樹、新沼田第二復興住宅(のぞみ野地区)…お祭りの支援	(大森仮設(河北地区)) ※インクストーンズ、HARUと合同



⁵ 外部支援団体についていうと、災害直後に支援が殺到し、時間の経過とともに(支援対象の抱える課題の変化とはある程度無関係に)徹底していく傾向は、災害全般に共通する現象でもある。

【図2】 石巻市の主な地域区分と学生ボランティア団体の活動場所（現在）

各団体の発足時期は、表1にある通り様ざままで、たなぼたやAsOneのように、比較的最近になって石巻市での活動をはじめた団体も存在する。しかし現在各団体が行なっている活動には、災害公営住宅を対象に含み、活動内容としてサロン活動やイベント・お祭りの支援を通じた「コミュニティ形成」の活動を含むという共通点が挙げられる。各団体がこのような共通点をもつ背景には、活動の一部を「石巻じちれん」（後述）やセンターがコーディネートしてきたことが影響している。

“HARU”とインクストーンズについては、かつては仮設住宅でのサロン活動を主な活動内容としてきた⁶。ところが仮設住宅から恒久住宅への移転が進むタイミングで、それまで同一の仮設住宅に生活してきた被災者が各地の恒久住宅へと離れ離れになったために、仮設住宅でのサロン活動は役割を終えることになる。その後、活動理念を明確にもつNPO・ボランティアグループについては、仮設住宅で生まれた被災者同士のつながりを維持する支援、仮設住宅で懇意になった被災者の移転先でつながりを生み出す支援など、理念に即してそれぞれの展開を遂げてきたが、“HARU”とインクストーンズについては、学生のみで次の活動場所・活動内容を描くことが困難になった。そこで「石巻じちれん」が各団体の相談にのり、災害公営住宅を中心に、支援が手薄／住民自身が支援を求める場所と仲介することになっている。またたなぼたとAsOneについては、すぐ後でみるように、サービス・ラーニングで支援活動を行なってきた場所に対して、授業終了後の活動を引き継ぐ形で関わるようになった。

各団体の災害公営住宅における活動は、基本的には各住宅のリーダー（多くは自治会長）をカウンターパートに位置づけ、適宜相談しながら進める形がとられている。具体的にいうと、サロン活動をベースとしつつ、カウンターパートの抱える課題や被災者とのコミュニケーションを通じて気づいた課題のうち、対応可能なものがあれば活動のなかに工夫して入れ込むといったサイクルになってきた。このような活動は、被災者・被災地の課題がある限り支えあいの主体として継続的に関わりをもととする価値観（仮に＜自立＞と呼ぶ）にもとづくものであり、高齢化の進行や公営住宅政策の問題から被災者のみで支え合う「自立」がますます困難になる今後を踏まえると、十分に意義あるものといえる⁷。また学生が定期的に訪問することで、高齢者にとっては孫、子どもにとっては兄・姉のような存在としてコミュニケーションが促され、学生・住民間や学生を媒介とした住民同士のつながりが生まれやすいという意義も有している。ただしこのような活動形態ゆえの限界として、一度恒久住宅での活動を始めると、継続的支援を前提として関わるために、新たな場所での活動が難しくなってきた。そこで独自の意義を持つのが、以下にみるサービス・ラーニングを通じた支援活動である。

(2) サービス・ラーニングを通じた支援：2016年度～2018年度

センターでは2013年度からサービス・ラーニング科目を導入しているが、試行錯誤の結果、2016年度前期になって「特定地域を対象に、受講生自身が主体となって課題解決のための実践に取り組む」というスタイルを採用した。その後「東日本大震災被災地でのボランティア活動」をテーマとするサービス・ラーニング科目では同様のスタイルを踏襲しており、「フィールドワークを通じた地域課題の把握→KJ法、調べ学習などを通じた地域課題の整理→カウンターパートと相談しながら課題解決の企画立案→実践→振り返り」という流れで行なってきた⁸。一つの授業での活動地域は、受講生の人数によって1つ～4つで推移しているが、石巻市は2016年度当初から継続して活動しており、活動にあたっては石巻じちれんにカウンターパートを依頼してきた⁹。

⁶ 各団体の発足経緯や詳しい活動の展開については、過去の課外・ボランティア活動支援センター紀要や菊池・藤室・江口・松原（2020）を参照。

⁷ 藤室・江口（2017）では、このような活動形態について、「地域視点」をもとにしたコミュニティ支援という表現で意義を示している（藤室・江口2017：9-10）。

⁸ サービスラーニングが以上のような実施形態に定まった経緯や授業の詳細な進め方については、筆者の前任である藤室氏、菊池氏が菊池・藤室（2020）で詳しく記述しているので、本稿では要点のみ示す。

⁹ 筆者はこの石巻市での活動に、2016年度当初から関与し、活動をサポートしてきた立場にある。すなわち、2016年度～2017年度は藤室氏のTA、2018年度は菊池氏のTA、2019年度は教員として関わった。

石巻じちれんは仮設住宅自治連合推進会を母体とする地元の支援団体であり、母体組織時代は「抽選入居により見ず知らずの土地で暮らすことになった住民同士のコミュニティ形成」という共通課題を抱える仮設住宅の自治会間で情報交換・連携を進め、住民主体の活動の推進、関係機関・団体との交渉、住民の生活実態に関する把握・発信などを行なうことを目的としてきた。2016年1月に一般社団法人石巻じちれんとして発足して以降は、災害公営住宅とその周辺町内会の支援に注力しており、新市街地「のぞみ野地区」「あゆみ野地区」での自治会・サークル立ち上げ支援、災害公営住宅自治会間における情報交換・連携の場づくりなどを行なっている。このような活動の性質上、石巻じちれんは災害公営住宅の抱える課題や支援の実態把握にも優れてきたが、対応できる課題や場所には限界を抱えている。ここからセンターと石巻じちれんで焦点をあてる課題や場所を相談しながら、サービス・ラーニングを進めてきた。

2016年度～2018年度にかけては、のぞみ野地区を主な活動場所に定め、開講期ごとに、その時どきで地域の抱える課題に着目した活動を実践してきた。最初に活動した2016年度前期は、のぞみ野地区内で最も完成の早い災害公営住宅ができて1年も経たない頃であり、災害公営住宅の管理運営組織「団地会」こそ発足したものの、住民同士のつながりは全くといってきておらず、団地会やサークルなど被災者主体の活動も見られない状況にあった。そこで受講生が主体となり、子どもから高齢者まで幅広い世代が集まってもらうきっかけづくりとして、お祭り企画（流しそうめんの提供、フランクフルトやかき氷の販売、紙ヒコーキ大会など）を行なった。

その後の主な活動としては、2016年度後期に、のぞみ野地区の新沼田第一復興住宅（災害公営住宅）に焦点をあてて活動を実施した（地区内には合計4つの災害公営住宅があり）。のぞみ野地区には各災害公営住宅にある集会所とは別に、地区全体の集会所があり、2016年度前期のお祭り企画もこの集会所で実施した。また地区全体の集会所は石巻じちれんが管理者になってきたことから、当初よりさまざまな支援団体が入っており、現在は将棋、健康マージャン、合唱などサークル活動の拠点にもなっている。しかしながら地区全体の集会所は、新沼田第一復興住宅からだと徒歩10分ほどの距離にあり、足腰の悪い高齢の方などにとっては利用しづらい環境にあった。そこで後期には、それまであまり利用される機会のなかった新沼田第一復興住宅の集会所をお借りし、団地会役員に協力を仰ぎながら雑煮のふるまい、門松づくりなどを実施している。つづいて最初の活動から1年が経過した2017年前期になると、のぞみ野地区の各復興住宅団地会では清掃活動やお茶会などが定着し、被災者同士のつながりも徐々に生まれるようになってきた。それと同時に、復興住宅周辺に自立再建住宅が立ち始めたことから、「顔も名前も分からない自立再建住宅の住民と復興住宅の被住民でいかにつながりをつくるか」という新たな課題が浮上していた。そこで受講生が復興住宅団地会による清掃活動に参加しながら、自立再建住民にも声かけしてまわるなどして、自立再建住宅からの参加を促す場づくりを行なっている¹⁰。

2016年度～2018年度にかけて行なった活動をまとめたのが表2である。活動のタイプ自体は、いずれも集会所やその周辺を利用した交流企画であるが、焦点をあてる課題ごとに、イベントの具体的なコンテンツ、協力を呼びかける対象とその関係性（受講生主催か否か）などを変化させてきた。このような活動の変化は、「全く顔見しりの関係がない→次第に顔見しりの関係がつくられていく→団地会、サークルなど被災者主体の活動も活発になっていく→活動に出てこない／出てきづらい被災者ともつながりをつくっていく」という被災者自身による取り組みの発展過程とも対応するものであった。

【表2】サービス・ラーニング科目開講期ごとの概要（石巻市内）

開講期	石巻市内の活動場所	焦点をあてた課題	実践内容	学生ボランティア団体との関連
2016年度前期	のぞみ野地区全域	全く顔見知りの関係がない	受講生主催のお祭り企画	授業後、たなぼたの活動場所

¹⁰ 同様の課題は、のぞみ野地区に遅れること1年ほどしてあゆみ野地区でも浮上してきたために、受講生が流しそうめんなどを企画し、自立再建住宅からの参加を促す活動を行なっている。この活動の詳細については、菊池・藤室（2020）を参照。

	波板集落（雄勝地区） ※	集落の資源の活用方法 が思いあたらない	竹竿づくり、植樹のため の整備、つるしひなづく りなど	インクストーンズの活動場所
2016年 度後期	新沼田第一復興住宅 （のぞみ野地区）	地区全体の集会所が遠 い立地で、集まりに参加 しづらい	団地会に協力を仰ぎ、お 雑煮のふるまい、門松づ くり	たなぼた協力
2017年 度前期	新立野第二復興住宅 +周辺の自立再建住 宅（のぞみ野地区）	自立再建住宅の住民が 集まりに参加しない	団地会の清掃活動に協 力し、清掃後にたこ焼き 提供、卓球など	たなぼた協力
2017年 度後期	のぞみ野地区全域	サークルはできたが認 知が低い。楽しみの場が 少ない	サークルに協力を仰ぎ、 将棋、ビンゴ大会など	たなぼた協力
2018年 度前期	新沼田第二復興住宅 （のぞみ野地区）、	集まりに子どもの参加 が少ない	団地会主催の夏祭りに 協力し、子ども企画など	たなぼた協力。授業後、AsOneの活 動場所
	新西前沼第二復興住 宅+周辺の自立再建 住宅（あゆみ野地区）	自立再建住宅の住民が 集まりに参加しない	団地会に協力を仰ぎ、流 しそうめんの提供など	たなぼた協力。たなぼた活動場所

※波板集落での活動のみ、学生ボランティア団体「インクストーンズ」の活動を通じて関係性の構築されていた波板地区会に協力依頼

(3) サービス・ラーニングからボランティア活動への展開：2016年度～2018年度

2016年～2018年度にかけて行ってきたサービス・ラーニングを通じた支援活動は、自主的なボランティア活動にも影響を持つものとなってきた。表2では学生ボランティア団体との関連を含めてまとめている。2016年度前期の授業終了後には、受講生が担当教員であった藤室氏による働きかけもあって、ボランティアサークル「たなぼた」を発足させた。この「たなぼた」は、のぞみ野地区を含む授業で活動を行なった場所で、自主的なボランティア活動を継続しながら、2016年度後期以降のサービス・ラーニングによる支援活動に参加・協力し、授業終了後には意欲ある受講生が「たなぼた」メンバーに加入するという循環関係が（ある程度）構築されてきた。もう一つの影響として、2018年度前期のサービス・ラーニングでは、のぞみ野地区の新沼田第二復興住宅で団地会と一緒に夏祭りを企画したが、団地会からは次年度以降も祭りの共同企画を期待する声があがることになった。しかしたなぼたなど既に災害公営住宅での活動をもつ団体にとっては、新たな活動場所を加えるのが難しい状況であったために、受講生が所属していたAsOneに働きかけ、活動場所の一つに加えてもらう形となっている。

以上のようなサービス・ラーニングを通じた活動の結果として、のぞみ野地区（+あゆみ野地区）では学生の自主的なボランティア活動をベースとした支援が立ち上がることになった。また地域の視点からみても、団地会・町内会、被災者有志、各種支援団体の連携によって「コミュニティ形成」や「見まもり」の取り組みがある程度みられる状況を迎えた。しかしながら同じ石巻市内には、支援の限界で触れたように、課題を抱えながらも取り組みが進まない場所が各地に存在してきた／今でも存在している。そこで松原が教員に着任した2019年度後期には、全く新たな場所でサービスラーニングを通じた活動を試みることにした。

4. サービス・ラーニングと学生ボランティア活動の相互連関：2019年度

(1) A住宅の課題

2019年度後期の開講にあたっては、最初に石巻じちれんの視点から支援の意義がある（＝住民主体の活動が進んでおらず支援も不足している）災害公営住宅のリストアップを依頼した。そのうえで石巻じちれんスタッフと面識のある被災者が住んでおり、学生の受け入れに対しても積極的であった、中心地区のA住宅を活動場所とさせていただくことにした。

A住宅は7階建て54戸の中規模高層住宅である。この復興住宅では石巻市内各地から「抽選入居」で集まった住民が生活しているが、全世帯のうち7割以上が一人暮らし世帯であり（54戸中39戸、72.2%が1LDK）、そのうちの多くが一人暮らしの高齢者である。ここから特に「見まもり」や「コミュニティ形成」が求められる環境といえるが、活動場所を定めた2019年10月時点では、住民自身による交流イベントやサークル活動などは生まれておらず、支援者が住民の活動・取り組みを支える状況にもなっていなかった。その経緯を、石巻じちれんのスタッフや授業企画に協力いただいた住民の方に伺った話をもとにまとめると、以下のようになる。

A住宅が完成し、入居が始まったのは2016年10月であり、入居して間もない時期に社会福祉協議会等の働きかけで住民主催のサロン活動が立ち上がり、集会所でお茶会などが定期的に開かれる状況になった。また住民組織「団地会」がパーベキューなどを通じて住民間の交流も促してきたために、住民の方曰く、互いに顔の見たことがある程度の関係ができるのは早かったという。ところが1年ほど前に、サロン活動や団地会の運営をめぐる金銭トラブルが発覚すると、サロン活動は停止、団地会役員も交代することになり、それ以降は年一回ある団地会の総会以外、住民同士で特段集まる機会がない状況が続いてきた。さらにA住宅では住宅管理方法の特殊性から、通常の復興住宅では義務的活動として行っている、住宅まわりの清掃なども実施していなかった¹¹。

住宅外からの支援として、A住宅周辺には以前から住む住民でつくる町内会があり、A住宅の完成時には、石巻市行政が町内会にA住宅の住民も入れるように働きかけがあった。しかし町内会側は、新たな住民が入ると町内会が保有する資産の分け前も与えることになるかと判断したため、加入を認めず、A住宅住民との交流も行なっていない状況であった。石巻市の行政や社会福祉協議会の動きとしても、福祉系支援員の地域福祉コーディネーターは担当者が頻繁に交代するために、A住宅の現状を把握して動いている訳ではなかった。そのなかでA住宅へ唯一支援に入ってきたのは、カーシェアを通じたサークルづくりを推進する「日本カーシェアリング協会」であり、2017年度には隣接するB住宅の住民と合同のサークルを発足させ、定期的にお茶会などを行なっている。ただし会場はB住宅であることから、足腰の不自由な方の参加は難しく、サークルの性質上、カーシェアを利用しない住民の参加も難しいという限界を抱えていた。

(2) A住宅での企画プロセス

以上のような経緯から、A住宅ではいずれの主体による取り組み・支援も見込みづらい状況が震災から9年目になって生じていた。そこで石巻じちれんスタッフ（元・日本カーシェアリング協会スタッフとしてサークル発足に関与）の仲介によってサービス・ラーニングを行なう運びとなった。

授業ではまず受講生自身にA住宅の課題を感じてもらうためにA住宅を訪れた（2019年10月22日）。具体的には、石巻じちれんスタッフにレクチャーをいただいたのちに、集会所で足湯カフェを開いた。足湯カフェとは、カフェで住民の方同士の日常会話などを伺いつつ、足湯で一对一だからこその個人的な話も伺えるという特徴があり、センターがサロン活動の手法として2012年ごろから各ボランティア団体の学生に講習している。そのためこの日もサポート役として「足湯カフェ」の経験者であるたなぼたの学生に参加してもらうことにした。この日の足湯カフェでは6名の参加があったが、いずれの方からも、集会所での集まりはほとんどなく住民同士で集まる機会は少ないという話があった。筆者もこの日に初めてA住宅を訪れたが、これまで仮設住宅やのぞみ野地区・あゆみ野地区などで使用頻度の高い集会所ばかり目にしてきたため、集会所にカレン

¹¹ A住宅のある建物は、復興住宅にあてられているのが一部分にすぎず、デイサービスを行なう事業所、分譲マンションも併設されている。このような空間配置から建物全体の管理は管理組合とその委託を受けた管理会社がしており、復興住宅共用部分の管理のみ「団地会」が行なってきた。

ダーさえ揭示していないのが印象的であった¹²。とはいえ一人ひとりの話しを詳しく聞いていくと、「家にいる時間がほとんどうつ気味である」「足腰が不自由で住宅外に出るのも難しい」などある種予想された課題と同時に、「家にいる時間は多いが編み物などの楽しみがある」「自転車で買い物や住宅外の友人に会いに行く」「デイサービスに知り合いがおり、息抜きにもなっている」「住宅内のつきあいは薄い、深いつきあいは望んでいない」など、つながりに関する複雑な実態や考え方が浮かび上がってきた。そこでフィールドワーク終了後の授業では、「住民同士で集まる機会がない」という程度の課題把握にとどまらず、KJ法を用いて印象的な語りをカテゴリー化し、相互に関連づけるように試みた。表3と①～④は、A住宅における課題を、受講生とともにカテゴリー化し、課題を構造化したものである。

【表3】 A住宅住民の語りとその分類

中カテゴリー	主な小カテゴリーとその語り
心身の不調	かつての心の不調（震災で夫が行方不明になって心の区切りがつかない。震災報道を7年目まで見れず） 今の心の不調（夜は不安なので安定剤を飲む。去年夫をなくしてうつ気味） 今の体の不調（一人で体調を崩して寝こむと大変。腕と肩を痛めている。首が痛い）
人づきあいの問題	人付き合いへのネガティブなイメージ（友達がいてもろくなことがない。なかには優しくない人もいる） 人づきあいのもろさ（震災前の友人に会ったが気づかれず。同じ階のひととは話しをしたことがあるぐらい、取材で関係ができたがすぐに途切れてしまった）
望む人づきあい	料理を通じた交流（二軒隣と会えば話し、料理のおすそわけもあり。料理のおすそ分けをする） 子ども・孫に会いたい／会えない（孫と文通するのが楽しみ。娘や孫とのかわりもない。孫もいるがめったに来ず寂しい）
外部からの働きかけ	支援・イベント減（仮設のときはボランティアが来たが今は来ない。住宅内でのイベントがなくなった） 今のイベントの改善点（話すことが苦手な人は参加しにくい。集会所でカラオケするがメンバーは固定）
外出への懸念	移動の問題（車がなく、自転車で出かける必要がある。最近歩けなくなってきた） 近くに良い店がない（日用品を買うには遠くに行く必要がある。買い物場所がない） 外に出ない（仕事をやめて日中は横になっている。テレビを見るぐらいしかすることがない。70～80代の一人暮らしがほとんどなので、外に出ることが少ない）
室内にいても満足していない	メディアを楽しめない（自分はアナログ人間。テレビを見ても楽しめない） 静かすぎてさみしい（みなし仮設の方が賑やかで良かった。今は隣の音が全く聞こえない）

①外出への懸念は、人づきあいの問題から移動問題まで、様ざまなものがある。

②外出への懸念から室内にいることになるが、そこに満足している訳ではない。この問題もあって、心の不調がうまれる

③人づきあいがないと、心の不調を相談でいないし、心の不調があると望むような人づきあいも難しくなる

④現状として外部組織からの働きかけに対する依存が大きい、働きかけには改善の余地がある

つづいて様ざまな課題のなかから受講生に企画で焦点をあてる部分を考えてもらい、企画案にしたものをもって再度A住宅を訪れた（12月1日）。この日はインクストーンズ、たなぼたの学生のサポートを受けて再度の足湯カフェを集会所で行なったのちに、集会所に来られた方二名のお宅を訪問し、お一人ひとりの生活状況や参加したい活動などを伺った。足湯カフェには8名の参加があったが、前回に引き続いての参加者からは、学生の名前や前回の会話などを口に出され、再会を楽しみにされていたことが印象的であった。

¹² 仮設住宅と比べて災害公営住宅の集会所が使われづらくなる一つの要因としては、集会所の光熱費が行政負担から住民負担へ移行するために、住民組織が集会所使用に伴う経済的負担を敬遠することがある。

(3) 企画実施とその後

最終的に決まった企画は、①住民の方同士で交流するきっかけの提供、②住民同士に限定されない、親しい関係性づくりのきっかけの提供、③周辺地域の活動とつながるきっかけの提供の三点を目的とし、①調理過程に関わってもらいやすく、食材を持ち寄ってもらい楽しみもある寄せ鍋づくり、②親しい関係性を生みやすい絵はがきづくりと文通の提案、③周辺地域で行われている地域食堂の提案をすることである。実施日は年をあげて1月の12日であったが、事前の広報として、チラシの配布とともに、一度集会所に来られた方には年賀状をお送りし、あいさつと活動予定の連絡を行なった。実施日の直前には団地会役員にも改めてあいさつへ伺い、企画の詳細に関する相談と住民の方に対する声かけの依頼を行なった。また当日の午前中にも、時間の許す限り個別訪問を実施し、お昼に提供する寄せ鍋づくりの宣伝、学生との文通の提案を行なってまわった。その後お昼時間になると住民の方に依頼していた一人一品の持ちよりを加えて寄せ鍋をつくり、食事をとおして住民間、学生・住民間での交流を図った。また食事後は、絵はがきづくりとして、住民の方に思い思いの飾りつけをしたはがきを作成していただき、はがきの送付先として①学生、②知人、家族等、③絵はがきを通じた文通のいずれかを提案することで終了した。

集会所に来て寄せ鍋づくり・絵葉書づくりに参加したのは12人である。そのうち過去2回のいずれかに参加していたのは8名であり、5名ほどは、こちらから協力を依頼していないにも関わらず、寄せ鍋づくりのなかで、調理器具の提供や調理、配膳の補助といった形で協力の声をもらうことができた。なお以前の活動で参加のあった住民の方同士であっても、新年のあいさつを交わす様子がみられ、日常のA住宅では互いに顔を合やす機会ほとんどないことも伺えた。絵はがきづくりでは、飾りつけた絵はがきを参加者同士で楽しそうに見せあったり、最近連絡することのなくなった孫にだそうと心はずませる参加者の様子が見られた。また企画終了後には、同じ顔ぶれでまた来てほしいといった声が参加者からあがり、団地会役員からも継続的活動を望むお話があった。

以上のような住民の方の反応などから、住民同士で交流する機会が途絶えていたA住宅にとって、実施した活動は住民同士で親しく交流する場、そして住民と学生の親しいつながりが生まれる場として住民・学生双方に（若干でも）影響をもたらす活動になったことが窺える。また授業後の受講生の動きとしても、活動を通してA住宅の住民の方と親しいつながりが生まれたため、改めてA住宅を訪問し、活動を実施する方向で話しあっている状況にある。そこで自主的なボランティア活動としての継続も（現時点では）見込めることになっている。

【表4】2019年度後期サービスラーニング科目の概要

開講期	石巻市内の活動場所	焦点をあてた課題	実践内容	学生ボランティア団体との関係
2019年度後期	A住宅（中心地区）	集会所が活用されておらず、住民同士で集まる機会がない	戸別訪問、団地会に協力を仰ぎ、寄せ鍋、絵葉書づくり	たなぼた、インクストーンズ学生の協力

5. 正課・課外リンクを通じた被災地支援の意義と課題

本稿では以上、石巻市の事例から、正課によるサービス・ラーニングと課外のボランティア活動の相互連関（リンク）を意識した被災地支援の展開過程をみてきた。では最初の問いに立ち返ると、サービス・ラーニングの開講を支援活動としてみるとどのような意義があるのか。またセンターが推進してきたサービス・ラーニングとボランティア活動を連関させる正課・課外リンクの試みは、支援活動としてみると何かしらの意義があるのか。この点はセンターが石巻市で行なってきた事例に即してみると、それぞれ二つの意義を見出すことができる【表5】。

【表5】正課・課外リンクを通じた支援活動の意義

支援活動の側面	意義	課題
---------	----	----

学生のボランティア活動	関係の継続性を前提とした支援、学生住民間のつながりやそれを媒介とした住民間のつながり	活動場所の固定性、活動内容の（ある程度の）固定性
サービス・ラーニング	支援場所・課題設定の柔軟性、課題をベースとした活動内容の柔軟性	活動の時限性、活動内容を一から考える困難さ、カウンターパートの必要性
サービス・ラーニングとボランティア活動の関連	ボランティア活動のインキュベーション、サービス・ラーニングによる活動の継続	ボランティア団体の学生との綿密なコミュニケーション、設計の難しさ

前者の意義として、一つ目には、支援場所・課題設定の柔軟性である。東北大学では被災三県のなかでもとくに石巻市でボランティア活動が活発に行ってきたが、学生ボランティア団体は特定場所での継続的支援を前提としていることから、A住宅のように課題を抱えながら支援の入らない場所があったとしても、そこで新たな支援活動を始めるのが難しくなってきた。それに対してサービス・ラーニング科目での支援活動は、授業として教員から活動場所や大まかな課題を提案できるので、被災地における状況の変化や支援の偏りに対応して、柔軟に支援活動を進められるという特徴がある。二つ目は、課題をベースとした活動内容の柔軟性である。センターのサービス・ラーニング科目では、支援団体からの講話や住民リーダーとの対話、サロン活動に参加した住民との対話、KJ法の導入などを通じて、まずは活動場所の抱える複雑な課題を理解してもらったうえで、取り組む課題を設定し、それに応じた活動を行なってもらうことを促してきた。このような活動内容は、他の支援主体が明確な活動理念（NPO・ボランティアグループ）や得意とする活動（学生ボランティア団体）の存在から、必ずしも課題ベースで活動内容を定めるとは限らない点をふまえると、一つの意義といえる。

後者についても二つの意義が見いだせる。一つ目は、ボランティア活動のインキュベーション機能である。具体的には新たな学生ボランティア団体の立ち上げを促す、既存の学生ボランティア団体に新たな活動を促すといった点が挙げられる。既にみたように、センターによるサービス・ラーニング科目の開講は、たなぼたの立ち上げやAsOneによる新たな活動場所づくりにつながるようになった。また今年度に行なったA住宅での活動ではインクストーンズの学生にも参加してもらったが、そこで出た絵がきづくりや文通のアイデアは、インクストーンズの活動だと出てこなかったものであり、新たな活動の形を知ってもらう機会となった。二つ目は、サービス・ラーニングによる支援活動の継続機能である。こちらは一つ目の意義を別の視点からみたものにすぎないが、サービス・ラーニング科目では授業という性質上、活動期間の短さという限界がある。そこで受講生によるボランティア団体の立ちあげ、既存の学生ボランティア団体への組み入れなど、授業を前提としない支援活動のあり方も視野に入れておくと、支援活動の継続性を高めることが可能となる。

とはいえ、サービス・ラーニングやそれをボランティア活動と関連させる試みを意義あるものとするためには、表5に示した通り、様々な課題があることも確認しておく必要がある。石巻市での支援が上記のように意義ある形になった背景には、学生や教職員の相談に適切な対応をしていただけたカウンターパートの存在（石巻じちれん）、教員側における支援者としての経験（歴任教員はいずれも自ら被災地支援を实践）、支援のタイミング（震災から9年目をむかえ支援が縮小傾向にある時期）など、様々な偶然の要因が影響しており、予め設計を行なったうえで定まってきた訳ではなかった。また石巻市で行なってきたサービス・ラーニングは、授業運営上の課題として、まとまった時間のとれる休日や授業時間外も使う必要性、開講期ごとに適切な場所やテーマを用意する必要性、カウンターパートやボランティア団体の学生と綿密なコミュニケーションを行なう必要性など、受講生にとっても教員にとっても負担の大きい形となってきた。そこで今後の課題としては、石巻市で取り組んできた経験をより一般化可能かつ維持可能な形へと翻訳し、正課・課外リンクに基づく支援活動の推進方法として定式化していく必要があるといえる。

参考文献

- 江口伶, 2018, 「課外・ボランティア活動支援と正課教育の連携事例とその可能性」東北大学課外・ボランティア活動支援センター『2017年度課外・ボランティア活動支援センター紀要』, 6-12.
- 藤室玲治, 2019, 「学生ボランティアによるコミュニティ支援活動」未発表草稿（本人の許諾を得て参照）.

- 藤室玲治・江口伶, 2017, 「サービス・ラーニングを通してつちかう〈地域視点〉と〈人権感覚〉—東日本大震災以降の薄らなボランティア活動支援と市民性教育の可能性—」東北大学課外・ボランティア活動支援センター『2016年度課外・ボランティア活動支援センター紀要』, 2-18.
- 復興庁, 2019, 「復興・創生期間」後における東日本大震災からの復興の基本方針」復興庁ホームページ, (2020年3月15日取得, http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat12/sub-cat12-1/20191220_kihonhoshin.pdf)
- 本間照雄, 2013, 「災害ボランティア活動の展開と新たな課題—支援力と受援力の不調和が生み出す戸惑い—」『社会学年報』44, 49-64.
- , 2018, 「被災住民が担い手になった生活支援員(LSA)とコミュニティづくり」『社会学年報』47, 25-35.
- 菊池遼・藤室玲治, 2020, 「コミュニティとの協働から学ぶサービス・ラーニング」佐藤智子・高橋美能編著『多様性が拓く学びのデザイン—主体的・対話的に他者と学ぶ教養教育の理論と実践—』明石書店, 138-163.
- 菊池遼・藤室玲治・江口伶・松原久, 2020, 「被災地・者の〈自立〉に向けた学生ボランティアの葛藤と模索—東北大学が受け継いだ系譜と新たな展開」吉原直樹ほか4名編『東日本大震災と〈支援と自立〉の記録(課題)』六花出版(未完), 40ページ.
- 木村玲玖, 2017, 「被災者の復興への意識」ひょうご震災記念21世紀研究機構『東日本大震災の復興状況に関する調査事業報告書』, 23-39.
- 松原久, 2019, 「住宅再建ルートからみたコミュニティ再建支援の不均等性問題—宮城県石巻市の事例」第18回コミュニティ政策学会大会発表資料.
- 中原一步, 2011, 『奇跡の災害ボランティア「石巻モデル」』朝日新聞出版.
- NHK, 2020, 「9年たっても復興しない～被災者2000人の「復興カレンダー」」NEWS WEBホームページ, (2020年3月15日取得, <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200304/k10012311741000.html>)
- 日本NPO学会震災特別プロジェクト東北班, 2017, 「東日本大震災後設立のNPOにおける活動実態と今後の展望」調査報告書」日本NPO学会ホームページ(2020年3月15日取得, <http://janpora.org/shinsaitokubetsuproject/20170407.pdf>)
- 佐久間政広, 2018, 「災害公営住宅におけるコミュニティ形成に関する若干の考察」『社会学年報』47, 49-56.
- 桜井政成, 2007, 「地域活性化ボランティア教育の深化と発展: サービス・ラーニングの全学的展開を目指して」『立命館高等教育研究』7: 21-40.
- 地星社・宮城県サポートセンター支援事務所・東北圏地域づくりコンソーシアム, 2018, 「被災地における福祉系・地域系支援員調査事業調査報告書」地星社ホームページ, (2020年3月15日取得, https://chiseisha.org/info/shienin_chousa/)
- 全国コミュニティライフサポートセンター, 2014, 「ガイドブック 災害公営住宅ができた!—「入居する人」「受け入れる地域の人」が知っておきたいこと—」(2020年3月15日取得, http://www.clc-japan.com/research/pdf/20140326_2.pdf)

サービス・ラーニングプログラムの成果と課題

—市民性教育を視点に—

横関 理恵¹³

課外・ボランティア活動支援センター

1. はじめに

本稿の目的は、2019年度に東北大学課外・ボランティアセンターで開講してきたサービスラーニングを取り上げ、その市民性教育としての意義と課題を検証することである。

高等教育においてボランティア活動、あるいはボランティア活動を組み込んだ授業（ボランティア学習、サービスラーニング）が積極的に推進されるようになって久しい。2000年以降、中央教育審議会の答申や文部科学省の様々なGP（Good Practice）事業等を通してそうした取り組みは後押しされてきた。2012年に中央教育審議会の答申¹⁴にサービスラーニングは「一定の期間、地域のニーズを踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組みや進路に新たな視野を得る教育プログラム」と盛り込まれ、大学教育におけるボランティア活動への期待が高まっている。

本学においては、2011年の東日本大震災をきっかけに設立された東日本大震災学生ボランティア支援室が発展解消し、現在では、課外・ボランティア活動支援センターが存在している。震災後に学生のボランティア活動への支援が始まり、2014年度より正課科目サービスラーニングを提供している。

サービスラーニングの教育的意義は、様々な点から指摘されている。例えば、人々の生活世界と当事者性に根差して社会を眺める〈地域の視点〉を獲得し、人権侵害を見逃さず声をあげられる〈人権感覚〉を育成する点（藤室・江口 2016）や、筆者の問題関心と最も近い研究に「学生ボランティアは福島で何を学んでいるのか—ボランティア活動を通じた市民性教育の試み—」

（江口、2017）がある。福島におけるボランティア活動を通じた学びは普遍的な人権の尊重の視点を獲得し市民として社会課題に寄り添う資質・技能を身に着ける上で適しており、「人権教育を基盤に置いた市民性教育」として構想しようと指摘している。（若槻 2014）先に示した2012年の中央教育審議会答申においても、「市民性教育」という直接的表現ではないもののサービスラーニングの重要性は指摘されている。サービスラーニングが提供する「市民性教育」とは何か。この点を掘り下げるために、本稿では、「市民性教育」の観点から、サービスラーニングを考察しその意義と課題を考察する。

以下では、まず、サービスラーニングの基本的概念を確認し（1）、事例で取り上げる授業概要について述べ、（2）、市民性教育のインパクト—学生は何を学んだかを検討する、最後に、サービスラーニングにおける「市民性教育」の意義と課題について整理する（4）。

2. サービスラーニングとは

ここでは、サービスラーニングについて述べたい。サービスラーニングとは、アメリカ発祥の学習方法の一つである。サービスラーニングの定義は多様であり統一されていない。例えば、Jacoby(1996)は「体験的教育の一形態であり、学習と発達を促進するよう意図的に計画された構造的機会の中で、学生が人間の尊厳やコミュニティで必要とされるニーズに応える活動に

¹³ よこぜき りえ、特任助教、rieyokozeki.a7@tohoku.ac.jp

関与する」と定義している。この定義から明らかなのはサービスマーケティングとは次の特徴を兼ね備えていることである。第1に、ボランティアを通じて、現実の社会へ何等かのインパクトを与えることである。上記の定義においては「学生が人間の尊厳やコミュニティで必要とされるニーズに応える活動に関与する」という表現にそれがみられる。ただ単に、授業として用意された疑似体験ではなく、今を生きる人との関わり合いの中で、自らの行為が、人やコミュニティの役に立っているという現実味を伴った体験こそが、サービスマーケティングでは重要である。一方で、第2に、サービスマーケティングは、教育を目的とした構造化されたプログラムである。上記の定義においては、「学習と発達を促進するよう意図的に計画された構造的機会」と表現されている。つまり、学習の目的に沿ったボランティア活動に取り組みなければならないということである。サービスマーケティングはこの2つのキー・コンセプトによって実施される。ただし、授業の一環での強制的なボランティア体験とは異なる。また、地域コミュニティへの貢献が明示されない大学等での実習、インターンシップとも異なっている。つまり、サービスマーケティングの思想の潮流には、学校は子どもたちが活動的な社会生活を営む小社会であり、受動的な学習の場ではないとするデューイ（1859-1952）の思想（『学校と社会』）がある。「受動的な学習の場ではない」とあるように、強制的なボランティアを強いるのはサービスマーケティングとは相いれないものであることには留意が必要である。この考えに基づいて、サービスマーケティングは初等教育から、高等教育に至るまで理論的・実践的広がりを見せてきたといえる。

このようなサービスマーケティングの2つキー・コンセプトを用いて課外・ボランティア活動支援センターは、事業の柱の一つに東日本大震災被災地の復興及び地域社会・国際社会に貢献し得る人材の育成を目的とした、社会貢献型の体験学習（サービスマーケティング）を企画実施している。また、東北大学ビジョン2030の重点戦略①「社会の転換期を生きる学生の創造力を伸ばす教育の展開」の主要施策の一つ「豊かな経験を通じた、人間形成を促す課外活動・社会貢献活動の充実」に位置付けられ、課外・ボランティア活動を正課の教育に活かすサービスマーケティングの取り組みは重要視されていると思われる。以下では、課外・ボランティア活動支援センターが提供するサービスマーケティングの実践についてみてゆきたい。

3. 課外・ボランティアセンターのサービスマーケティングとは

(1) サービスマーケティング科目の実践例

ここで、2019年度実施した展開ゼミ（課題解決型演習A）「福島における人権保障と共生の課題—原発事故以降を生きる人々に寄り添う」の授業概要とその特徴をまとめてみたい。この授業は2017年度（第2セメスター）前任の江口怜氏によって創設された授業である。江口氏は2016年の着任以来、福島県内でボランティア活動を行う福興 youth の活動に携わってきた。福興 youth は東日本大震災学生ボランティア支援室福島部門として発足し、2012年頃から原発事故の被災者が入居する仮設住宅・復興住宅等でコミュニティ支援活動に取り組んできた。2014年頃からはいわき市を拠点に津波の被災地域や原発事故被災者が入居する仮設住宅・復興住宅等でコミュニティ支援活動に取り組んできた。これらの活動を支援する中で得られた知見や人脈をもとに江口氏が開講したのが今回事例に取り上げる授業である。2018年度に江口氏が転任され、この授業は横関が担当することになった。江口氏が作り上げた授業のコンセプトや福興 youth との協働による授業体制等を基本的には継承しており、ボランティア受け入れ先の状況の変化などに合わせて改変を加えつつ実施した。2019年度は受講生15人であった。

この授業は、以下の目的の下で行われた。

2011年3月11日の東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故は、多くの人びとの暮らしを破壊し、社会に亀裂を生んだ。社会全体として風化が進む中で、未だ5万人を超える避難者が存在し、避難指示解除後に帰還した人々も新たな暮らしの課題に直面している。福島県では事故4年を経て自殺者が急増し、その背後には「曖昧な喪失感」があるとの指摘もある。さらに今回の原発事故は、原子力政策や被曝、帰還等に関する見解の相違が、地域社会や家族内に分断を生じさせ、事故以前と同様の暮らしを営むことやコミュニティを維持することを困難にしまった側面があり、課題の複雑さを現場で学ぶことの意義は大きい（2019年度シラバス抜粋）。

学習到達目標には、次の3つを掲げた。①福島第一原子力発電所事故によって生じた被害や課題について、具体的な事例に即して理解する。②福島第一原子力発電所事故のもたらした課題を解決するための様々な取り組みについて、その意義と課題を具体的な事例に即して理解する。③福島の抱える課題の解決のために必要なことについて、フィールドワークでの経験や調査に即して具体的に考え、自分自身に関わる問題として考察することができる。③にあるフィールドワークには、福島県双葉郡川内村でのボランティア活動も含まれている。

【表1】にあるように授業計画（セメスター）は、15回の構成である。大きくは前期、中期、後期に分かれる。前期は、主に、東日本大震災に伴う福島第一原発事故と人々の暮らしへの影響を学び、支援者から現地の情報を学ぶ回とした。原発避難指示が出た当時の福島県川内村の状況が分かる証言記録を視聴し原発事故発生時の状況を学び、避難指示により地域社会や家族に分断が生じた状況など現地を訪れる前に知っておくべき基本的な情報を学ぶことを目的とした。

NPO 法人コースター代表理事坂上英和氏から川内村でのボランティア活動に関してご講話をいただいた。福興 youth にも、福島でボランティア活動に参画したきっかけとその思いについて話してもらい議論する場を設けた。さらに、事前フィールドワークのボランティア活動にて足湯をするので、事前講習会を福興 youth がそれを担った。支援側の NPO 法人の方や、福興 youth と話し合う機会を作り、支援の在り方や、ボランティア活動の内容を受講生に具体的なイメージをしてもらうことをねらいとした。中期は、前期の情報をもとに、3段階のステップを基本的な流れとした。①事前学習（学内）→②事前フィールドワーク・ボランティア（課外）→③振り返りを基本的な流れとしている。詳細は後述する。後期は、最終フィールドワークの企画について受講生同士で議論し、福島県川内村でのボランティアツアーとボランティア活動の企画立案をする時間とした。その内容に入る前に、以下で、事前学習について詳しく見てゆく。

(2) 事前学習

本授業で事前学習と事前フィールドワークを設けた。その目的は、①原発事故と福島のコミュニティの課題とその支援を学ぶこと、②参加者同士の関係性の構築である。事前学習のステップは、事前調べ学習（報告）、事前フィールドワーク（体験報告）とした。①、②とも現地に入る前に必要なことであるし、特に、ボランティア活動をする上で、チームワークは不可欠であると考え②を設けた。

まず、事前学習において、学生自身に今後の社会とのかかわりや学術的な関心へと自然に接続できるような授業ステップになるよう意識的にデザインした。具体的には、最終フィールドワークで訪れる福島県に関して、現場に入っただけで支援活動をコーディネートしている NPO 法人から情報提供を頂き、これをもとに、学生一人ひとりが、福島県に潜在・顕在している問題群、あるいは、将来像や可能性について情報収集・分析を行い、授業でプレゼン・ディスカッションをした。その結果から、現地で求められてる支援ニーズとは何か、仮説を立てた。受講生が事前調べ学習で選んだテーマの特徴は、大きく分けて、3つであった。〈i〉原発事故とその被害に関するテーマ（「安全と危険の境界線」、「子どもたちへの被害と原発の是非」「福島第1原発、第2原発～放射能汚染土壌処理問題から考える」、「福島の風評被害について」）、〈ii〉支援活動に関するテーマ（「阪神淡路大震災から考える福島への支援～ふくしま学びのネットワークの活動～」、「福島の魅力の発信者たち」、「自分の身近で行われた復興活動について」、「福島県の漁業」「福島県いわき市について」）、〈iii〉福島復興に関するテーマ（「福島

【表1】 授業計画

回	日程	概要
1	10月4日	オリエンテーション
2	10月11日	NHK明日へつなげよう証言記録・東日本大震災「福島県川内村～隣人との原発避難」視聴、今後の授業計画の確認
3	10月18日	東北大学福興youthの報告とディスカッション（協力:福興youth） 事前学習会の日程決め
4	10月25日	事前FWの振り返り、調べ学習の報告①（10分報告+10分議論×4人）
5	11月1日	川内村の現状と課題に関する講義（NPO法人コースター代表理事・坂上英和氏）
6	11月8日	事前FWの振り返り、足湯講習（協力:福興youth）
7	11月15日	休講
8	11月22日	事前FWの振り返り、調べ学習の報告②
9	11月29日	事前FWの振り返り、調べ学習の報告③
10	12月6日	事前FWの振り返り、調べ学習の報告④
11	12月13日	事前FWの振り返り、調べ学習の報告⑤
12	12月20日	フィールドワーク中の視察先および企画の検討①
13	1月10日	フィールドワーク中の視察先および企画の検討②
14	1月24日	フィールドワーク最終調整
15	2月6日-8日	福島県川内村ボランティアツアー（フィールドワーク）、最終日に全体振り返り
事前フィールドワーク（ボランティア活動：協力 福興youth）		
	10月26日・27日	永崎団地・下神白団地秋祭りボランティア派遣（露店運営等）
	11月10日	富岡町の福祉祭りにおけるボランティア活動（足湯・健康チェック）
	11月16日	川内村公営住宅におけるボランティア活動（学童）
	12月15日	いわき市の県営下神白団地・市営永崎団地の住民を対象としたボランティア活動
	1月11日	川内村公営住宅におけるもちつき&新年会ボランティア活動

復興について、「震災から八年～町の歩み」、「帰還政策は原発避難者のためになっているのか」や「原発と原爆～なぜ、福島へは帰れないのか～」、「災害関連死～なぜ福島では震災関連死が多いのか～」、「原発の安全神話とその歴史」)であった。

②事前フィールドワークについては、福興 youth のボランティア活動に受講生が参加し、その活動報告を授業で行い共有した。

受け入れ先との調整は、コーディネーターをしていただいた NPO 法人コースターの坂上氏、福興 youth と適宜、スケジュール調整や現地での活動内容について打合せをして決めた。事前フィールドワークは 5 回実施し、永崎団地・下神白団地（いわき市）の秋祭りの露店出店ボランティア、福祉祭り（富岡町）の健康チェック・足湯ボランティア、公営住宅の住民交流会でのボランティア（川内村・芋煮会）、永崎・下神白団地のクリスマス会のボランティア（いわき市）、公営住宅もちつきボランティア（川内村）【表 1】で行った。基本的には一人 1 回参加しその活動報告を「振り返りシート」に書いて、提出することにした。受講生の中には、複数回、事前フィールドワークに参加しているものや、福興 youth のメンバーが受講生もおり、ボランティア活動の中で関係性が構築されていった。中には、この授業をきっかけに、福興 youth へ登録したものいた。

事前フィールドワークでボランティア活動を行い、事前学習の際、受講生同士でたてた仮説と現場でのニーズがあっているかどうか体験し、それを授業で持ち帰り報告しさらに内容を詰めた。

(3) 2月のフィールドワーク企画

最終フィールドワークとボランティア活動（2020年2月6日～8日）の企画・実施までを紹介したい。

授業で「最終フィールドワークの目的・コンセプト」、「スケジュール（案）（訪問先）」の検討を行う際、前提条件として、「2泊3日、その内、半日を使い川内村の住民を対象に交流イベントを行うこと」を伝えた。また、2月の最終フィールドワークは福興 youth と共催であり、宿泊費の支援を受けて実施される事を伝えた。学生が自由に企画案を提示することを伝えた。グループワークでは、最終フィールドワークの「目的・コンセプト」、「川内村以外で訪問・視察したい場所・やってみよう企画」、「川内村で訪問・視察したい場所・やってみよう企画」を自由に書き出し、その後、グループディスカッションをした。その経緯を経て、このフィールドワークの目的と視察先（案）が決まった。その案をもとに現地コーディネーターと教員とで調整を行い、フィールドワーク企画の内容が決まった【表 2】。

【表 2】 2月フィールドワーク

日程	時間	行程
2/6(木)	09:00	東北大学 集合
	10:00	東北大学 発
	12:00	浪江町浪江地区視察 浪江町仮設商業施設
	13:00	「まち・なみ・まるしえ」視察 東京電力廃炉資料館
	17:30	さくらモール 川内村いわなの郷
	18:30	晩さん会準備・振り返り会
2/7(金)	8:30	川内村いわなの郷発
	10:00	富岡町 3.11 を語る会（代表青木淑子氏） （富岡町文化交流センター予定）
	13:00	AFW 吉川さんの講演（木戸の交民家）
	14:00	福島県立双葉未来学園 NPO カタリバ
	17:00	
	18:00	翌日の打ち合わせ
2/8(土)	8:00	川内村いわなの郷
	9:00	交流会事前打ち合わせ
	10:00	川内村交流会
	14:30	川内村出発
	17:00	東北大学着
	18:00	振り返り（東北大学）
19:00	解散	

(4) 2月のフィールドワーク実施

以下、本授業の最終フィールドワークの概要を以下に紹介する。

フィールドワークの目的は以下の通りである。①東日本大震災および福島第一原子力発電所事故により大きな被害を受けた福島県で、震災当時の現状や、現在のニーズを学ぶこと。②被災者や現在福島で暮らす方たちが世代を越え暖かく触れ合い、楽しめる交流の場づくりをすることを通して、参加した住民同士が今回の活動後にも繋がりあえるようなボランティア活動に挑戦すること。③川内村の現状や課題について、自分事として捉えられるようになり、さらに、県外などに広く発信できるようにすることとした。

最終フィールドワークのスケジュールは、2月6日（木）に東日本大震災で津波被害にあった浪江浪江地区を視察した後、浪江町浪江地区商業施設「まち・なみ・まるしえ」を視察した。その後、東京電力廃炉資料館を見学したのち、宿泊先の川内村いわなの郷へ移動した。7日（金）は、富岡町 3.11 を語る会代表青木淑子氏から被災直後の避難生活等の講話を聞いた後、

檜葉町へ移動し一般社団法人 AFW 代表吉川彰浩氏による福島原子力発電所の模型を見ながら、福島第一原発事故の問題とその地域で生きる人々の生活に関する講話を聴き、福島双葉未来学園・NPO 法人カタリバで、福島の若者支援の現場を視察した。2月8日（土）はいわなの郷にて川内村の交流会で活動をした。

最終日のボランティア企画は、川内村の住民同士の交流会の運営だった。川内村の交流会は、震災後、原発事故により、全村避難せざるを得なかった住民にとっては、同窓会であった。そのような事情を知った学生たちは、目標②にある「被災者や現在、福島で暮らす方たちが世代を越えて暖かく触れ合い、楽しめる交流の場づくり」を実現することを考えた。学生たちには「企画立案シート」を配布し、①ボランティア企画の目的、②企画実施方法、③当日の進行の流れ、④必要な物品、⑤物品予算を明記することを伝えた。学生たちは以下のように企画案を作成した【表3】。

「川内村地図作りグループ」は、川内村地図作りを通して交流を深め、住民に川内村の魅力を再確認する機会を提供し、後日、川内村の魅力を外に発信する企画を立て、また、「節分グループ」は、節分飾りの工作を通して、住民同士のみならず、学生とも交流し、節分飾りの文化を子どもに伝える企画を立てた。フォトフレームグループは、「同窓会を思い出せるよう当日の写真を入れられるようなフォトフレームづくりを住民と行い、手芸しながら住民同士が交流しやすい場づくり」を企画した。



写真：川内村交流会ボランティア活動の様相

【表3】学生が立案・実施したボランティア企画

グループ名	目的	実施方法	必要な物品・予算
川内村地図作り	同窓会の立ち位置。地図作りを通して、人と人との交流を深める。川内村の魅力を住民同士の中で再確認。福興 youth に持ち帰って川内村の魅力を外に発信する。	川内村の大まかな地図を模造紙に描いておく。お茶を飲んだり、団らんを楽しみながら川内村の魅力ある場所を考えてもらい、その内容を付箋に書き込んでもらう。それらを地図とは別の模造紙に場所ごとに分類して貼る。	模造紙：1, 2枚 ペン：プロッキー2ケース付箋：たくさん 紙：適量（付箋を分類して貼る用） 予算：必要なし
節分	節分飾りの工作を通して、住民同士や、学生と住民の交流を行う 節分飾りを知らない子供たちに、節分飾りについて知ってもらう	長机に座り住民と話しながら、オリジナル節分飾り（柊鰯）をつくる	予め節分飾りで必要となる割り箸、折り紙を準備・ポスター作り 当日折り紙で鰯と柊を折って割り箸と合体させるという工作を行う 模造紙に節分飾りの由来などを描いて貼る 80個分の準備予定。 予算：400円
フォトフレーム	来てくれた人が今後も同窓会を思い出せるよう、当日の写真を入れられるようなフォトフレーム作りを行う。 ・簡単な手芸をしながら、住民同士が交流しやすい環境を作る。	住民とフォトフレーム作りをしながら、班員で飲み物、お菓子を提供する。 ○フォトフレームの作り方 （準備）厚紙と布は事前に切っておく。 ①厚紙にボンドで布を貼り付ける。 ②パンチで穴を開け、麻ひもを通す。	厚紙、両面テープ、ボンド、布、リボン、レース、マスキングテープ、接着剤、麻ひも、壁紙、人工芝、シール、フェルト 予算：5839円

(参照) 表 3 は各班の「企画立案シート」を参照した。

(5) 事後学習

本授業では、事前フィールドワーク（ボランティア活動含む）後、最終フィールドワーク（同）後にそれぞれ、2回レポートを書くことを課題とした。受講者にとっては、最終フィールドワークのレポートの作成は、サービスラーニングプログラムをすべて終えた後、最終的な「振り返り」に当たるものとなる。

2月最終フィールドワークでは、現地視察、及び、ボランティア体験をしたことを踏まえて、次のテーマで振り返りをした。①福島第1原発事故以降に生じた課題とは何か、②その課題を解決するための取り組み、その意義と課題、③福島が抱える課題解決に向けて、フィールドワークの経験を通しての意見交換、④フィールドワーク・ボランティア活動を企画運営した感想。この4点は、本授業の最終レポートの課題と2月最終フィールドワークの振り返りをリンクさせている。ふりかえりでの議論を活かして最終レポートに取り組みるように意図した。このように、活動後、学習目的に沿って、学生自身が何を学んだか、という「振り返り」を活動中や活動後に行うことが重視されている。



写真：最終フィールドワーク振り返りの様子 2/8

4. 考察：市民性教育インパクト—学生は何を学んだか—

サービスラーニングが提供する「市民性教育」とは何か。サービスラーニングの学習成果の一つには、市民性の育成がある。ここでいう市民性とは、対人関係能力や認知的発達などの個人的資質のことである。一般的に、市民性のある個人として想起されているのは、政治に参加できる人、リーダーシップを発揮できる人であり、「市民」と呼ぶ。これは、21世紀初頭以降、市民性教育の主流をなす考え方である。

しかし、近年、サービスラーニングの学習成果に対する批判もある。サービスラーニングの導入が進められる中、政治や社会に自発的に参加できる人、市民性が備わっている人の育成が十分ではない。すなわち、公共的問題を意識できるような市民性が、サービスラーニングでは育てられていないという批判である。

では、学生の市民性はどのような具体的な態度として現れていただろうか。授業参加者のレポートから見てゆく。

(1) 公共性に関わる社会問題への意識化

サービスラーニングの授業を受けた学生 A と学生 B の事例は、社会や教育に関わる公共的問題に対して、授業を受ける前、フィールドワークに行く前とでは考え方が変化すると述べている。学生 A は次のように述べる。

(学生 A)

今回、事前学習やフィールドワークを通して一番に思ったことは、福島第一原発事故やそれによる避難生活などについて調べることは一見ただの勉強であり私自身には関係ないように感じるが、よくよく考えると自分の人生にも関わりうるヒントが隠されていることがあるということだ。フィールドワークで Y さんから聞いた言葉で印象的なものがあった。「当時の東電の職員たちは、自分たちの行動が誰かの過去をつくるということをもっと考えるべきだった」というものだ。これを聞いて私は、自分の行動も誰かに影響を与えるということを再認識させられた。他にも、様々な事柄を聴くたびに、これは自分にも当てはまると感じたものがたくさんあった。震災学習はただの勉強ではなく、一種の人生学習でもあるということ、そして私たちが過去から学べるものはたくさんあるということ、この授業を通して強く実感した。

事前学習で福島第一原発の問題や避難生活について取りあげた際には、正課の授業の一環として捉えていたにすぎないが、フィールドワークでY氏と出会い、「自分たち過去の行動が誰かの過去を作る」という言葉によって、個人と社会の関係性に気づかされている。これは、自分ひとりの問題であるはずのものが、「誰か」と呼ばれる不特定多数の問題、公共的な問題（みんなの問題）であると考えようになったということだろう。

また、学生Bは、公教育でのある違和感を以下のように述べている。

(学生B)

青木さんに伺った話でも、なかなか震災のことや原発事故のことは教育で扱われないとのことで、とても違和感を覚えました。教育の場でそういったことを学べる体制を充実させることでむしろ放射線の影響に対する不安を取り除くことができると思います。

以上の学生の言葉にあるように、サービスマーケティングにおける市民性教育は、それまで見えなかった社会にある公共的問題に目を向けさせる契機を導き、その中にある矛盾に気づきをもたらし効果がある。しかし、サービスマーケティングの限界は、この後、公共的課題に具体的にコミットするところまでには到達できない点にある。今後、求められるのは、身近にある公共的問題を見出し、その問題に社会的・政治的に関わるために、それぞれの学生が、大学でさらに専門知識の習得するための学びにつなげてゆく必要になるだろう。

(2)「相対化」の視点の獲得—自分と他者、自分と社会—

学生たちは、フィールドワーク先で、戸惑う場面に遭遇することがある。異なる環境でボランティア活動をする場合など、学生たちは、自らの生活圏とは違う場所であればあるほど、学生は「相対化の視点」が培われてゆく。学生C、学生Dは、想定していなかった場面に出会い戸惑いながらも、今起こっている事象を相対化させ、どうあるべきかを考えている。

(学生C)

「Yさんの活動は、その目的が他の方々の取り組みと異なっているという点で特異な意義をもつと感じた。見学に行った他の場所では、原発事故のことを広めることで事故への意識を高めるのが目的とされていた一方、Yさんは、話した内容こそ原発事故のことだったが、福島への意識を高める事は目的としていなかった。むしろ、「福島より自分（の地域）のことを考えてほしい」と言っていた。原発事故を福島のこととして終わらせず、原発事故から見えた今の社会の抱える問題などを広めていく。この活動も、事故の記憶の伝承と同様に重要なものであると感じた。

(学生D)

今回の川内村での企画は、地域の人同士が人間関係を作っていく手助けをしたいと考えて立案しました。手芸をしながら地域の人同士が会話できるようにと考えていましたが、折り紙などもっと簡単なものの方が会話が弾むようで、写真立ては少し難しかったようでした。また、手間とお金をかけて用意した材料がほとんど余ってしまいましたが、私はそれをボランティアとしての失敗とは思いませんでした。写真立て作りに来てくれた人はみんな喜んで帰って行ってくれたし、ブースが暇になった時は真ん中の机に座っている方々とお話しして一緒に楽しく過ごすことができました。呼び込みやアピールをもっとするべきだったという意見もありましたが、それはこちらの都合で、それを強要せずに来てくれた方を楽しませることができた点で、良かったと思っています。

常に、「自分に何ができるのか」、「どのように行動すればいいのか」という問いと向き合い、「自分と他者」あるいは「自分と社会」という文脈で考えるようになる。身近な社会に起こる対立問題の調整が必要な場合、寛容さを求められたり、または相

互尊重が必要とされたり、合意形成に主体的に関わる場面に遭遇した時、基礎となる姿勢になる。自分が、身近な問題にどうかかわるのかについての判断・自己決定ができる資質は市民性（市民性）の一つであり、サービスマーケティングが提供するものであった。

(3) 控え目でも確かな市民性

学生 E、学生 F は、積極性に満ちた明確な行動意識とは異なり、目の前に巨大な不公正を感じた時、そこには直接かかわることはできないが、自分たちができる範囲で行動したいという小さな意識がめばえた。

(学生 E)

Yさんの話の中で被災者は否応がなく人間の嫌な部分に目を向けなければならなくなるし、そのことを考えなければならなくなるといったことをおっしゃっていた。私たちがいくら地震や津波、原発のこと、故郷をある日突然奪われるということ、すぐ戻れると思っていた場所に何年経っても戻れないということ、それらをいくら聞いても当事者の気持ちを理解することは不可能だが、私たちも「これからどう生きるか」を日頃から考えることで少しでも原発事故以降を生きる人に寄り添えるのではないかと今回、感じた。

(学生 F)

目の前にしないとわからないことがたくさんあります。今回はそういうものをたくさん見させてもらい、非常に貴重な経験をしました。帰還困難区域の境界線、廃炉資料館、新しすぎる町の持つ違和感、実際に3.11を経験した方々の感情、町のコミュニティや歴史が崩壊するということは、言葉で理解したり伝えたりできるものではありませんでした。これらを、私も他の人になんとかして伝えていけるようになることが、私にできる一番の支援だと考えています。

このような、自らの感覚に正直に答える小さくても確かな市民性があってもよいのではないだろうか。例えば、自分にできることはないかと、頭の中では考えてはいるものの、実際に行動には移さない。それでも、社会で起きている問題を他人事ではなく、自覚的に問題意識をもち、自分のできる範囲で確実に何かをしたいと思う。これも、市民性を構成するものの一つではないだろうか。

この問題を考える上では、「3種類の市民」論（①個人として責任ある市民、②参加する市民、③正義感を持つ市民）がヒントになる(Westheimer, J. & Kahne, J. 2004)。これによれば、ごく普通の生活者が市民として社会に働きかけるきっかけ・方法は多様である。実際に、学生 E、学生 F のレポートから伺えるように、学生 F は「個人として責任のある市民」（寄り添い合い）の芽生えを自覚しつつあるように思われる。学生一人ひとりひとりが、自分と社会との関係やそれに基づく行動を決定することによって、市民性を獲得してゆく。これに資するサービスマーケティングが求められている。

5. おわりに

以上では、2019年度に東北大学課外ボランティアセンターで開講してきたサービスマーケティングを取り上げ、市民性教育の意義と課題を検証してきた。市民性教育の意義は、以下の3点である。第1に、公共性に関わる社会問題の意識化、第2に、「相対化」する視点の獲得、第3に控え目でも確かな市民性の獲得であった。本稿で検討してきたサービスマーケティングによって市民性を涵養することは、大学で学修するという点から考えても極めて重要な意味を持つ。

一方、市民性教育を提供するサービスマーケティングの課題もある。第一に、教科科目の設計については、事前知識を習得する講義と社会での経験の学習の比率は検討すべきである。今回は、15回分の授業での実施だったが、継続的に行うためには、通年のプログラムや集中プログラムの展開も視野に入れることが必要だろう。これと関連して、成績評価をめぐる課題もある。だが、成績評価をいかなる手法とするべきかは、ボランティア活動に必要な専門知識の修得、その活動内容、さらには受け入

れ団体との関係性の構築などもあり多様である。第三に、外部の機関との連携調整を丁寧にする必要がある。その際に、サービスラーニングの受け入れ先として依頼するのではなく、共に、受け入れ先と協働関係の構築すること非常に大切である。本授業では、NPO コースター、SCRUM 福興 youth と協働関係を取り結び、課外での活動の幅を広げることができた。

最後に、大学における学力観が変化し続けている。学力観の一つには「自分が重視する価値を発見し、その価値を最大化するために、仲間と共に学び、知性や意志を結集すること」がある。学生には大学で学ぶにあたってこうした学力観を自覚的に捉え、正課科目の履修と課外活動とリンクしたサービスラーニングの授業をバランスよく組み合わせて学修をデザインすることが求められている。さらには、市民性を養うという視点から、より実践的で自由な学びを実現できるプログラムの開発がサービスラーニングの課題となるだろう。

参考文献

- 江口怜 (2017) 「学生ボランティアは福島で何を学んでいるのかーボランティア活動を通じた市民性教育の試み」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』3号、2017年発行
- 江口怜 (2018) 「課外・ボランティア活動支援と正課教育の連携事例とその可能性」『2017年度課外・ボランティア活動支援センター紀要』2018年3月発行
- 江口怜 (2019) 「『正課・課外リンク』の構築の可能性ー学生ボランティアの事例を中心にー」『2018年度課外・ボランティア活動支援センター紀要』2019年3月発行
- 江口怜 (2020) 「社会的マイノリティとの『対話』にむけたボランティア学習」佐藤智子編著『多様性が拓く学びのデザイン』2020年2月発行
- 小玉重夫 (2003) 『シチズンシップの教育思想』白澤社
- 桜井正也・津止正敏編著 (2009) 『ボランティア教育の地平線 サービスラーニングの原理と実践』ミネルヴァ書房
- 東北大学「東北大学ビジョン2030 最先端の創造、大変革への挑戦」2018年11月
https://www.tohoku.ac.jp/japanese/newimg/newsimg/tohoku_uni_vision2030.pdf (2020年3月16日最終アクセス)
- 藤室玲治・江口怜 (2019) 「サービスラーニングを通してつちかう〈地域視点〉と〈人権感覚〉ー東日本大震災以降のボランティア活動支援と市民性教育の可能性ー」『2016年度課外・ボランティア活動支援センター紀要』2017年3月発行
- 若槻健 (2014) 『未来を切り開く市民性教育』関西大学出版部
- Westheimer, J. & Kahne, J. (2004) “What kind of Citizen? The Politics of Education for Democracy”. *American Education Research Journal*. 41(2) pp237-268

第Ⅱ部 課外・ボランティア活動支援センター等の活動報告

1. 課外・ボランティア活動支援センターの事業報告

1-1. 課外・ボランティア活動支援センター2019年度の概括

2019年度の課外・ボランティア活動支援センター（以下、センター）の主な出来事に関しては、「はじめに」で小田中センター長も触れているため、簡潔に記す。

第一に、2019年度は前年度の教員2名ともに退職となり、運営体制に変化があった。まず2016年4月より特任助教を務めてきた江口伶氏が退職し、後任として2019年4月に横関理恵（北海道大学）が着任した。横関は、江口氏と同じく夜間中学の研究が専門であり、夜間中学でのボランティアや支援活動に携わってきた経験をもつ。センターでは、江口氏の開講していた人権共生に関するサービスラーニング科目の開講やSCRUM人権・共生部の運営支援、SCRUM参加団体である福興 youth の運営支援などを中心に担うことになった。もう一名の教員である教育研究員（現・学術研究員）の菊池遼氏が退職し、2月より阿部晃成の着任があった。阿部は東日本大震災で甚大な被害があった宮城県石巻市雄勝町の出身で、震災後は雄勝町で復興を考える住民運動、林業などを経験したうえで、慶応義塾大学修士課程の大学院生となっている。センターでは、菊池氏の後任として、東日本大震災被災地でのボランティアツアー（主に石巻市）をコーディネートするとともにボランティア団体全般の運営支援に注力し、SCRUM 自体やSCRUM の三つの直轄部（国際部、震災伝承部、もしとさ）、SCRUM 参加団体インクストーンズ、ボランティア登録団体“HARU”、たなぼたなどの支援を担当した。さらに阿部に代わって2019年10月には松原久（東北大学）が特任助教として着任している。松原はセンターの前身である東日本大震災学生ボランティア支援室時代から学生スタッフとしてボランティアツアー、サービスラーニング科目などの実施に関わってきた経験を持ち、東日本大震災被災地での復興まちづくり・コミュニティづくりの問題を研究対象とする。センター内での役割としては、東日本大震災に関わるサービスラーニング科目の開講や、SCRUM 本体、SCRUM 地域共創部、SCRUM 渉外担当の運営支援、緊急災害派遣の対応などを担った。最後に前年度から赴任した事務職員の金田理沙は、前年度に引き続いた事務面全般の対応とともに、SCRUM 広報担当の支援、課外・ボランティア活動研修会での発表分担など新たな役割も担うようになった。なお2019年度は赴任して日の浅い教職員体制に一新されたことで、運営に関する細かな慣例から緊急災害対応まで、新たに赴任した教職員のみでは判断しかねる課題が度々生じてきた。そこで教職員で随時相談するとともに、小田中センター長と教職員のスタッフ打ち合わせを週1回開催し、相談や情報共有を緊密に行なうことになった。また新たに生じた問題については、その都度教職員で相談し、役割分担を図ってきた。

第二に、授業に関しては、開講数が減ったものの、東日本大震災に関するオムニバス講義や震災復興や様々な人権課題に取り組むサービスラーニング科目について、藤室氏、江口氏が開発した授業も含めて引き続き5コマを開講することができた。その実施に際して、ティーチングアシスタントとして長年授業開発を補助した松原久が10月より着任し、授業開発と実施の戦力となった。基礎ゼミ「共生社会に向けたボランティア活動一人権・多様性・エンパワメント」では、辻井翔太さん（大学院教育学研究科）、基幹科目・社会の構造「東日本大震災から見る現代日本社会」では、下境芳典さん（大学院経済学研究科）にTAとして活躍いただいた。さらには、多くの協力団体にご協力をいただき、サービスラーニングの教育開発と実施を行った。

第三に、2019年度はSCRUMをはじめとする学生ボランティア組織の課題や学生個人の抱える課題が顕在化し、その都度対応が求められた時期でもあった。まず2019年度のSCRUMは、前年度からの引継ぎが難航し、運営体制が安定しないなかで新年度を迎え、SCRUMへの新歓、SCRUMの学生に運営の大部分を委ねる「春のボランティアフェア」など、学生にとって負担の大きいイベントを前年通り実施した。その結果、運営などに追われて疲弊する学生が現れることになり、教職員とSCRUMの役割分担に関する見直しや学生個人のケアも必要となった。また持病を抱える学生、授業との両立に支障をきたしかねない学生などもいたため、疲弊する学生のでない組織づくり、学生個人の抱える課題の把握とその対応機関へのつなぎな

ども意識することになった。学生支援との関連では、改めてセンターにとっての支援対象・支援のあり方などを検討する機会を随時設けることにした。その結果、広報物 *volunnter semminar journal* におけるボランティア団体の掲載基準見直し（ボランティア連絡会議「井戸端会議」（年 5～6 回開催）への継続的な参加を原則）などを行ない、定期的にコミュニケーションが可能で、学生ボランティアの扱いを含む組織運営の内情を把握できる団体について、優先的に支援する方針とした。

第四に、2019 年度は、前年度に引き続いて緊急災害への対応が求められた。9 月 9 日に千葉県などへ上陸した台風 15 号は、大学としての派遣こそ行なわなかったものの、関東地方出身の学生を中心にボランティアを希望する声があがったため、日本財団学生ボランティアセンターの派遣を仲介する形をとった。また 10 月 12 日に列島を縦断した台風 19 号は、宮城県内に東日本大震災以来の甚大な被害をもたらすことになり、発災直後は教職員・学生自身の安全確保、ボランティアを通して縁のあった方の安否確認などに追われた。さらに県内に大量のボランティアニーズが発生し、ボランティア団体に所属しない学生も含めてボランティアに対する関心が高まったため、機構長裁量経費の拠出を認めていただき、宮城県丸森町へ 3 度のバス派遣を行なうことになった。その後も日本財団学生ボランティアセンター、現地支援団体などと連携体制を構築し、SCRUM メンバーだけでなく、ボランティア団体の学生、その他の学生も交えた丸森派遣チームとして積極的支援を行なってきた。

第五に、SCRUM の中でも新たな活動領域が広がっただけでなく、井戸端会議にも環境や貧困など様々なジャンルのボランティア団体の参加が増え、学内ネットワークの連携も進んだ。ボランティアフェアへの出展団体数も増加している。さらに、新規でいくつかの登録団体も増え、より一層、多様なボランティア団体との連携を進めた。また、SCRUM 関係の活動に関しては、昨年度に引き続き Yahoo! 基金よりご助成をいただけたことが大きく、また日本財団学生ボランティアセンター (Gakuvo) と協定を結び多くの援助を受けることができた。さらに、独日協会からも被災 3 県での高齢者・若者・子どもに対するボランティア活動に対して寄附金をいただくことができた。東日本大震災関係の助成金が減少する中で、活動をいかに継続できるのか、今年度は顕在化しなかったが、引き続き今後も大きな課題となるだろう。以上のように、大きな変化の中でも、これまでの蓄積を生かしてセンターとしては一定の役割を果たせたと考えている。付言すれば、目前に控えた「東京オリンピック・パラリンピック」と「東日本大震災 10 年」を睨みつつ、東日本大震災の経験と教訓を忘れず、人々の具体的な生活現実や抱える課題に寄り添いながら、〈ポスト震災期〉を見据えた課外・ボランティア活動のあり方を模索していくという課題は、次年度にも引き継がれることになるはずである。

1-2. 事務連絡会議（運営会議）

事務連絡会議（運営会議）は、課外活動・ボランティア活動に関連する教職員が月に 1 回定例で行う情報交換の場であり、実質的に課外・ボランティア活動支援センターの方針はここで相談して決定している。現在は、課外・ボランティア活動支援センターの教職員、グローバルラーニングセンターの教員、学友会体育部・文化部の教員、有識者教員（西出優子先生、岡田彩先生、門間由紀子先生）、学生支援課長、支援企画係長、活動支援係長、学生スタッフ SCRUM 代表が参加している。毎回の主な議題をまとめたのが下表である。

今年度は、小田中センター長・永富副センター長のもと、前期は横関・阿部・金田、後期は横関・松原・金田で会議運営を行った。事務連絡会議構成員も変化し、西出先生のサバティカル期間には、岡田先生に関わっていただいた。議題としては、通年で課外・ボランティア活動研修会や日本財団学生ボランティアセンター (Gakuvo) との協定事業の報告を行ったほか、学生ボランティア団体の新規登録が 2 件あった。また、国内外の大学との交流や、学生支援として事故対応や現地のトラブル対応などもその都度報告を行った。特筆すべき議題としては、独日協会ボランティア活動寄付金および後期から多く議題に上がっている台風災害にかかる対応である。詳細はそれぞれ別途設けるが、独日協会からの寄付金については、10 月 7 日に寄付金契約署名式が執り行われ、滝澤機構長の代理で小田中センター長が在日ドイツ大使館に赴いた。台風災害に関しては、特に台風 19 号について、初動（安否確認等）から資金確保（機構長裁量経費・日本財団学生ボランティアセンター）、その後の活動・運営について報告・相談を行った。

来年度は、現在の事務連絡会議の目的・頻度・参集範囲等を検討する予定である。引き続き、学生支援課および関連する教員と連携の上、協力体制を築いていきたい。

【表】事務連絡会議一覧（2019年4月～2020年2月）

回	日程	主な議題
46	4/26	<ul style="list-style-type: none"> ・新年度のセンター運営体制について ・新年度の授業実施状況について ・新年度のセンター予算見込みについて ・学生アルバイト（AA）雇用について ・学生ボランティア活動支援委員会およびボランティア団体登録について ・高度教養教育・学生支援機構の他の業務センターとのかかわりについて ・ペイラー大学の受け入れおよび協働プロジェクトの実施について ・大学間ネットワークの形成について ・日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）との協定事業について
47	5/24	<ul style="list-style-type: none"> ・GW中のボランティア活動における事故対応について ・新年度のセンター予算見込みについて ・学生ボランティア活動支援委員会およびボランティア団体登録について ・日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）との協定事業について ・総合的學生支援におけるコーディネーター養成（案）にかかわる構想について
48	6/28	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回課外・ボランティア活動研修会について ・学生ボランティア団体登録における緊急連絡先・提出書類の改訂（案）について ・学生ボランティア支援委員会およびボランティア団体登録について ・日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）との協定事業について
49	7/29	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回課外・ボランティア活動研修会について ・鳥取県八頭高校受け入れについて ・東北大学基金・その他助成金申請状況について ・学生ボランティア活動支援委員会およびボランティア団体登録について ・10月以降のセンターの体制について ・東京工業大学との懇談について
50	9/24	<ul style="list-style-type: none"> ・兵庫県立宝塚西高校・尼崎西高校との合同企画について ・日本福祉大学との交流企画について ・学生ボランティア団体登録（新規登録）について ・第3回課外・ボランティア活動研修会について
51	10/25	<ul style="list-style-type: none"> ・台風15号関連について ・台風19号関連について（機構長裁量経費のご相談） ・古川黎明中学校からのボランティア講師依頼について ・第3回課外・ボランティア活動研修会について ・学生支援（現地でのトラブル等）について ・2019年度課外活動団体合同研修会について ・秋のボランティアフェアについて ・日独協会からの寄付金について
52	11/22	<ul style="list-style-type: none"> ・台風19号関連について ・秋のボランティアフェアについて

		<ul style="list-style-type: none"> ・2019 年度課外活動団体合同研修会について ・日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）による台風災害ボランティアにかかる支援について ・Volunteer Seminar Journal vol.15 および課外・ボランティア活動支援センター紀要の作成について ・学生支援についての情報共有について
53	12/20	<ul style="list-style-type: none"> ・台風 19 号関連について ・2019 年度滝澤理事との意見交換会について ・第 4 回課外・ボランティア活動研修会について ・日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）による台風災害ボランティアにかかる支援について ・Volunteer Seminar Journal vol.15 および課外・ボランティア活動支援センター紀要の作成について ・独日協会ハンブルグ寄付金について ・来年度の基礎ゼミ開講予定について
54	1/24	<ul style="list-style-type: none"> ・台風 19 号関連について ・第 4 回課外・ボランティア活動研修会について ・東北大学 IEHE×日本財団学生ボランティアセンターGakuvo 協定事業について ・他大学招へい福島ツアー・他大学招へい学生ボランティアセミナーについて ・学生ボランティア団体登録（新規登録）について
55	2/21	<p>メール審議</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他大学招へい福島ツアー・他大学招へい学生ボランティアセミナーについて ・2020 年度学生ボランティア団体登録について ・2020 年度学生ボランティア支援委員会について ・今後の事務連絡会議のあり方について

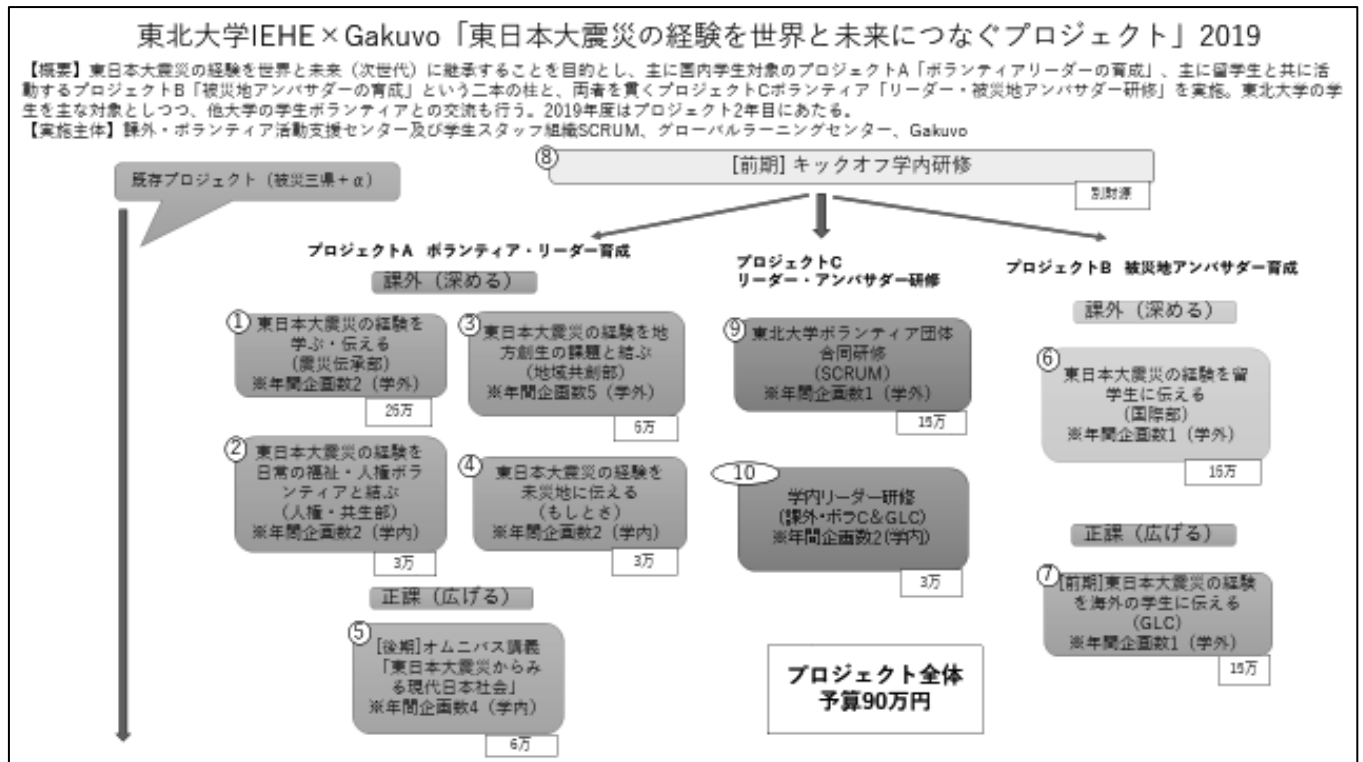
1-3. 日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）との協定事業

公益財団法人日本財団学生ボランティアセンター（以下、Gakuvo）は、学生ボランティア活動推進のため、日本国内の各大学に協定締結の呼びかけを行っている。東北大学には 2016 年 11 月にその旨のご提案があり、総長室より連絡を受けて学生支援課および課外・ボランティア活動支援センターで検討を重ねていた。その後、課外・ボランティア活動支援センターとグローバルラーニングセンターの 2 業務センターが中心となって、Gakuvo と連携して「東日本大震災の経験を世界と未来につながるプロジェクト」と題した事業を 2018 年度以降に進める目処が立った。そして、高度教養教育・学生支援機構（以下、機構）と Gakuvo で「学生ボランティア活動推進に関する協定」を結ぶことになった。分担された経費については、本学が寄付金・事業委託等として受け取るものではなく、Gakuvo が直接、支出するという方式をとった。

2019 年度はプロジェクト 2 年目にあたる。事業計画については、課外・ボランティア活動支援センター、グローバルラーニングセンター、SCRUM の学生で打合せを行い、Gakuvo の担当者である宮腰氏と共有の上、図のように設定した。その後、各プロジェクトで企画の見直し・変更等が行われたが、定期的に Gakuvo との会議で報告を行った。最終的に実施した事業は表のとおりである。

2019 年度は、昨年に比べて計画を緩やかに設定し、事業の開催時期等について学生の自主的な企画が可能となった。その結果、最善の開催時期を決定するまで検討が重ねられたり、予算の枠組み内で内容を組みなおしたりと、柔軟に企画を改善・発展させていくこととなった。また、Gakuvo との打ち合わせ回数も昨年より増え、学生の企画参加・運営の感想をその都度共有することができた。こういった既存のプロジェクトに加え、今年度は台風災害ボランティアにおいてもご支援いただき、Gakuvo との協力なくては実現困難だった活動が多くあった。詳細は 1-8 に譲るが、これまでの協定事業での関係があったからこそ、早急に協力体制を築くことができたと思う。

協定事業3年目となる来年度も引き続き、学生の自発性が発揮されるようなプロジェクトを予定している。また、協定事業を結んだ当初から重要視されてきた「サービスマーケティングの発展」の成果を反映させる計画を設定する予定である。



【図】2019年度 Gakuvo 協定事業の全体像

【表】Gakuvo との協定事業一覧

事業番号	事業名称	目的・概要	日時	支援を受けた内容
1	東日本大震災の経験を学ぶ・伝える	東日本大震災の被災状況や復興過程を学び、東北大学生や他大学の学生等に伝えるスタディーツアーを年間2回実施。	①2019/10/20 ②2020/2/24-25	①マイクロバス1台、講師謝金 ②レンタカー2第、講師謝金、施設利用費
2	東日本大震災の経験を日常の福祉・人権ボランティアと結ぶ	東日本大震災を通して顕在化した子どもの貧困問題等の社会的課題について取り組む団体の活動を学び、ボランティアのすそ野を広げる体験プログラムを実施。	①8/7 事前研修 ②8月～10月 ボランティア体験 ③11/18 報告会	①講師謝金 ②参加者交通費
3	東日本大震災の経験を地方創生の課題と結ぶ	東日本大震災を通して顕在化した過疎高齢化問題の現実を学び、課題解決の方法を考えるため、石巻市雄勝町をフィールドにボランティア活動を実施。	①2019/9/19-20 ②2019/11/23	①レンタカー1台 ②レンタカー1台
4	オムニバス講義「東日本大震災からみる現代日本社会」	東日本大震災の被災地復興に関わってきた研究者や実践者を招くオムニバス講義を教養科目の一つとして開講する。本協定事業では、被災三県で活動する実践者をお招きして、広く東北大学生に東日本大震災の経験を伝える。また、プロジェクトの他の取り組みに参加する学生のすそ野を広げる役割も果たす。	①2019/10/21 ②2019/10/28 ③2019/12/9 ④2019/12/25	各15000円の講師謝金、旅費

5	東日本大震災の経験を留学生に伝える	東日本大震災の被災状況や復興過程を学び、世界各国から東北大学にきている留学生等に伝えるスタディツアーを実施。	2019/11/16-17	マイクロバス1台、講師謝金、施設利用費
6	東日本大震災の経験を海外の学生に伝える	米国バイラー大学生を受け入れ、東北大学生とバイラー大学生が南三陸町にて東日本大震災後の復興状況等を学ぶ。前年度課外活動として行ったプログラムを正課の授業に発展させるものであり、プロジェクト全体に参加する学生のすそ野を広げる役割も果たす。	2019/6/29-30	大型バス1台
7	東北大学ボランティア団体合同研修	学内ボランティア団体のリーダー層が集い、ボランティア活動を行う上での悩みや課題を協働的に解決するための方法を考え合う合同研修。SCRUM の学生がファシリテーターとなる。	2019/6/8-9	中型バス1台
8	学内リーダー研修	SCRUM の学生や学内ボランティア団体の学生等が集まり、ハラスメント防止、団体の組織運営等の内容について学ぶリーダー研修を行う。	①2019/7/9 ②2020/1/7	各 15000 円の講師謝金、旅費
その他	Gakuvo 会議	対面、もしくは Skype 会議において Gakuvo 宮腰氏、課外・ボランティア活動支援センター、グローバルラーニングセンター、SCRUM の学生で、実施プロジェクトの報告と今後のプロジェクトの共有を行った。	全7回	

1-4. 課外・ボランティア活動研修会

前年度に引き続き、SCRUM やボランティア登録団体の研修の機会として、課外・ボランティア活動研修会を前期に2回、後期に2回の計4回開催した。本ボランティア登録団体からは1名以上の参加を求め、さらにその他課外活動団体にもチラシを配布して広報した。なお、第2回、第4回に関してはGakuvoとの協定事業の一環として実施した。実施スケジュールと概要は以下の通りである。

【表】課外・ボランティア活動の実施スケジュールと概要

回数・日時	タイトル	講師	参加人数	概要
第1回 5/28	「大学における学生ボランティア支援の未来—東北大学からの展望—」	横関理恵 阿部晃成 金田理紗	35人	①本センターの位置づけや実際の活動時の提出物・安全対策などについて（金田）、②学生ボランティアの在り方やボランティアの理論などについて（横関）、③学生ボランティア受け入れ側の視点について
第2回 7/9	課外・ボランティア活動におけるセクハラ防止のために	八幡悦子氏 （NPO 法人ハーティ仙台代表、助産師）	30人	地域活動や団体内でのセクハラ等を防止するための基礎知識のガイダンス
第3回 10/16	災害ボランティアセンター運営サポーター養成講座	仙台市社会福祉協議会	14人	災害ボランティアセンターに関する基礎的なガイダンス及び、模擬体験ワーク
第4回 1/7	学生団体の組織運営	鈴木平氏(NPO 法人 TEDIC 理事)	20人	学生団体の組織運営についての講義・ワークショップ

1-4-1. 大学における学生ボランティア支援の未来—東北大学からの展望—

第1回は本センター教職員を講師とし、以下の内容で敢行した。①本センターの位置づけや実際の活動時の提出物・安全対策などについて（金田）、②学生ボランティアの在り方やボランティアの理論などについて（横関）、③学生ボランティア受け入れ側の視点について（阿部）。参加学生からは以下のような感想があった。

- ▶ 今年度からスタートさせた“ボランティア”について改めて考えることが出来た。横関さんのお話で、スライド11の「被援助者」の本音を聞いたときははっとさせられるものがあった。被支援者と援助者との壁を取っ払って、相互関係を成立させる大切さは知っていたつもりでも、この本音は、改めてその大切さを実感するものになった。阿部さんのお話では、その“土地”ではなく、“人”にフォーカスして復興を考える、そもそも復興とは何かを考えさせられるものでした。本日も学んだことを踏まえて、今後の活動に取り組んでいきたいと思った。
- ▶ 今年の1月頃～GW前まで「なぜ自分がボランティアをしているのか」「ボランティアをして何になるのか」「何のためにボランティアをするのか」と自分が苦しくなるほど悩んでいた。横関さんの話は悩む前もしくは悩んでいる最中に聞いたかったと思う。逆に言えば、1年生がしんどくなり始める(?)秋頃に聞きたいと思う。阿部さんの話は何度聞いても驚きがとまらない。テレビの中の体験を経験している人といることの特別な感覚を1年経って忘れていたので、改めて思い出すいい機会になった。
- ▶ お二人の話をきいて、ますますボランティアって何か、何のためのボランティアなのかがよくわからなくなった。とはいえ、私はまだボランティア活動をしていないので、これから色々な活動をする中で考えていけたらと思う。完ぺきな、みんなが100%満足でハッピーになれるボランティアはないのかもしれないけど、それでも私なりに活動の中で関わる人ひとりひとりと向き合い、支援者・被支援者ではなく1人の人間同士として接していきたい。

1-4-2. 第2回 課外・ボランティア活動におけるセクハラ防止のために

第2回目は、前年度に引き続き、DV・性暴力被害者支援に取り組み、人権教育の観点から性教育の講演活動に取り組み、八幡悦子さんをお招きしてお話を伺った。実際、ボランティア活動中にセクハラ被害にあう例があり、また課外活動の中でセクハラはじめ様々なハラスメントが生じやすい状況があり、ハラスメントを起さない/身を守るための知識と技法を身につけることを狙いとしていた。学生からは以下のような感想があった。

- ▶ 性暴力、セクハラについて詳しく学ぶ機会がなかったため、とても勉強になりました。対応策を知っているだけで被害を未然に防げたり、悩みを解決できるということはとても重要なことだと思います。自分の気持ちだけではなく、相手が嫌だと感じたら暴力という基準はとても分かりやすく、もっと広められるべきだと思います。
- ▶ 表面的になっていないだけで、ハラスメントで苦しんでいる人がたくさんいることにショックを受けました。最近、ボランティアの場でもハラスメントが見られていることもあるので、1人で抱え込ませないように、周りに目を向けていきたいと思いました。
- ▶ セイフティゾーンに関しての実験では、実は自分はほとんど嫌とは思っていませんでした。…(中略)…いつまでもストップと言わない私に対して、相手が足を自発的に止めたとき、相手が戸惑う、嫌だと思ふキョリがそこであることを理解したのと同時に、自分が平気でも相手が嫌だと思ったらその時点でセクハラ・よくないことになるのだと改めて認識しました。
- ▶ 八幡先生のお話を、1人でも多くの方が理解してくれたらと思います。

1-4-3. 第3回 災害ボランティアセンター運営サポーター養成講座

第3回目は、前年度に引き続き、仙台市社会福祉協議会の職員の方々をお招きし、緊急災害時に立ち上がる災害ボランティアセンターに関する基礎的なガイダンスと、模擬体験ワークを実施した。学生からは以下のような感想があった。

- 災害直後のボランティア経験はないため、運営や活動の流れを知ることができてよかった。災害ボランティアセンター運営に関わりたいと思った。
- 人材・物資が限られた中でいかに効率よくニーズに応じていくのか、じっくり考えることができました。ボランティアとニーズをつなげる、いわゆる中間支援の重要性と難しさを実感した。
- 社協の仕事やボランティアセンターの運営について実際に考えたり行動したりすることで学ぶことができ、良い経験となった。
- 去年参加させていただいたのですが、マッチング事例を実際は体験するのが追加されており、より現場の雰囲気をつかむことができて良かったです。
- 実際の災害ボランティア活動をまだ As One では行えていないのですが、直近の台風のように今後機会があれば行いたいと思っていたので、非常に参考になりました。このように課外の方から学べる機会は貴重なので、ぜひ今後もこのような研修会があれば参加したいと思います。

1-4-4. 第4回 学生団体の組織運営

第4回目は、前年度に引き続き、学生団体の組織運営に詳しいNPO法人TEDIC副代表理事の鈴木平さんをお招きして、学生ボランティア団体に特有の組織運営上の課題を取り上げ、講義とワークショップを通して実践的に学ぶことを目的として実施した。学生からは以下のような感想があった。

- これから引継ぎの時期になってくるが、その前にこの研修会を受けられて良かった。組織運営には色々大変なことがあると思うが、冰山モデルにあったように根本から解決することを意識したい。
- 自分の団体の活動内容はスラスラ言えるのにミッションについてパッとすぐに出てこない自分がいて、そんな自分を内省するいい機会になった。もっと団体内でこういう話し合いをやりたいと思います。
- 団体において代表者に負担が集中してしまうということ、そしてその人がいなくなると困るということが的を射ていると思います。ボランティアフレンドリー度はあまり低くなかったものの、満点ではない以上改善して必要があると思うので、メンバーで意見を話し合ったり、すり合わせたりする機会を得ることが重要だと思いました。

1-5. 学生ボランティア登録団体の支援

1-5-1. 学生ボランティア登録団体の状況

「東北大学学生ボランティア支援に関する内規」に基づき、ボランティア活動を主な目的として本学の学生により組織された団体について、「学生ボランティア団体登録」制度によって支援を行った。登録は高度教養教育・学生支援機構 機構長に申請し、学生ボランティア支援委員会の承認を得てその許可を得る。実際の手続きについては、課外・ボランティア活動支援センターが行った。本年度の登録は、前年度からの更新が10団体、新規登録団体が3団体の合計13団体となり、過去最高となった。2017年度から東日本大震災に限らず様々なボランティア団体が登録可能になったことで、登録団体のジャンルも広がりを見せている。なお、学生ボランティア団体登録は学友会登録とは別に行っており、団体によっては2つ登録を行っている現状である。

【表】令和元年度登録学生ボランティア団体

団体名	代表者名	顧問教員名
東北大学 SCRUM	高嶋優佑	小田中直樹 先生
東北大学インクストーンズ	石塚奈緒	島田明夫 先生
東北大学陸前高田応援サークルぼかぼか	砂山風磨	菅原歩 先生
東北大学福興 youth	赤田丞	杉安和也 先生

東北大学地域復興プロジェクト“HARU”	藤城莉子	村松淳司 先生
東北大学ボランティアサークルたなぼた	瀬下彩香	渡部留美 先生
国際ボランティア団体 AsOne	菊地寿茂	森田直子 先生
震災復興・地域応援サークル ReRoots	北河凌	片岡龍 先生
フェアトレード推進サークル amo	高橋大河	西出優子 先生
高校生支援団体 bridge	関野准貴	松浦裕司 先生
東北大学光のページェント Navidad	尾田恵	島崎薫 先生
環境系学生団体 海辺のたからもの	畠山紳悟	長谷川公一 先生
TSALL 東北	関塚亮	中安裕太 先生

1-5-2. 学生ボランティア登録団体に対する支援

学生ボランティア団体に対しては、ボランティア活動を企画した際、保険（学生教育研究災害傷害保険・学研災付帯賠償責任保険）適用等のため「活動実施届」「活動報告書」にて企画の承認・確認を行った。活動にかかる設備等の支援として、厚生会館ミーティングルームの貸し出しや、ボランティア倉庫の棚配分、倉庫内の備品の貸し出しを行った。また、広報の支援として、本センターのプリンタの使用（印刷枚数によってインク購入のルールあり）や、希望する団体は本学食堂などに設置する広報物「三角柱」への企画掲載を行った。さらに、井戸端会議（ボランティア団体連絡会議）の開催や助成金情報の提供・アドバイスをを行うなど、情報交換・交流の場を設けた。前述の課外・ボランティア活動研修会においては、登録団体より1名以上の参加をもとめ、ボランティア活動を行う上での知識・技術に関する研修の機会とした。

1-6. 開講した授業

本年度は、2019年度の概括で述べたとおり教員体制の変更があったが、基本的には新任教員2名がそれぞれの前任者から引き継いでサービス・ラーニング科目を開講することができた。ただし1名の着任が後期になったことに伴い、前期については前年度よりも開講科目を絞らざるを得なかった。

4月より着任した横関は、これまで江口氏の開講してきたサービス・ラーニング科目2コマ（基礎ゼミ・展開ゼミ）を引き継いで開講、10月より着任した松原も、前年度に菊池氏が開講した1コマ（展開ゼミ）を開講した。また後期は、横関・松原の2名で1コマ（基幹科目）を開講した。結果として、今年度は下表の通り、計4コマ（8単位）の授業を提供した。

以下、各授業の概要について紹介していく。

【表】2019年度の課外・ボランティア活動支援センター開講科目（すべて全学教育科目）

科目群	授業題目	担当教員	開講時期	受講生
基幹科目	社会の構造「東日本大震災からみる現代日本社会」	松原久、横関理恵	【2S,4S】月4	34
基礎ゼミ	共生社会に向けたボランティア活動—人権・多様性・エンパワメント	横関理恵	【1S】月5	19
展開ゼミ（国際教育科目）	課題解決型（PBL）演習A「ボランティア活動と地域課題—被災者の生活再建・コミュニティ形成の課題に寄り添う」	松原久	【2S,4S】木4	2
	課題解決型（PBL）演習A「福島における人権保障と共生の課題—原発事故以降を生きる人々に寄り添う」	横関理恵	【2S,4S】金3	15

1-6-1. 基幹科目・社会の構造「東日本大震災から見る現代日本社会」

- 担当教員：横関理恵、松原久
- 受講者：34名、TA1名（下境芳典さん）
- 開講時間：2・4セメスター（月曜4限：14:40～16:10）
- 教室：川内北キャンパス A105
- 授業概要（シラバスより）

大きな自然災害が社会に与える被害と、そこからの復興過程においては、その時代の社会が構造的に抱える課題が浮き彫りになります。2011年に発生した東日本大震災においても、地方における過疎化の進展とコミュニティの弱体化、人口減少社会への突入という社会課題が、復興を困難にしています。また福島第一原子力発電所の事故は、広域避難という課題だけでなく、原子力発電とエネルギー政策について大きな課題を提起しました。その他、避難や防災のあり方、震災遺構の保存や震災伝承、NPOやボランティアの役割、子どもやマイノリティ支援のあり方なども問われています。こうした東日本大震災が提起した様々な社会課題を学び、そこから現代日本社会の構造と課題解決の方向性について学ぶことが、本講義の目的です。

- 学習の達成目標（シラバスより）
 - 東日本大震災が明らかにした社会課題の特殊性と普遍性についての理解。震災によって明らかになった多様な課題について、具体的な事例にそって理解するとともに、その課題が被災地のみならず、現代日本社会全体の課題につながる普遍的な側面を持つことを、講義の聴講やグループディスカッション等で理解します。
 - 社会課題の学際性と課題解決の方向性についての理解。震災によって明らかになった多様な社会課題は、例えば原発事故の問題を取り上げても、単独の学問分野のみによるアプローチや単独のセクターによる取り組みでは十分な理解・解決が困難であり、学際的視点や協働的発想が必要なことを理解します。
 - 自らの専門性・市民性との関連による理解。講義を通じて学ぶ社会課題について、自らの専門性との関連、あるいは市民性（地域社会における防災やまちづくりへの関与、生命の尊厳や人権に関する尊重意識、市民活動・ボランティア活動への参加、自治体・国家政策への関心等）との関連という視点から理解し、他人事としない態度を身に付けます。

■ 実施スケジュール

毎回の授業では、講義を行った後（60分程度）、グループディスカッションの実施と全体発表を行ない（20分程度）、ミニッツペーパーを執筆するという流れをとった（10分程度）。なお、講義は基本的にオムニバス形式であり、担当教員だけでなく、テーマを専門とする教員や外部の実践家・専門家を招いている。

この授業では、講義の受講と合わせてフィールドワークの実施を課題とした。フィールドワーク先としては、震災遺構や記念館等、東日本大震災の被害や復興状況を示す施設などの訪問、東日本大震災に関わるボランティア活動への参加のうち、いずれか一つの実施と感想提出を行うこととした。なお今年度は、新たな試みとして、受講生を主な参加者と想定するボランティアツアーを実施した（SCRUM震災伝承部との共同企画）。こちらのツアーには、受講生14名が参加し、SCRUMメンバーとともに石巻市あゆみ野地区収穫祭の参加、大川小学校跡の視察などを行なった。

【表】実施スケジュール

	日程	内容	講師
第1回	10/7	オリエンテーション	松原・横関からガイダンス
第2回	10/21	被災の実際と避難の課題	花洲みどり氏（せんだい3.11メモリアル交流館・語り部）
第3回	10/28	防災と伝承の課題—震災遺構と語り部①	佐藤敏郎氏（小さな命の意味を考える会代表、元女川中学校教員）
第4回	11/11	東日本大震災とマイノリティの課題①	菊池哲佳氏（公益財団法人仙台観光国際協会）
第5回	11/18	防災と伝承の課題—震災遺構と語り部②	佐藤翔輔准教授（災害科学国際研究所）
第6回	11/25	東日本大震災とマイノリティの課題②	杉山裕信氏（CIL たすけっと事務局長）

第7回	12/2	フィールドワーク報告	※各自の視察をレポートにまとめ、報告し合う
第8回	12/9	原発事故と復興の課題②	山田修司氏（文学研究科博士後期課程）
第9回	12/16	原発事故と復興の課題①	吉川彰浩氏（一般社団法人 AFW）
第10回	12/23	東日本大震災と子ども・教育の課題①	加藤道代教授（教育学研究科／震災子ども支援室（Sチル）室長）
第11回	12/25	東日本大震災と子ども・教育の課題②	鈴木平氏（非営利法人 TEDIC 副代表理事）
第12回	1/6	復興まちづくりの課題①	島田明夫教授（公共政策大学院）
第13回	1/20	復興まちづくりの課題②	松原久
第14回	1/27	学生によるディスカッションと全体まとめ	

■ 学生の感想

- あらゆる人から直接生の体験を聞くという機会を多く得られることの重要性を認識していたため、この講義で毎回そのような活動ができたことには大変満足している。また、幅広い分野と東日本大震災がどのように繋がっているのか、ということにも驚き、多角的な視点を身につけることにも結びついたのではないかとと思われる。（文学部1年）
- この授業で学んだことで、震災についてマイノリティの方が抱えている息苦しさについての視点を持つことができたというのが特に自分の中で大きかった。少しでもその人達に寄り添える視点があれば、店でも電車の中でも思いやりの行動ができるはずだ。教員を目指すうえでも、多様な立場の他者を理解する上での姿勢を大切にしていきたいと思った。授業については、フィールドワーク報告はじめ毎回の授業の最後など、他の人と感想を共有して様々な考え方に触れることのできるフィードバックの体制が整えられていたことがとても効果的だったと思う。（文学部1年）
- 仙台で大学生活を過ごすのだから被災地について知り、復興の状況についてこの目で確かめたいと思っていたので、この講義及びフィールドワークは非常に良い経験になった。また、福島第一原子力発電所で働いていた方の講義は、生い立ちや当時の人間関係なども踏まえて話しており、身近に考えられた。本講義を通じて、震災が契機となりそれまでの問題があらわになった事例もあった。災害が起きてからではなく、起きたときのことを想定して、問題点を見直すことも大事だと感じた。（教育学部1年）

■ 補記：財源について

本年度は外部講師6名に講演いただいた。講師依頼の財源は二種類あり、①Gakuvoとの協定事業で4名分、②全学共通基盤経費で2名分を拠出している。なお講師依頼の財源は毎年変化しており、次年度以降も授業を継続して開講するためには、安定した財源の確保が求められている。

1-6-2. 共生社会に向けたボランティア活動—人権・多様性・エンパワメント

■ 担当教員：横関理恵

■ 受講者：19名、TA1名（辻井翔太さん）

■ 開講時間：1セメスター（月曜5限：16:20～17:50）

■ 教室：川内北キャンパス C203

■ 授業概要（シラバスより）

本ゼミでは、ボランティア活動に参加し、支援者や支援対象者（当事者）の話を聴きながら、様々な社会的課題を学び、その解決方法を考えます。ボランティア実習では、仙台市内で取り組まれている、貧困者や基礎教育の学び直しを求める方たち等を支援する団体の活動に参加します。また、授業全体を通して、ボランティア活動を行う上で大切な考え方である「人権」「多様性」「エンパワメント」等の概念について学び、すべての人が人権と多様性を尊重し合いながら生きることのできる「共生社会」のあり方を考えます。

■ 学習の達成目標（シラバスより）

- ボランティア活動への参加や文献調査等を通じて、様々な支援活動の社会的意義を理解する。

- 「人権」や「多様性」「エンパワメント」等の基本的な概念について理解し、自他の権利や尊厳を尊重する意欲と態度を身につける。
- 支援対象者（当事者）や支援者の方たちと積極的にコミュニケーションをとりながら、「当事者視点」で課題を理解し、課題解決に向けて必要なことを考察することができる。
- 「共生社会」の実現という課題に対して、自分の意見を持ち、他者に向けて表現することができる。

【表】実施スケジュール

回	日程	内容
1	4月15日（月）	オリエンテーション
2	4月22日（月）	共生社会とは何か
3	4月27日（土）	ボランティア活動事前フィールドワーク（国立ハンセン病療養所東北新生園）
4	5月13・20日（月）	ボランティア実習現場の実践者講義
5～6	5月27・6月3・10日（月）	社会的課題について学ぶ（講義）
7	6月17日（月）	休み
8～11	6月24日（月）	ボランティア実習とインタビュー（グループ別）
12	7月1日（月）	ボランティア実習の振り返り（ワークショップ）
13	6月24日（月）	グループ別ディスカッション・報告会の準備
14	7月22日（月）	ボランティア体験報告会
15	7月29日（月）	まとめ

■ 学生の感想

共生社会の第1歩として、いままで知らずとしてこなかった少数派の方々のことなど、自分とは異なる境遇を持つ他者を知ること、偏見を持たずに正しい事実を知ることが大切なのではないか。正しい知識をもつことで、相手を理解し、尊重する社会の雰囲気が作られてゆくと考える。自分ができることは、今回の基礎ゼミで学んだことを友人等に伝え、広めて行くことである。くわえて、ボランティア活動や人権問題などに関する講演会に積極的に参加することである。意識すれば、行動すれば、何かがかかわると思うので、自分にできることから始めてゆきたい（文学部1年）。

1-6-3. ボランティア活動と地域課題—被災者の生活再建・コミュニティ形成の課題に寄り添う

- 担当教員：松原久
- 受講者：東北大学1年生2名、TA1名（下境芳典さん）
- 開講時間：2セメスター 木曜日4限
- 教室：川内北キャンパス A301
- 授業概要（シラバスより）

東日本大震災より8年が経過しました。多くの被災者は自力で家を再建し、あるいは復興住宅等へ入居していますが、新たな生活やコミュニティへの適応に課題を抱えている方も多くおられます。さらに高齢化等から地域活動の担い手も不足しており、生活再建やコミュニティ形成にあたって、今でもボランティア活動の意義や役割は大きいものとなっています。

この授業では、東日本大震災被災地（宮城県石巻市を想定）において、復興住宅等でのボランティア活動を実際に体験します。その上で、被災者や支援者のお話などを通して、被災者の生活再建とコミュニティ形成にどのような課題が存在するのか理解を深めます。最後に特定の地域・復興住宅団地等を対象としたコミュニティ形成のためのボランティア活動を企画・実施し、その成果を自己評価します。

- 学習の達成目標（シラバスより）

- グループでの課題設定・解決：仮設住宅や復興住宅等をフィールドとして、グループ内のディスカッションで課題設定を適切に行い、適切な役割分担を行い、コミュニケーションを取りながら、その解決を図れるようになります。
- ボランティア活動への理解：仮設住宅や復興住宅等で活動するボランティアの意義と役割について、被災者や支援団体の方のレクチャーや、実際の活動への参加から、理解できるようになります。
- 地域課題の把握：被災の実情と復興の現状についての理解を深め、特に被災者が失ったコミュニティを再び形成することの困難さを把握するとともに、課題解決のための行政や民間支援団体、被災者自身の取り組みについても理解できるようになります。また被災程度や生活再建方法毎に複雑に異なる個別の課題があることについても学びます。
- 自分の専門や市民生活との関連性の把握：ボランティア活動を通して学んだ課題を「自分事」として考え、今後の専門での学習に生かせる点や、今後の市民生活との関連について把握できるようになります。

■ 実施スケジュール

今年度は、前年度に引き続き、災害公営住宅（復興公営住宅）におけるコミュニティ形成の課題に焦点をあてることとした。具体的には、石巻市中心地区にある A 住宅で実践活動を行なった。

授業の流れとしては、最初に受講生を対象としたフィールドワークを実施し、被害状況の視察、支援団体からの講演、対象地域（A 住宅）でのサロン活動を組み合わせて行なった。活動終了後は振り返りのグループディスカッションを行なった。つづいて活動現場に関わる実践者の講演とフィールドワークを実施し、各地域の現状と課題に関する理解を深める機会とした。その後は、具体的な実践活動を企画し、受講生全員で活動を行なった。なお企画にあたっては、連携先と企画案の打ち合わせを行なうこととし（1 回以上）、より活動現場の課題に即した実践となるように促した。以下には、各回の概要を示しておく。A 住宅での活動に至った経緯や実践活動の詳細については、論考パートに記してあるので、ご参照願いたい。

【表】各回の概要

回	日程	内容
1	10月3日（木）	ガイダンス、自己紹介、フィールドワークの案内、初回アンケート&共有
2	10月10日（木）	被災地でのコミュニティ形成に関するレクチャー、フィールドワークの目標設定、傾聴ワークショップ
3	10月22日（火）	フィールドワーク@石巻…震災伝承館視察、支援団体講話、復興公営住宅でサロン活動①
4	10月24日（木）	フィールドワークの振り返り、課題整理ワークショップ(KJ法)説明&実践①
5	10月31日（木）	課題整理ワークショップ(KJ法)実践②
6	(各自)	フィールドワーク・ワークショップを経て、個人の興味関心について調べ学習
7	11月14日（木）	提出レポートについて各自報告、活動案の検討①（アイデア出し）
8	11月28日（木）	活動案の検討②（各自で1つ以上アイデアを調べ、それぞれについて発表&検討）
9	12月1日（日）	復興公営住宅でのサロン活動②
10	12月5日（木）	活動案の検討③
11	(各自)	企画準備①
12	12月19日（木）	企画準備②、企画チラシ作成
13	1月9日（木）	企画準備③
14	1月12日（日）	活動日
15	1月16日（木）	活動振り返り、全体の振り返り

【表】連携先と、活動現場・活動内容

対象地域	連携先	活動内容
石巻市 A 住宅	石巻じちれん	寄せ鍋の提供、絵はがきづくり、ポストカードの配布、全戸の戸別訪問

■ 学生の感想

「実践的な授業で、考えることや学ぶが多かった。学校での授業、行き帰りを含めた課外活動で多くの知見を得た。これからも訪問を楽しみにしつつ、もっと力になれることがないか考えていきたい。中央第三復興住宅で最後に挨拶した際、「良い経験になった」ことや「学べた」ことを口にしたが、それだけで良いとは思っていない。自分のためだけでなく、住民の方の力になれたか、少し大きな視野で考えれば復興支援に寄与できたか、改めて顧みたい」(教育学部 1 年)

1-6-4. 福島における人権保障と共生の課題—原発事故後を生きる人々に寄り添う

- 担当教員：横関理恵
- 受講者：東北大学 1 年生 15 名
- 開講時間：2/4/6/8 セメスター 金曜日 3 限
- 教室：川内北キャンパス A103
- 授業概要（シラバスより）

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故は、多くの人びとの暮らしを破壊し、社会に亀裂を生んだ。社会全体として風化が進む中で、未だ 4 万人を超える避難者が存在し、避難指示解除後に帰還した人々も新たな暮らしの課題に直面している。福島県では事故 4 年を経て自殺者が急増し、その背後には「曖昧な喪失感」があるとの指摘もある。さらに今回の原発事故は、原子力政策や被曝、帰還等に関する見解の相違が、地域社会や家族内に分断を生じさせ、事故以前と同様の暮らしを営むことやコミュニティを維持することを困難にしてしまった側面があり、課題の複雑さを現場で学ぶことの意義は大きい。

本授業では、こうした原発事故後の福島が抱える様々な課題について学び、具体的な現場で事故後を生きる人々に寄り添いながら、課題を解決する方法を考え合う。また、既に課題解決に向けて取り組んでいる行政や NPO 法人、学生ボランティア等の取組についても学ぶ。授業の最後には、福島県内の仮設住宅や復興公営住宅等を訪問してのボランティア活動、NPO 法人・社会福祉協議会・学校等への視察やヒアリングを行う 2 泊 3 日程度のフィールドワークを実施し、集中的に福島の抱える課題を学ぶ。

- 学習の達成目標（シラバスより）
 - 福島第一原子力発電所事故によって生じた被害や課題について、具体的な事例に即して理解する。
 - 福島第一原子力発電所事故のもたらした課題を解決するための様々な取り組みについて、その意義と課題を具体的な事例に即して理解する。
 - 福島の抱える課題の解決に向けて必要なことについて、フィールドワークでの経験や調査に即して具体的に考え、自分自身に関わる問題として考察することができる。
 - 専門性や関心の異なる学生間や地域住民・行政職員・NPO 職員等と対話し、協働しながら、ボランティア活動やフィールドワークを企画立案し、実行することができる。

【表】実施スケジュール

回	日程	内容
1	10 月 4 日（金）	オリエンテーション
2	10 月 11 日（金）	NHK 明日へつなげよう証言記録・東日本大震災「福島県川内村～隣人との原発避難」視聴、今後の授業計画の確認
3	10 月 18 日（金）	東北大学復興 youth の報告とディスカッション（教育学部 3 年齋藤美久さん） 事前学習会の日程決め
4	10 月 25 日（金）	事前フィールドワークの振り返り、調べ学習の報告①（10 分報告+10 分議論×4 人）
5	11 月 1 日（金）	川内村の現状と課題に関する講義（NPO 法人コースター代表理事・坂上英和氏）

6	11月8日(金)	事前フィールドワークの振り返り、足湯講習(協力:福興 youth)
7	11月15日(金)	事前フィールドワークの振り返り、調べ学習の報告②
8	11月22日(金)	事前フィールドワークの振り返り、調べ学習の報告③
9	11月29日(金)	事前フィールドワークの振り返り、調べ学習の報告④
10	12月6日(金)	フィールドワーク中の視察先および企画の検討①
11	12月13日(金)	フィールドワーク中の視察先および企画の検討②
12	12月20日(金)	フィールドワーク企画検討
13	1月10日(金)	フィールドワーク最終調整
14	1月17日(金)	調整日
15	2月6日(木)~2月8日(土)	福島県川内村ボランティアツアー(フィールドワーク)、最終日に全体振り返り

■ 学生の感想

- 震災学習はただの勉強ではなく、一種の人生学習でもあるということ、そして私たちが過去から学べるものはたくさんあるということ、この授業を通して強く実感した。(文学部1年・女性)
- この授業を通して、多くの視点から「福島県」と「原発」について考えることができた。調べ学習の際には、各個人の問題意識を反映した発表がされていたため、重視する問題の違いに面白さを感じると同時に、その分野に対して新たに得る知識も多かった。(文学部1年・男性)

1-7. 国内外の中学校・高校・大学との交流

前年度に引き続き、2019年度も中学生・高校生や他大学からの被災地視察の受け入れの依頼を数多く請けた。課外・ボランティア活動支援センターが窓口となり、学生スタッフ SCRUM 企画担当やその他有志との協力の上、交流・活動を行った。以下の表に、その概要を示す。

米国ベイラー大学や兵庫県内の高校など、継続してかわりを持っている高校・大学もある一方で、日本福祉大学や古川黎明高校など、今年度初めて交流することができた先もある。遠方からの来訪も少なくなく、今後東日本大震災の伝承という点からも、全国の高校生・大学生の関心に応えるよう、積極的に受け入れを行っていく。

【表】国内外の中学校・高校・大学との交流概要

日時	交流・受け入れ先	活動内容	東北大学 参加人数	相手先 参加人数	解説・背景
6/29-30	米国ベイラー大学	東北大学生と米国・ベイラー大学生が南三陸町を訪問し、現地の方にインタビューを行い、「Humans of Minamisanriku」としてウェブ上に公開。	15	12	東北大学基礎ゼミ「留学生と共に被災地を訪れて現状を世界に発信しよう！」履修生と米国・ベイラー大学の留学生によるプロジェクト。グローバルラーニングセンター渡部留美先生担当。
7/24	鳥取県立八頭高校受け入れ	SCRUM 学生によるボランティア活動報告を3本行った。	4	6	熊本大学災害復旧支援団体「熊助組」から本学の SCRUM の活動を知り、依頼があった。横関、小林、山本、松田が対応。

8/9-8/10	兵庫県立宝塚西高校・ 尼崎西高校の受け入れ	宮城県名取市閑上地区、荒浜小学校、石巻市大川小学校などを視察。2日目に東北大学にてワークショップ・交流会を開催。	8	40	宝塚西高校田中先生より「尼崎西・宝塚西合同企画 東日本大震災被災地支援活動」の一環として交流の依頼があった。
9/1	日本福祉大学との交流	それぞれの活動報告および東日本大震災・南海トラフ地震についてのワークショップ	6	11	前任の菊池遼先生のコーディネートの元、荒浜小学校を視察したのちに東北大学にて交流会を行った。
10/2	石巻市立稲井中学校の受け入れ	ランチしながら自己紹介、交流	6	3	支援企画係からの依頼
10/24	東京工業大学の視察	質問対応	2	4	先方より、他の業務センターと併せて課外・ボランティア活動支援センターに依頼。小田中センター長、横関で対応
11/6	古川黎明高校へ講師派遣	渡邊勇、山本賢（いずれも B4）がボランティア経験等を講演	3	100	阿部が引率。台風 19 号発生に伴う本来予定講師のキャンセルから、電話にて依頼あり
11/7	仙台市立中野中学校の受け入れ	中学生の職場体験として、本センターの紹介と、ボランティアの広報（三角柱）作成作業	5	3	本学学生支援課支援企画係の依頼で職場体験の中学生を受け入れた。
12/12	同志社大学の受け入れ	質問対応	2	2	同志社大学ボランティア支援室より、支援企画係経由で依頼あり。松原、横関で対応
2/1-2	尼崎高校・神戸西高校の受け入れ	丸森町ボランティア活動の調整	1	8	宝塚西高校田中先生の依頼。松原が引率。

1-8. 緊急災害時の学生ボランティア派遣

2019年度は、災害のなかでも、とりわけ台風が猛威を振るった一年であった。年度内に発生した主な災害としては、6月18日に発生した山形県沖地震、8月27日から29日にかけて佐賀県などを襲った集中豪雨（九州北部豪雨）、9月9日に千葉県などへ上陸した台風15号、10月12日に関東地方・福島県などを横断した台風19号が挙げられる。ではそれぞれの対応であるが、山形県沖地震は、被害規模の小ささもあって、震源近くに実家のある学生の安否確認、災害ボランティアセンターの開設情報収集などを行なうにとどまった。九州北部豪雨に関しては、災害ボランティアセンターが一定期間設置されるほどの被害となったが、同じく情報収集程度にとどまった。つづいて台風15号については、関東地方出身の学生を中心にボランテ

ィアを希望する声があがったが、大学としての派遣は行なわず、学生ボランティアの派遣を行なう民間の枠組み（日本財団学生ボランティアセンター）を紹介する対応をとった。最後に台風 19 号については、宮城県丸森町を中心に 20 回以上の派遣を実施しており、学生による自主性・自発性をベースとしつつ、財源の確保、派遣の広報、現地のコーディネートといった面で積極的支援を行なってきた。以下ではそれぞれの災害へ教職員がどのように対応していったのかを時系列で記録しておく。

1-8-1. 山形県沖地震、九州北部豪雨の対応

センターでは、2019 年 4 月に教職員体制が一新され、緊急災害時の対応を経験したことのある教職員がいなくなった。そのなかで 6 月に発生した山形県沖地震は、対応のあり方が教職員個人々の経験に委ねられており、マニュアル等の形で明文化されていないことに気づかされる契機となった。教職員としては、阿部が主体となって山形県出身の SCRUM 学生に実家の安否確認を行なったのちに、ホームページ、SNS 等で災害ボランティアセンターの開設状況を収集した。しかし地域外からのボランティアを必要とする被害規模でなく、ボランティアを希望する学生も特段現れなかったことから、結果的に対応は終了となった。

8 月に発生した九州北部豪雨では、SCRUM4 年の山本賢（福岡出身で熊本派遣の学生側リーダー）を含む 3 名が、ちょうど 8 月 30 日から熊本派遣を行なう計画をしていた。そこで教員の横関や阿部は、山本の実家に対する安否確認、派遣時の安全確保に対する注意などを行った。またその後のボランティアニーズに関する確認については、山本が主体となって関西大学の菅磨志保准教授や被災地 NGO 協働センターの頼政良太代表と連絡をとり、教職員と情報共有を行なった。山本がこのような動きを見せたのは、2018 年度の大阪北部地震、西日本豪雨派遣を通して、菅准教授や頼政代表と連絡のできる関係性を構築できていたためである。逆にいえば、教職員としては災害対応に関する経験もネットワークも不足していたために、教職員主体でボランティア派遣に向けた導線をつくるのが難しくなっており、意欲ある学生に委ねる状況にあった。なお山本による報告から、現地では足湯ボランティアなど、東北大学がノウハウをもつ活動のニーズのあることが判明し、連携先として、熊本派遣で活動をともにつくりあげてきた熊本大学も候補に挙がった。しかしおりしも台風 15 号が発生し、そちらに学生の関心が向かったために、今回も派遣の実施には至らなかった。

1-8-2. 台風 15 号の対応

9 月に発生した台風 15 号は、千葉県で観測史上最大となる最大瞬間風速 57.5m/s を記録するなど、暴風による被害が特徴となっている。とくに千葉県の南部では、倒木や電柱の倒壊、飛来物による配電設備の故障から、大規模な停電・断水が発生することになり、屋根が飛ばされるなどの被害も多くなった。それでは教職員の動きであるが、まず発災から間もない 9 月 13 日に藤室玲治氏（元課外・ボランティア活動支援センター特任准教授）がセンターへ寄られる機会があり、ボランティア派遣に向けた導線のつくり方についてアドバイスがあった（千葉大学や千葉で勤務する SCRUM の OB メンバーとの連携など）。それを受けて横関が SCRUM の OB で千葉県庁に勤務する鶴澤翔太郎氏などとやり取りし、ニーズの確認を行なったが、この段階ではボランティアの派遣を決断するまでには至らなかった。

その後しばらくして、日本財団学生ボランティアセンター Gakuvo の宮腰氏から Gakuvo として学生ボランティアの派遣を検討している旨の連絡があったため（9 月 20 日）、SCRUM のライングループやミーティングなどでも周知すると、SCRUM1 年の高橋瑞季をはじめ、関心のある学生が複数人集まった。ただし Gakuvo の派遣は東京集合解散であることから、学生からは東京までの移動や交通費の確保がネックになるという声があがった。そこで教員の松原・阿部を中心に Gakuvo の宮腰氏へ仙台発のボランティア派遣などを提案したが（10 月 2 日）、遠隔地である仙台から派遣する意義の低さもあって実現しなかった。さらに現地の状況としても、SCRUM の山本が菅准教授に同行する形で視察したところ（10 月 7 日）、「屋根のブルーシート張り」「チェーンソーでの倒木対応」など専門技能の求められるニーズが中心で、学生ボランティアにできる活動が見出しづらい状況があった。ここから課外・ボランティア活動支援センター/SCRUM としての派遣を断念し、意欲ある学生には、Gakuvo 主催の派遣を案内することにした。学生が Gakuvo の派遣に参加しやすくするため、学内の参加者集約や長靴などの物品貸出、ボランティア活動保険の加入代行をすることとした。そして Gakuvo の第一回派遣が 10 月 19 日に決まり、派遣に

向けた支援をしている最中に、台風 19 号が日本列島を襲うことになる。参考までに、東北大学の学生における Gakuvo 派遣の参加状況を以下に記録しておく。

【表】 台風 15 号へのボランティア派遣

派遣	日時	活動内容	参加人数	備考
第 1 次派遣	10 月 19 日	千葉県鋸南町でビニールハウスの解体等	4	Gakuvo 主催派遣への参加
第 2 次派遣	10 月 20 日	千葉県鋸南町でビニールハウスの解体等	3	Gakuvo 主催派遣への参加

1-8-3. 台風 19 号の対応：学生の安全確保という視点から

10 月に発生した台風 19 号は猛烈な雨をもたらす雨雲を伴っており、長野県から東京都、福島県、宮城県、岩手県にいたるまで広範囲に豪雨による被害をもたらした。この台風を災害対応の視点からみると、既にあげた災害と比べて三つの面で異なる特徴を有していた。

第一に、本学学生の多くが生活する仙台市においても暴風と猛烈な雨が襲い、市内の一部が冠水する事態になったことがある。ここから学生の安否をいかに確保するかという視点からの対応が必要となった。第二に、台風 19 号では本学学生が東日本大震災からの復興支援としてボランティア活動を行ってきた地域、具体的にいうと、福島県いわき市や宮城県石巻市なども大きく被災したことが挙げられる。このような特徴から、発災前から復興支援という縁で関わってきた相手・地域とどのように向き合うかという視点からの対応も求められた。第三に、台風 19 号の被災地では泥だしや家具の運びだしなど、学生でも対応できるニーズが多く発生し、宮城県内に限ってみても、13 市町で災害ボランティアセンターが立ち上がった。ここから学生ボランティアの派遣に関するニーズが大量にある状況への対応が求められたといえる。以下では、この三点に沿って教職員の対応をみていく。

【当日の安全確保】

台風 19 号による豪雨が襲った 10 月 12 日～13 日朝にかけては、仙台市内でも全域にわたって避難勧告が発表され、川内キャンパス周辺は冠水、携帯電話には避難を呼びかけるエリアメールが複数回にわたって届く状況にあった。ここから SCRUM の学生からは他の学生に対して避難所への移動を促す声などもあがったが、教員の松原・阿部から「避難場所次第では避難行動が危険な場合もあること」「自宅の置かれた環境などをもとにした各自での判断が重要であること」など、安全を確保のうえで基本的な注意を呼びかける対応をとった。台風の通りすぎた後には、SCRUM の学生やたなぼたの学生、井戸端会議のライングループに参加している学生など、教職員が速やかに連絡できる学生に対して、被害があれば報告するように促した。その結果、幸いなことに教職員が連絡できる範囲ではとくに被害が発生していないことが判明した。

【活動の安全確保】

安全確保に関しては、台風の直撃する前後の日程に予定されていたボランティア活動への対応も求められた。10 月 12 日周辺は 10 月最初の三連休にあたっており、ボランティア活動を行なうのに絶好の機会になっていたためである。活動実施届の出ていた活動は、10 月 12 日（土）の SCRUM 国際部による「稲刈りカップ（気仙沼市が会場）」運営ボランティア、10 月 14 日（月・祝）の福興 youth による「稲刈り交流イベント（福島県楡葉町が会場）」である。そこで教職員としては、二つのボランティア活動への対応を行なった。

「稲刈りカップ」については、9 日（水）の時点で大型台風の到来が予想されたため、教員の横関より交通網のマヒを見据えて中止・活動内容の変更などを検討するように要請した。前日（11 日）午前には、利用を予定した新幹線の運行中止が発表されたため、学生と話しあって中止を決定する。しかし主催者にその旨を伝えたところ「マイクロバスで仙台駅まで送る」という申し出があったため、再度の実施可能性を検討したが、教員や一部学生が「(活動のゴールである) 自宅までの移動においても安全を確保できるか」という視点から考えるように投げかけた。その結果、自宅まで移動する時間帯に強い雨が予想されることから、学生の側で中止を決断するに至った。

福興 youth の「稲刈り交流イベント」についても、10月9日（水）の時点で、教員の横関が活動を安全に実施できるか確認するように学生へ促す対応を行なった。これを受けて学生が主催者に確認したところ、イベント自体は中止にするが有志で稲刈りは行なうため、できれば参加してほしいという趣旨の連絡があった。そんななか台風直撃から一夜明けて活動前日（13日）になると、移動経路のほとんどを占める常磐道が一部通行止めになっており、主催者からも稲刈りの参加を大事にしなくてもよい趣旨のメッセージがあった。ここから改めて活動を実施するか否かの判断を迫られることになったため、教員から①常磐道の通行止めが解除され、安全に現地へ行けるか、②参加者に台風直後の活動について負担感がないかという活動を実施するうえでの判断基準を提示し、学生について②の意見を求めた。その結果、①常磐道の通行止めが解除され、②学生のなかでも活動に行きたいメンバーが多数派となったため、教員の横関による判断として、活動の実施を決定することとした。

1-8-4. 台風 19 号対応：発災前から縁のある地域の被災という視点から

学生の安全確保・確認がひと段落すると、教職員では学生に対して、活動地域で普段お世話になっている方がたへの連絡や状況確認をするように促した。この対応は教員の阿部が SCRUM の学生に対して呼びかけたが、実際には呼びかけるまでもなく学生から自発的に連絡をとっていたパターンが複数あった。例えば SCRUM3 年の松田敦之は、福興 youth の中心メンバーとして活動してきたが、10月12日の晩から活動先であるいわき市の永崎団地・下神白団地の方などとやり取りをし、現地状況を確認していた。このような対応が見られたのは、普段の活動を通して、学生と活動先の方がたの間で親密な関係性が生まれていたからこそといえる。なお連絡をとった結果、SCRUM で普段お世話になっている方がたには幸いにも浸水被害などがなかったが、「宮城県石巻市」「福島県いわき市」など、活動先の自治体レベルでは被災された方も多く存在することが明らかになった。そこで教職員としては、阿部・松原を中心に、宮城県石巻市を活動拠点とするインクストーンズ、福島県いわき市を活動拠点とする福興 youth（いずれも SCRUM の参加団体）に対して、台風 19 号で被災した方への支援も検討するように働きかけた。

【石巻市への対応】

宮城県石巻市への対応としては、教員の松原が 10月14日に石巻での（台風 19 号対応とは関係のない）会議に参加したところ、石巻市内においても災害ボランティアセンターが設立予定であり、ボランティアを集めるのに苦慮しているという情報を耳にした。また折しもインクストーンズは、週末（20日）に石巻市の災害公営住宅で個別訪問することを当初から予定していた。そこでインクストーンズのメンバーに対して、松原や阿部、3年の和久晋太郎（西日本豪雨派遣、熊本派遣の参加経験もあり）などが災害ボランティアセンター経由での活動を提案したところ、意欲ある学生がほとんどであったことから、20日に予定を変更して台風 19 号ボランティアを行なうに至った。その際教員の松原の方では、災害ボランティアセンターに対する事前連絡や活動に求められる長靴の用意、ボランティア活動保険の加入手続き代行といった形での支援を行なった。インクストーンズの他にも石巻では授業「東日本大震災からみる現代日本社会」と SCRUM 震災伝承部の合同ツアーとして、石巻市の大川小学校跡を訪問し、「大川伝承の会」に語り部をお願いする予定をしていた（10月20日）が、大川小学校跡も台風 19 号で浸水するなどの被害を受けていた。そこでこちらも予定を変更し、語り部をお願いする前に一部メンバーで清掃活動を行なうことにした。大川小学校跡における清掃活動は、その後活動に参加した SCRUM 震災伝承部の野村俊介（二年）からインクストーンズの学生に意義・必要性が伝えられ、インクストーンズの企画する 11 月の派遣にも組み入れられた。

【福島県いわき市への対応】

一方の福島県いわき市については、石巻市と同様に情報提供や災害ボランティアセンター経由の活動などの提案も行なったものの、様々な要因から、台風 19 号に対応する派遣は 1 回のみとなった。まず発災直後から学生も交えて現地の情報収集を行なってきたが、福興 youth では 10 月～12 月にかけて実施の決まっている活動が複数あり、いずれも予定を変更するのが困難な内容であった。それでも 11 月のミーティングでは、現地に依然としてニーズがある点を踏まえて台風 19 号に対応する派遣の検討もスタートし、12 月には日帰りで災害ボランティアセンター経由での活動を行なった（12 月 1 日）。活動終了後は、さらに参加者から再度の活動を希望する声もあがったが、他の活動との兼ね合いや仙台から往復 5 時間以上かかる移動距離の問題もあって、再度の活動を行なうには至らなかった。

1-8-5. 台風 19 号の対応：ボランティアニーズの大量発生という視点から

以上は宮城県石巻市、福島県いわき市の被災への対応であったが、台風 19 号では宮城県内各地にも甚大な被害をもたらした。そこで教職員としては「SCRUM が主体となった、発災前から縁のある地域の支援」という形以外にも、多様な主体による各地でのボランティア活動を促すことにした。発災前に（課外・ボランティア活動支援センターとして）縁のなかった地域のうち、最も活発にボランティア派遣が行なわれてきたのは宮城県丸森町である。丸森町では、①SCRUM メンバーの派遣に加えて、②大学主催の派遣、③Gakuvo 主催の派遣、④SCRUM に所属しない学生も交えた丸森派遣チームとしての派遣を行ってきた。

【現地視察：10月14日】

丸森町との関わりは、台風 19 号が通過して間もない 14 日（月・祝）に、菊池遼氏（前課外・ボランティア活動支援センター学術研究員）と教員の松原、SCRUM のメンバーで現地視察をしたことから始まる。仙台出身で宮城県内に豊富なネットワークをもつ菊池氏は、偶然にも 10 月 14 日に仙台へ訪れる予定があった。そこで SCRUM の山本経由で、SCRUM メンバーへ現地視察の提案があり、松原も加わって現地視察が実現する形となった。視察先としては、当初からメディアでも被害が報じられてきた大郷町の吉田川流域と角田市、丸森町が候補にあがったが、移動時間の関係上、この日は角田市と丸森町を訪れた。その際、丸森町で目にした被害の甚大さが教員・学生ともに印象的であったために、県内各地にある被災地のなかでも丸森町を中心に学生ボランティアの派遣を検討することとした。

【活動財源の確保：10月15日～16日】

昼休みに現地視察の振り返りを行なうミーティングがあり、そのなかで SCRUM 二年の野村俊介がボランティア派遣に対する強い意欲を示した。晩には仙台市ボランティアセンター主催の「災害ボランティアサポーター養成講座」が発災前から予定されていたため、こちらに SCRUM メンバーへの参加を促し、災害ボランティアセンターに関する基礎知識を学んでもらった。講座終了後は、野村と松原で派遣しようとする財源確保が課題になることを確認し、教員の松原が SCRUM 幹部に対して SCRUM の自主財源（yahoo! 寄付金からの寄付）の活用を提案した。そこで翌日には松原と SCRUM 幹部で、yahoo! 寄付金の使用に関する緊急ミーティングを行なった。その結果、「丸森町へのボランティア派遣については、当面のあいだ自主財源を充当する」「中長期的には、助成金の獲得も検討する」方針となり、当面の活動財源を確保することができた。

【SCRUM 主催派遣の開始：10月18日】

この日は平日（金曜日）であったが、工学部の学生は運動会のため一斉休講となる日であった。そこで工学部である野村が中心となって参加者を集め、SCRUM メンバー4名で、丸森町災害ボランティアセンターの設置準備作業（設置予定場所の清掃など）を行なった。その際には教員の松原が、知りあいの支援者（NPO 法人地星社の布田氏）と連絡をとり、災害ボランティアセンターの設置準備状況などを確認するサポートを行なった。この日の活動報告を受けて、SCRUM メンバーの経験を活かした活動へとつなげるため、松原が facebook の「丸森【被災・復旧】情報共有グループ」に投稿し、SCRUM の活動紹介と学生ボランティアによる支援の提案を行なった。

【災害ボランティアセンターのニーズ確認：10月21日～23日】

週明けの 21 日（月）には松原が地星社布田氏の誘いをうけて、台風 19 号に関する支援者の連絡会議（宮城県災害ボランティアセンター支援連絡会議）に出席した。その場で丸森町災害ボランティアセンターの支援に入っていた宮城県社会福祉協議会の稲邊氏より災害ボランティアセンターの運営人数不足が課題となっていることを伺ったため、支援要請があると災害ボランティアセンターへの派遣を含めて動きやすいことをお伝えした。

22 日（火）になると、丸森町社会福祉協議会よりボランティア派遣を要請する文書を頂いた。翌日の 23 日（水）には松原と SCRUM の山本、野村で丸森町を訪問し、災害ボランティアセンターの運営支援（ニーズの整理など）や被害の甚大な竹谷地区での家財搬出などを行なった。この日の丸森町の活動では、災害ボランティアセンターの運営支援だけでなく、一般の災害ボランティア活動についても大きなニーズがあり、一般の学生を巻き込んだボランティア派遣も重要となってくることを確認する機会となった。

【大学主催バス派遣の決定：10月25日～27日】

25日（金）には小田中センター長と松原で、課外・ボランティア活動支援センターの所属する高度教養教育・学生支援機構の滝澤機構長と面会し、丸森町の現状とニーズについて報告を行なった。その結果、機構長裁量経費を財源として、一般学生も巻きこんだ大人数のバス派遣を3回実施すること（11月2日、10日、17日）、バス派遣にあたっては一般学生に広く周知させるために、学務情報システムを通じた全学生への情報配信を行なうことが決定した。つづいて週末の10月26日～27日にかけても、松原とSCRUMメンバーで災害ボランティアセンターに関する運営支援を行なったが、災害ボランティアセンターでは立ち上げ間もないことから、大人数のボランティアをマッチングできる体制が構築できていない状況にあった。そこでバス派遣や一般学生に対する募集の実施を再検討する必要性が迫られた（後日、災害ボランティアセンターにバスの受け入れが可能であることを確認のうえ、実施を決定）。

【派遣体制の検討：10月28日】

台風19号の発災後は、丸森町派遣についてSCRUM内部での情報共有が十分にできておらず、台風15号対応との関連も整理ができていないままに突発的な派遣を行ってきた。そこでSCRUM代表である高嶋の呼びかけで、28日（月）に台風15号対応・台風19号対応に関するSCRUMのミーティングを初めて行った。この場で台風15号被災地への派遣はひとまず終了するとともに、台風19号被災地ではSCRUMメンバーのみの活動に限界があり、ボランティア団体の学生や一般の学生を交えて活動していく方向性が確認された。また第一回バス派遣（11月2日）に関して、SCRUMメンバーの協力を募り、実施するうえで必要な作業の役割分担を決めることができた。具体的な作業としては、参加者募集の広報、参加申込フォームの作成、参加者の対応（参加決定の連絡等）、活動実施届の提出、物品の準備、活動のコーディネート、しおりの作成、振り返りアンケートの作成、活動後の物品清掃、会計管理、バス内のガイダンスといった点が挙げられ、このうち参加申込フォームの作成と活動のコーディネート以外はSCRUMメンバーの協力を得られることになった。

【バス派遣の準備：10月29日～11月1日】

29日（火）には、第一回バス派遣に向けた参加者募集を開始する。募集にあたっては原則として申込順に参加者を決定することにしたが、最初にボランティア団体に所属する学生に対して井戸端会議のライングループ等で参加を呼びかけ、少し時間差を置いてから、学務情報システムで一般学生の参加を呼びかけるという流れをとった。このような対応をとったのは、ボランティア団体に所属する学生だとSCRUMメンバーと顔のみえる関係性にある場合が多く、活動前後に発生する物品準備・清掃、活動現場でのリーダーなど、大人数で活動するうえで必要な作業・役割について理解や協力を得られやすいと考えたためである。実際バス派遣では、ボランティア団体に所属する学生が毎回参加し、SCRUMメンバーと協力して運営の役割を担ってもらうことができた。ちなみに参加の申込は、募集を開始したその日に80名ほどからあったため、やむなく一日で申込を打ちきることになったが、このことは改めてボランティアの関心をもつ学生自体は多い事実を確認する機会となった。

バス派遣にあたっては、現地での移動しやすさを考慮してマイクロバスを借上げ、各回20名を定員とした。この人数は、東日本大震災被災地でのボランティアツアーなどでは集めるのに苦慮する規模であったが、丸森派遣については、募集当日に全ての日程で定員を超える応募があった。学生のこのような反応からは一般学生も台風19号被災地でのボランティア活動について関心が高い事実を確認できたが、それと同時に、関心ある学生の思いへ応えるためには課外・ボランティア活動支援センター主催の活動のみだと不十分である点も突き付けられることになる。そこで11月第一週の三連休（2日～4日）には宮城県社会福祉協議会や丸森町社会福祉協議会が主催し、丸森町活動するボランティアバスも予定されていたために、定員を超過した学生等に対してはそちらの紹介も行なうことにした。なお宮城県社会福祉協議会が主催する11月2日のバスでは、現地までバスを添乗するスタッフの確保に苦慮していたために、教員の松原経由で急きょSCRUMメンバーに呼びかけ、2名にバスの添乗ボランティアを依頼した。

【バス派遣のスタート、足湯ボランティアのニーズ確認：11月2日～4日】

11月2日（土）の第一回バス派遣では22名が参加する。内訳は教員が1名、SCRUMメンバーが5名、ボランティア団体メンバーが2名（HARU1名、AsOne1名）であり、SCRUMメンバーとボランティア団体メンバーで運営のライングループをつくり、事前の物品準備（長靴、手袋など）、当日の現場リーダーなどを分担して行なった。なお参加者をみると、大学祭期

間中とあって3年生以上が中心であり、大学院生も含まれていた。活動にあたっては丸森町災害ボランティアセンターにマッチングを依頼する形をとり、丸森町災害ボランティアセンターと連携する OPENJAPAN による指示のもと、上林東地区で家具家財の搬出などを行なった。また活動終了後は、東北大学のホームページに活動報告を掲載し、対外的にも課外・ボランティア活動支援センターの活動について情報発信をした。

その後二日間は SCRUM メンバーが大学祭に出店していることを考慮し、派遣は実施しない予定であったが、丸森町へ支援に入っていた菊池氏から避難所での足湯ボランティア活動について提案があった。そこで4日(月・祝)に、松原と菊池氏、伊藤氏(福島大学災害ボランティアセンターOB)で丸森町役場、避難所等を訪れ、担当職員に足湯ボランティアを紹介するなどして、その後の活動に向けた準備作業を行なった。

【SCRUM メンバーの疲弊：11月5日】

大学祭明けの5日は、SCRUM の事務局ミーティングがある日であり、事務局メンバーで助成金申請について検討した。この場に臨席した菊池氏からは、助成金を申請する意義や中長期的に活動を継続していく方向性などが提案されたが、SCRUM 代表の高嶋や丸森町派遣をリードしてきた野村などから「他の活動も抱えながら、一般学生を巻き込んで毎週のように派遣するのは限界がある」「助成金の申請作業について負担が大きい」といった声があがった。ここから教職員には、助成金の執筆分担、一般学生を巻き込んだ活動における SCRUM メンバーとの役割分担、毎週のように行ってきた活動頻度の見直しなど、SCRUM メンバーが疲弊せずに活動できる体制づくりの必要性を突き付けられることになった。

【バス・足湯合同派遣の開始、足湯連携体制の構築：11月6日～17日】

これらの課題のうち助成金問題については、6日に行った Gakuvo 宮腰氏との協定事業に関する定例ミーティングで状況が変化する。ミーティングにおいて、台風19号被災地におけるボランティアの派遣状況を共有したところ、宮腰氏より、協定事業の一環で派遣にかんじた交通費・物品費や必要物品の支給も可能であるといった趣旨の申し出があった。この申し出を受けて、当面のあいだは Gakuvo との協定事業の枠組みで派遣を行なえることになった。しかしながら SCRUM メンバーとの役割分担という面で見ると、第二回バス派遣(10日)では別動隊として足湯ボランティアをするチームを設けたが、こちらに教員や SCRUM メンバー、ボランティア団体の学生が入ったために、バス部隊の運営メンバーに役割が集中する結果となった。そこで第三回バス派遣(17日)では、前回の反省を踏まえ、バス部隊とレンタカー部隊(足湯部隊)で運営メンバーに偏りがないように人数配分して活動を行なった。

第二回、第三回バス派遣の活動をみると、バス部隊では、いずれも第一回と同様に丸森町災害ボランティアセンターにマッチングを依頼して活動を行なった。レンタカー部隊では、松原が避難所の担当職員や在宅避難者を対象とした支援を展開する OPENJAPAN の吉田氏と連絡し、足湯ボランティアの実施可能な場所について調整を行なった。なお避難所での足湯ボランティアについては、11月4日以降、福島大学災害ボランティアセンターと東北大学で活動予定や活動で聞いた「つぶやき」などを facebook グループ上で共有し、連携した支援を行なうことになった。このグループに10日以降は、丸森町における避難所等での支援を予定していた神戸大学 Konti の学生・コーディネーターも参加し(SCRUM の山本経由)、足湯ボランティアの経験を持つ三大学で避難所等でのソフト系支援を模索する枠組みがうまれた。

その他に SCRUM 以外の学生ボランティア団体による動きとして、11月17日に AsOne による丸森町派遣も行われた。これは SCRUM の野村(AsOne にも所属)による働きかけで実現したものであるが、課外・ボランティア活動支援センターとしては、この派遣に対しても活動物品(長靴、手袋、救急箱など)の貸出を行なった。

【派遣運営の負担軽減に向けて：11月19日～21日】

機構長裁量経費による三回のバス派遣が終了し、週明けの19日(火)・20日(水)には、松原が呼びかけて丸森町を含む台風19号被災地での活動方針を検討するミーティングを行なった。19日は派遣に参加したことのある SCRUM メンバーを主な対象とし、これまでの活動の振り返りと、今後の活動方針(頻度、内容を含む)について検討する。その結果、丸森町での活動継続に意欲はあるが、参加者に占める運営メンバーの人数が少ないこと、SCRUM 内部でも活動参加者・非参加者間で情報量や意欲の格差が生じていることなどを改めて確認し、継続的に活動できる運営体制が最大の課題である点を共有した。そこで翌日(20日)のミーティングでは、「派遣に参加したことがない」もしくは「SCRUM メンバーでない」が丸森町での活動

に関心をもつ学生にも呼びかけ、丸森町におけるニーズの状況を共有したうえで、派遣の日程調整、派遣前後の準備・後片付けについての協力要請、情報量の格差を埋めるためのアイデアだし（写真の共有、活動報告など）を行なった。ただし運営体制としては、教職員と SCRUM メンバーのみだと厳しい点こそ共有できたものの、「引率を誰が行なうか」「一般学生にも広く呼びかける場合、誰が広報や参加者対応を行なうか」といった実務面において課題が残る状況にあった。このような課題が部分的に解決したのは 21 日（木）に行なった、Gakuvo 宮腰氏とのミーティングにおいてである。

21 日のミーティングは、前回のミーティングで宮腰氏から交通費・物品費や必要物品の支給に関する申し出があったことをうけて、具体的な執行手続きの確認、活動予定の共有などを行なうために設けられたものである。このミーティングで宮腰氏に運営体制の課題を相談したところ、Gakuvo 主催・仙台発の派遣を提案いただいたため、一般学生に広く参加を呼びかける派遣については、課外・ボランティア活動支援センターが共催、SCRUM が協力する運営体制のもとに実施することにした。新たな運営体制では、具体的にみると、以下のような役割分担のもとに派遣を行なった。

【表】 Gakuvo 主催派遣の運営体制

主体	役割
Gakuvo	申込フォームの作成、参加者の募集・対応、移動手段（1 回を除くとバス）の調達、活動物品の用意（ヘルメット、ゴーグルなど）、引率者の配置、活動のコーディネートなど
課外・ボランティア活動支援センター	参加者の募集（学務情報システムを通じた全学周知、SCRUM メンバーへの声かけ）、活動物品の貸出（長靴など）、活動物品保管場所の提供（倉庫）、学研災・学研賠の適用手続き（活動実施届の提出など）、学内駐車スペースの確保など
SCRUM	参加者募集の協力（ボランティア団体や SCRUM メンバー、過去の派遣参加者に対する参加呼びかけ）、活動物品の準備・清掃、派遣当日の運営サポートなど
リピーター（SCRUM 以外）	活動物品の準備・清掃など

【他団体メンバーを交えた SCRUM 主催派遣の開始：11 月 30 日～12 月 1 日】

一般学生に広く参加を呼びかける Gakuvo 主催の派遣が決まったことを受けて、SCRUM としてはボランティア団体の学生や過去の派遣参加者など、顔のみえる関係性にある学生同士で、「学生ボランティア」の参加を求める現地支援団体や避難所、仮設住宅における戸別訪問・サロン活動など、災害ボランティアセンターに아가ってこないニーズに対応する方向性へ舵をきることになる。11 月 30 日～12 月 1 日には、SCRUM の野村が中心になって、バス派遣後最初の SCRUM 主催派遣を行なった。このうち 1 日の活動については、災害科学国際研究所の佐藤大介先生から課外・ボランティア活動支援センター宛てに「文化財レスキューに関する支援」の要請があったため、教員の松原が、当初から 1 日に活動を予定していた野村とつなぐ形で実施している。

12 月 1 日（日）には、SCRUM 主催の派遣とは別に、Gakuvo 主催のバス派遣（通称、ながぐつプロジェクト）の第一弾も行った。こちらの活動は、Gakuvo の宮腰氏の方針で、災害ボランティアセンター経由でなく OPENJAPAN に直接マッチングを依頼する形がとられ、災害ボランティアセンターにニーズとして아가ってこなかった神社（中島天神社）での活動が割りあてられた。なお中島天神社での活動は、OPENJAPAN と連携するスマイルシードがコーディネートしており、12 月 1 日以降の Gakuvo 主催派遣は、スマイルシードにコーディネートを依頼する形で継続している。

【野村コーディネートによる SCRUM 主催派遣の開始：12 月 5 日～2 月 9 日】

11 月までの活動は、教員の松原が主にコーディネートしてきたが、12 月に入ると、SCRUM 主催の活動については、SCRUM の野村が主にコーディネートする体制がつくられる。このような体制ができた一つの契機は、丸森町で支援活動を行なう団体が一同に会する「支援者情報共有会議」（12 月には毎週開催）に野村が出席するようになったことである。支援者情報共有会議は、12 月 5 日以降、丸森町に関わる団体・人と誰でも参加可能な形式となり、幅広い参加が呼びかけられた。この会議に野村が参加意欲を示したため、SCRUM を代表して毎回参加してもらうようにしたところ、野村が現地の支援団から

学生ボランティアに対する様々なニーズを引きだし、SCRUM 主催の活動へつなげる形がうまれた。12月から2月はじめにかけては、SCRUM 主催の少人数派遣を8回・合計11日間実施したが、そのうち7回は野村が現地支援団体のニーズをもとにコーディネートした活動であり、避難所・仮設住宅での足湯から子ども遊び場への参加、在宅被災者の多い地域でのクリスマス会まで、多様な活動を、スマイルシード、マザーウイング、OPENJAPANなどの団体と連携して行なった。とくに12月21日・22日は、仮設住宅の入居が始まったタイミングで丸森町社会福祉協議会などと連携して戸別訪問などを行なったが、この活動は情報共有会議への参加等を通じて、野村が現地ニーズに関する把握や継続的な関わりを見込まれたからこそその依頼でもあった。

一方のGakuvo主催の派遣については、12月~2月にかけて7回実施されている。こちらの活動は、既に触れたように、Gakuvoがスマイルシードにコーディネート依頼する形で行なわれ、主に中島天神社での復旧支援活動を行なってきた。Gakuvo主催の派遣は、大学生全般が参加対象にあたることから、参加者のうちSCRUMメンバーが占めるのは0人~5人程度であり、SCRUM以外の東北大学生、東北大学以外の大学生についても参加がみられた。またSCRUMメンバーでないがリピーターの東北大学生も現れ、最終的には事実上の運営メンバーとして、物品準備等にも関わってもらった。とくに渡部詞稀（経済学部4年）と横関文弥（医学部4年）は、ともに5回~6回/全7回参加しており、Gakuvo派遣を率いる役割を担った。

【Gakuvo 主催派遣終了後の展開：2月15日~】

Gakuvo 主催派遣が終了した2月9日（日）以降もSCRUMによる丸森町派遣は続いている。派遣形態はおおむね三つのタイプに分かれるようになってきた。一つは現地支援団体と連携したボランティア活動である。このタイプの派遣は、2月15日のOPENJAPANと連携した活動、21日のスマイルシードと連携した活動などが当てはまり、引き続き野村がコーディネートして行なってきた。二つ目は、現地支援団体JENと連携した防災ワークショップの参加である。こちらは当初野村経由で依頼があったが、野村が参加できないことから、SCRUM1年の逸見、教員の松原が窓口となって参加してきた。ワークショップは、台風19号発災前後の対応について検証し、防災体制を改善することなどを目的に行っており、松原や参加学生が議事録の作成、グループワークの実施補助などを担ってきた。三つ目は、在宅被災者や仮設住宅の入居者を対象にしたソフト系支援である。こちらは課外・ボランティア活動支援センターの元教員で、現在は被災地に学ぶ会/神戸大学救援隊として活動する藤室玲治氏にコーディネート依頼しており、藤室氏が各地の緊急対応で培ってきたノウハウを生かす形で進めている。

最後にSCRUM主催の派遣は3月にかけても実施予定であったが、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大に伴って、課外・ボランティア活動支援センターからはボランティア活動の自粛要請を行ない、丸森町の災害ボランティアセンター、現地NPOなども2月末以降、ボランティア活動の中止を決定した。そこで学内における他のボランティア活動と同様に、3月中の派遣は全て中止されることになった。

1-8-6. 小括

ここでは2019年度に発生した各災害への対応から見えてきた、緊急対応に関する課題と方向性を示しておく。

第一に、緊急災害対応のあり方は教職員それぞれの知識や経験・ネットワークに委ねられている部分が大きく、教職員体制が一新されると、一から考えていかねばならないという課題があった。2019年度は、結果的に台風19号の被災地で活発な学生ボランティアの派遣を行なうことができたが、その理由を振り返ってみると、10月より教員に着任した松原が宮城県内の支援者とネットワークを有していた、前教員の菊池氏、藤室氏があいついで支援に入り両氏のネットワークやノウハウを活用できた、SCRUMのなかにある程度自由に動けてかつ意欲ある野村という存在がいたなど、さまざまな条件が偶然にも満たされたためという点が多い。言い換えると、もう一度同じような緊急災害が発生したとしても、センターとして定まった対応方針がないため、同様の対応ができない可能性が高い状態にあるといえる。そこでセンターとしては、災害ごとに臨機応変な対応は求められつつも、いずれの災害でも共通して必要な対応・視点を明示していくことが今後の課題となっている。例えば表3のような視点・対応は、災害対応を何度か行なうなかで教職員間の共通認識となりつつあるが、これらをフローチャートやマニュアルといった形で共有し、継承していくことも重要であろう。なお災害時の緊急対応をめぐるのは、2019年度に限って

も他大学から2件照会があり（仙台白百合女子大学、同志社大学）、大学ボランティアセンター共通の課題となりつつあることも記しておく。

【表】災害時の学生ボランティア派遣に関する対応フロー

フェーズ	対応	具体的内容
災害発生前（場合によっては発生直後）	実施予定であったボランティア活動の安全性に関する判断	<ul style="list-style-type: none"> ・災害発生予想の情報提供 ・活動実施の意思決定に関する判断基準の提示
災害発生中	安全性確保の呼びかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・災害発生に関する情報提供 ・避難等に関する判断基準の提示（最終的には各自による判断を要請）
災害発生直後	関係者に対する被災状況の確認	<ul style="list-style-type: none"> ・学生やその家族の被災状況照会 ・関係性のある住民、地域、団体、大学などへの照会
安全面の確認終了後	ボランティア派遣の必要性に関する判断	<ul style="list-style-type: none"> ・被災の特徴に関する情報収集 ・被災地でのボランティアニーズ（災害ボランティアセンターの開設状況等）に関する情報収集 ・被災地との関係性（被災前から縁のある団体があるかなど）確認 ・学生の派遣意欲に関する確認
ボランティア派遣の決定後	ボランティア派遣に向けた調整	<ul style="list-style-type: none"> ・事前視察の実施…移動手段、宿泊場所、活動に必要な装備、生活物資の確保方法などを検討 ・現地カウンターパートの検討 ・財源の検討 ・組織体制の検討 ・派遣規模と開始時期の検討
ボランティア派遣の調整終了後	ボランティア派遣に向けた準備	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者募集 ・活動物品の準備（購入など） ・現地カウンターパートとの活動内容調整
ボランティア派遣の実施直前	参加予定の学生フォロー	<ul style="list-style-type: none"> ・被害状況や活動上の注意点、活動内容などのガイダンス ・ボランティア保険の加入 ・活動物品の貸出 ・学生の参加目的等について確認
ボランティア派遣の実施後	参加学生への対応	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返り（リフレクション）の実施 ・心のケア ・次回派遣に向けた意欲関心の確認

第二に、とりわけ発災前後に予定していたボランティア活動では、安全を確保するうえで「学生による自主性の尊重」と「教職員による支援・関与」のバランスをいかにとるかが課題となった。台風・大雨などの襲来が予測される場合あるいは発災直後の場合、ボランティア活動に危険を伴う可能性があるため、教職員としては、安心・安全を確保するための支援が重要となる。このような支援の重要性は、東日本大震災後に大学組織として、東日本大震災学生ボランティア支援室（課外・ボランティア活動支援センターの前身）が設立された一つの背景にもあった。とはいえボランティア活動は、大学主催でない限り、学生の自主性をもって行なわれる性質があるため、最終的な意思決定は学生に委ねられることになる。そこで被災状況・予測についての情報提供、安全に関する視点の提示といった支援は必須としつつも、どの程度教職員としての意思を表明するか（自粛要請など）が問われている。ボランティア活動においては、さらに支援対象となる「相手」も存在するため、学生、

教職員だけでなく活動先の方がたの意思という要素も加わり、より意思決定は複雑になっている。ではこの課題にどう取り組みかであるが、発災直前になって一から議論を始めると、時間の問題から学生・教職員・活動先の方がたそれぞれが納得のいく形で意思決定することは困難であり、いずれかの意思に従う形での「見切り発車」になる可能性が高い。したがって平時から安全を確保するうえで必要な要素、意思決定の基準といった点について教職員・学生（+活動先の方がた）で話しあい、共有しておくこと（例、チェックリストの作成）が、よりよい意思決定の実現につながると考える。

第三に、センター／SCRUMとしては、これまで東日本大震災をのぞくと、熊本地震（2016年）の熊本県、平成30年7月豪雨（2018年）の広島県など、遠隔の被災地を中心にボランティアを派遣しており、「遠隔地支援」という形でノウハウが蓄積されてきた。しかし台風19号では、宮城県内各地に被害が生じ、「地元」に大量のボランティアニーズが発生するという経験のない状況となったため、この新たな状況へいかに対応するかが課題となった。対応にあたって、一方では、被災前から縁のある地域へそこに縁のある学生がボランティアに赴くという「地元」ならではの形（例、インクストーンズメンバーによる石巻市での支援）、あるいは災害時の緊急対応について一定の知識／経験をもつ学生が、彼ら・彼女らだからこそできるボランティア活動を行なう形（例、SCRUMメンバーによる丸森町での災害ボランティアセンター運営支援、避難所支援）が考えられる。他方で、台風19号のような状況では、ボランティアの担い手として一人でも多くの学生の参加することが社会的に要請されるし、「地元」の被災によって何かしら自分にできる支援をしたいという思いをもつ学生も多く現れる。そこで「ボランティア団体に所属していない学生（いわゆる一般学生）」に対して、ボランティア活動へ関わってもらい導線をつくるのが同時に求められる。その際には大学ボランティアセンター単独で取り組むのではなく、様々な面で学内・学外のリソースを積極的に活用し、協働する方向性も重要になってくる。台風19号対応の例をあげると、課外・ボランティア活動支援センター主催ではバス派遣を三回企画し80名弱を送りだすが（リソース的に）限界であったが、共催・協力あるいは学生に情報提供した企画を含めると、丸森町社会福祉協議会・宮城県社会福祉協議会主催の派遣（11/2～17まで五回）、学生団体AsOne主催の派遣（一回）、日本財団学生ボランティアセンター主催の派遣（12/1～2/9まで七回）など、多くの企画を用意することができた。広報面では全学生に対する情報配信システムの活用、文学部でのポスター掲示、災害関連授業を受講する学生へのチラシ配布など、ボランティア派遣に理解ある学内の部局・教員等の協力を得ることでより多くの学生へのアプローチが可能となつたし、活動物品面でも、日本財団学生ボランティアセンター、みやぎ連携復興センターなど、学外組織から提供を受けることで、課外・ボランティア活動支援センターの財源に限られるなかでも必要物品を用意することができた。今後の災害対応においても、同様に学内・学外のリソースの活用を前提に進めていく必要があるだろう。

第四に、三つ目とも関連するが、学生ボランティアを派遣するうえで、学生を被災地のニーズに対応する「労働力」として単に送りだすだけでは大学が人材紹介機関になってしまう。言い換えると、大学としては学生にボランティア活動を紹介するのみだと不十分であり、ボランティア活動を行なう学生に対する心のケア、教育的効果の付与といった部分へいかに取り組むかも課題となる。教育的効果でいうと、被害の背景やボランティア活動の意義などに関するレクチャー、活動前における参加目的の確認、活動後における十分な振り返りあたりが重要といえるが、台風19号における課外・ボランティア活動支援センター主催の企画では、十分にこれらの要素を組み入れられてきた訳ではなかった。共催・協力あるいは学生に情報提供した企画においても、企画のなかにこれらの要素が含まれるか確認・提案しないままに、学生を送りだす状況となってきた。このあたりの課題は必ずしも災害時の緊急対応に限定されるわけではなく、平時からボランティア活動に教育的効果を組み込むことを意識する、学内・学外の他組織に対しても教育的効果の組み込みという要素を確認・提案したうえで連携するといった方向性が目指されるべきと考える。

【表】 台風19号への学生ボランティア派遣（丸森町）

派遣	日時	活動内容	参加人数	備考
第1次派遣	10月14日	丸森町、角田市で被害概要の視察、丸森町竹谷地区で物資配布	6	

第2次派遣	10月18日	災害ボランティアセンター開設準備の支援	4	
第3次派遣	10月23日	災害ボランティアセンター運営支援、竹谷地区で家財の運びだし等	3	
第4次派遣	10月26日	災害ボランティアセンター運営支援	5	
第5次派遣	10月27日	災害ボランティアセンター運営支援、小斎地区で家財の運び出し等	3	
第6次派遣	11月2日	上林東地区で家財の運び出し、倉庫からの荷物運び出し、床下からの泥だし	23	東北大学バス派遣。災害ボランティアセンター経由
第7次派遣	11月10日	上林東地区で床下等からの泥だし、館矢間小避難所・竹谷地区での足湯	25	東北大学バス派遣。災害ボランティアセンター、OPEN JAPAN と連携
第8次派遣	11月17日	五福谷地区で家屋まわりの木材、家具等搬出、館矢間小避難所での足湯	23	東北大学バス派遣。災害ボランティアセンター経由
第9次派遣	11/30-12/1	床下の泥だし・消毒、浸水した壁の剥がしや廃材の搬出、災害ボランティアセンターにて炊き出しの手伝い	6	国際ボランティア学生協会(IVUSA)と合同
第10次派遣	12月1日	中島天神社にて、泥だしや木材の撤去、がれきの撤去や竹運び、通路の整備と清掃、農機具の運びだしと清掃、その機械の修理のお手伝いの実施	9	Gakuvo ながぐつプロジェクト。スマイルシードと連携
第11次派遣	12月8日	中島天神社にて、泥だしや木材の撤去、がれきの撤去や竹運び、通路の整備と清掃	15	Gakuvo ながぐつプロジェクト。スマイルシードと連携
第12次派遣	12月11日	丸森小避難所にて、足湯	3	スマイルシードと連携
第13次派遣	12月15日	中島天神社にて、泥だしや木材の撤去、がれきの撤去や竹運び、通路の整備と清掃	19	Gakuvo ながぐつプロジェクト。スマイルシードと連携
第14次派遣	12月18日	丸森小避難所にて、足湯	5	スマイルシードと連携
第15次派遣	12月21-22日	寺内仮設、花田仮設にて、戸別訪問等	20	Yomoyama company と連携
第16次派遣	12月22日	中島天神社にて、泥だしや木材の撤去、がれきの撤去や竹運び、通路の整備と清掃	15	Gakuvo ながぐつプロジェクト。スマイルシードと連携
第17次派遣	12月26-29日	木材・災害ゴミの撤去、竹谷地区クリスマス会の手伝い、金山地区子ども広場の手伝い、中島天神社の泥だし等	43	OPEN JAPAN、マザーウイング、スマイルシードと連携
第18次派遣	1月11日	災害ゴミの運搬等、大内地区紙ヒコーキ教室イベントの手伝い、寺内地区で足湯	8	OPEN JAPAN、マルベロ、神戸大学救援隊と連携
第19次派遣	1月18日	竹谷地区で側溝の泥だし等	5	Gakuvo ながぐつプロジェクト。OPEN JAPAN と連携
第20次派遣	1月25日	耕野地区で防災ワークショップの実施補助	6	JEN と連携
第21次派遣	2月1日	中島天神社で材木の運びだし、土手への土砂搬入	7	Gakuvo ながぐつプロジェクト。スマイルシードと連携
第22次派遣	2月2日	中島天神社で絵馬の奉納イベント支援	3	スマイルシードと連携
第23次派遣	2月9日	中島天神社で作業	9	スマイルシードと連携
第24次派遣	2月15日	竹谷地区で家屋まわりの清掃活動	4	OPEN JAPAN と連携

第25次派遣	2月16-17日	金山仮設、大館仮設、鳥屋地区でタコ焼きパーティ	3	被災地に学ぶ会、神戸大学救援隊と連携
第26次派遣	2月21日	花田仮設で足湯等	4	スマイルシードと連携
第27次派遣	2月22日	舘矢間地区で防災ワークショップの実施補助、災害ボランティアセンターで支援物資(タオル)整理	3	JENと連携

※参加人数は、2日以上にわたる場合累計人数。東北大学以外に所属する学生等の人数を含む

※その他、SCRUM参加団体であるインクストーンズが10月20日に石巻市派遣、福興 youth が12月1日にいわき市派遣、AsOneが11月17日に派遣、TSALL東北が2月22日に派遣を実施（詳細は各団体の項目を参照）



東北大学

TOHOKU UNIVERSITY

文字 標準 拡大

Search... 検索

English f t v @

▶ お問い合わせ ▶ アクセスマップ ▶ サイトマップ

大学概要

学部・大学院・研究所

教育・学生支援

研究・産学連携

国際交流

社会連携

情報公開・広報

入試情報

東北大学で学びたい方へ

社会人・地域の方へ

企業の方へ

同窓生の方へ

在学生の方へ

教職員向け

ホーム > 2019年のニュース > 台風19号被災地 丸森町での災害ボランティア活動報告...

2019年 | ニュース



台風19号被災地 丸森町での災害ボランティア活動報告

2019年11月7日 14:00 | ニュース

課外・ボランティア活動支援センターでは、2019年11月2日、丸森町災害ボランティアセンターの要請を受けてボランティア活動を実施しました。参加者は23名で、教員1名と、ボランティア団体に所属する学生7名、一般の学生15名が参加しました。

活動概要

二部隊に分かれ、[1] 家財の運びだし、[2] 倉庫からの荷物運びだし・床下からの泥だしを行ないました。

[1] では、高齢者一人暮らしのお宅で、1m以上の泥が溜まっているなか、タンスや棚、畳、冷蔵庫等の運びだしを行ないました。また[2] では、高齢者世帯のお宅で、泥が溜まっている倉庫から家財を運び出したり、お宅の床下に20cm程度溜まっていた泥を出したりしました。

これまでの活動経過と今後の展開

課外・ボランティア活動支援センターでは、ボランティア支援学生スタッフSCRUMを中心に、これまで5度にわたる視察・支援活動を行なってきました（以下）。今後も丸森町をはじめとした台風19号被災地でのボランティアを支援していきます。

10月14日	被害概要の視察、物資配布（6名参加）
10月18日	災害ボランティアセンター開設準備の支援（4名参加）
10月23日	災害ボランティアセンター運営支援、家財の運びだし等（3名参加）
10月26日	災害ボランティアセンター運営支援（5名参加）
10月27日	災害ボランティアセンター運営支援、家財の運びだし等（3名参加）

ボランティアに参加した学生の感想

- 「災害発生から3週間経っても、未だに泥の搬出も進んでいないことに衝撃を受けた。」（法学部3年）
- 「被災地の現状は、やはり自分の目で見てはじめてわかるものも多いということを感じたと共に、これからも継続的に力になれたらと思いました。」（工学部1年）

住民の方の声

- 「浸水がひどく、家にはしばらく近づけませんでした。周りの家から流されてきたものも山積みになっており、なかなか片付けが進みません。1年かかると覚悟しています。」
- 「（冬を迎えて作業が難しくなる）12月までに1人でも多く来てほしい。地元の東北大学の学生には特に頑張ってもらいたい。」

カテゴリ

- 新着情報
- ニュース
- 採用情報
 - ▶ 東北大学教員公募情報
 - ▶ 東北大学教員の任期に関する規程
 - ▶ 東北大学職員公募情報
 - ▶ 東北地区国立大学法人等職員採用試験情報
 - ▶ 東北大学事務系・技術系職員採用試験情報
- プレスリリース・研究成果
 - ▶ 研究成果
 - ▶ メディア掲載
- イベント
 - ▶ 学会・研究会・シンポジウム
 - ▶ 公開講座・市民講座・企画展
 - ▶ 学内行事・講習会・オープンキャンパス

東北大学で学びたい方へ
社会人・地域の方へ
企業の方へ
同窓生の方へ
在学生の方へ
教職員向け
過去の新着情報（アーカイブ）

図 東北大学ホームページに掲載された、丸森町でのボランティア活動に関する報告（2019年11月7日付）

1-9. 課外活動団体合同研修会および滝澤理事との意見交換会

課外活動団体合同研修会（以下、合同研修会）は、2016年2月からスタートし、定例化された事業である。主な対象は、大学と連携して課外活動・ボランティア活動を推進する立場にある学生組織のリーダー層であり、普段の活動のなかで生じる課題の共有や連携の促進、大学に対する要望の集約等を目的として行っている。取りまとめられた要望は、教育・学生支援を担当する理事へ提出し、学生・理事間で意見交換の場を設けることが通例となっている。2019年度は、合同研修会、教育・学生支援担当理事（滝澤博胤教授）との意見交換会を、それぞれ1回ずつ実施した。

合同研修会に参加したのは、東北大学生協学生委員会（おおわん）、東北大学課外・ボランティア活動支援センターボランティア支援学生スタッフ SCRUM、東北大学国際交流支援団体@home、東北大学学友会体育部常任委員会であり、このうち学友会体育部常任委員会は初めての参加であった。なお東北大学祭全学実行委員会事務局については、当日の諸事情から不参加、新歓祭実行委員会事務局、学友会文化部常任委員についても、都合がつかず不参加となった。合同研修会の実施にあたっては、当初「自団体を紹介するプレゼンテーション→各団体の抱える課題・悩みの共有や、各団体の連携・協働により解決できる取り組み、大学への要望を検討するワークショップ」という流れを想定していた。しかし各組織には事前に①自組織の悩みや課題、③大学への要望をまとめたプレゼンテーションを依頼したことから、ワークショップでは「各団体の連携・協働により解決できる取り組み」を中心に検討する結果となった。

「各団体の連携・協働により解決できる取り組み」をめぐるのは、広報面の連携・調整を中心にアイデアがでた。そのうち具体的に実現へとつながったのは「新歓期における大看板設置場所の調整」である。東北大学では新歓期に川内北キャンパスへ大看板が立ち並ぶ光景がみられるが、大看板の設置場所については自由であることから、各学生団体は、良い場所を確保するために（場合によっては早朝からの）場所とりを行なうことを求められてきた。関連して、大学生協学生委員会では新歓期よりも前から大看板を設置することが通例となってきたが、この点に対して、その他の学生団体の理解が十分に得られていないという課題も生じてきた。そこで2020年度の新歓期には、学友会体育部常任委員会の主導で会議を開き、大学生協学生委員会の扱いに対する理解の周知と、大看板設置場所に関する調整を実施することが決まっている。

「大学からの要望」については、各団体が要望を提示する形をとった。要望のなかには、大学として対応可能なものと、対応困難なものが含まれていた。前者を挙げると、以下の通りである。

- ・ 川内北キャンパス以外のキャンパスにおけるデジタルサイネージの使用やポスター掲示の許可、各研究棟などにおけるポスター掲示の許可（学祭実行委員会事務局）
- ・ 大学祭の期間内が授業日とならないようにするため、各部局への通知（同上）
- ・ 七大生委員長会議に出席する他大学性を対象とした、評定河原合宿所の宿泊許可（学友会体育部常任委員会）
- ・ オープンキャンパス企画を周知するため、オープンキャンパスパンフレット手提げ袋への封入（おおわん）
- ・ 機関紙「TCC」を周知するため、自習室や談話室、教育・学生総合支援センター1階などへの設置（同上）

また意見交換会では、大学として対応困難な要望についても、滝澤理事より中長期的には対応できる可能性も示され、次年度以降も意見交換会などの機会を設けたい旨の回答があった。以下の表に、本年度の合同研修会および滝澤理事との意見交換会の概要を記す。

【表】 課外活動団体合同研修会および滝澤理事との意見交換会の概要

日時	内容	参加団体	参加人数	備考
11/20	第1回 課外活動団体合同研修会	SCRUM、@home、生協学生委員会（おおわん）、学友会体育部常任委員会	5人	課外・ボランティア活動支援センターの出席者 …小田中センター長、横関、松原
12/9	第1回 滝澤博胤理事との意見交換会	SCRUM、@home、生協学生委員会（おおわん）、学友会体育部常任委員会、学祭実行委員会	5人	課外・ボランティア活動支援センターの出席者 …小田中センター長、横関、松原、金田 学生支援課の出席者…佐藤課長、松村課長補佐

各団体が提示した「大学に対する要望」を含む、意見交換会の議事メモについても、以下に概要を記録しておく。

大学祭実行委員会大学祭実行委員会からの要望

1. 広報活動の拡大に関して

【背景】

東北大学祭は「全学」のお祭りであり、大学の全てを巻き込んで盛り上げることが求められ、また事務局としてもそれを望んでいる。しかしながら川内北キャンパス以外のキャンパスにおける広報活動が滞っているというのが現状である。今年度は川内南キャンパスや青葉山キャンパスのデジタルサイネージを使用させていただけないかと交渉したが断られた。また、星陵キャンパスにおけるポスター掲示も断られている。東北大学の学生の多くが川内北キャンパス以外で学生生活を送るにもかかわらず、そこでの広報活動ができないとなっては大学全体を巻き込むことが出来ない。そこで、広報活動に関して以下のことを要望する。

【要望】

川内北キャンパス以外のキャンパスにおけるデジタルサイネージの使用やポスター掲示の許可、また各研究棟などにおけるポスター掲示の許可。

・学生支援課からの事前回答

→掲示物に関して、川内北キャンパスは学生支援課の管轄であるが、その他のキャンパスは各部局の管轄となる。来年度からは学生支援課から各部局にまとめて依頼したい。そこでデータ等完成次第、支援課まで連絡いただきたい（佐藤課長）。
→団体から直接申し込むよりは、学生支援課を経由して部局に依頼した方がよい（滝澤先生）。

・滝澤先生からの回答・コメント

Q.広報物の掲示に関して、星陵キャンパスはどのような現状か（滝澤先生）。

→食堂での三角柱の設置はできたが、ポスター掲示はだめと言われた。川内キャンパスのみの広報だと、1年生だけにしか周知できないので、このような要望を提出させていただいた（大学祭）。
→医学部歯学部の教員に話をしておく（滝澤先生）。

2. 大学祭期間中の授業について

【背景】

先ほどの項目にも記載してあるが、東北大学祭は「全学」のお祭りである。しかしながら、川内北キャンパスで大学祭が開催されるがために大学祭期間中に他キャンパスで授業が実施されているというのが現状である。少なくとも昨年度は理学部、今年度は化学バイオ工学科での授業実施が確認されている。繰り返しになるが、東北大学祭は「全学」のお祭りであるにもかかわらず、その期間中に授業が実施されてしまうと、大学祭に参加できなくなってしまう学生が発生してくるという問題が生じる。そこで、東北大学祭事務局から2点目として以下の通り要望する。

【要望】

東北大学に在籍する全ての学生が大学祭に参加できるように対策を講じていただきたい。

・学生支援課からの事前回答

→大学祭の期間内が授業日となる場合は1日を限度に休講措置を取っており、1年前には各部局への通知を行っている。昨年度も複数の部局で授業しているとのことで、現在調査中である。今年度に関しては、教務課で認識している分は休講となっているが、具体的にどの授業か教えていただけるか（佐藤課長）。

→今年度に関しては、講義が「入りそうになった」だけで、実際は入っていなかったとのこと（学祭実）。

・その他質疑

Q.出店エリアの件は落ち着いたか（滝澤先生）。

→出店エリアについては拡大できた（学祭実）。

Q.学祭の日程について、AO入試Ⅱ期の1次試験と重なっている。今年度は川内南キャンパスで文・法学部の1次試験を行っていたところ、試験中に花火が上がった。もともと学祭が入試よりも日程設定の歴史は長い、鳴り物のことなどもあるので、連携していた方がよい。入試日程が決まったところで、必要に応じて打ち合わせを行いましょ（滝澤先生）。

→今年は45000人の来場者だった（学祭実）。

学友会体育部常任委員会からの要望

1. 評定河原合宿所における他大生の宿泊許可

【背景】

年4回、七大学の学生が七大戦についての議論を行なっている(以下、このことを委員長会議と呼ぶ)。委員長会議の会場は各大学で持ち回りとなっており、来年の春は東北大学で行われることになっている。その際の宿泊場所について、他大での開催時は大学の宿舎を利用していたが、東北大学の宿舎である評定河原合宿所は、現在他大学の学生が宿泊できない。尚、以前の東北大学主管の七大戦の際(2015年夏)は他大生が宿泊出来ていた事は確認できている。

評定河原合宿所が使えない場合、他大生を一般のホテル等に宿泊させることになる。その場合、他大の金銭的な負担が増加し、委員長会議に参加する人数が減少してしまう(現に、11月に行われた委員長会議にて、予算の関係から東北大学での委員長会議にはあまり人を連れていけない、と他大学から言われている)。

委員長会議は、七大戦についての議論の他にも、七大戦の運営をする学生同士が交流できる場としての役割も担っている。こちらとしてはただでさえ移動費が膨らみがちな東北大学での開催ということもあり、金銭的な面での障害は出来るだけ取り除きたいと考えている。

【要望】

評定河原合宿所における他大生の宿泊許可を頂きたい。尚、最初にも述べたが、来年の春に東北大学で委員長会議が行われる。既に日程まで決定しており(3/4~3/6)、1月上旬までには宿泊場所の目処をつけたいので、遅くとも1月上旬までには解答を頂きたい。

・学生支援課からの事前回答

→当該合宿所を利用できるのは本学学生のみ。2015年の七大戦は特別に許可していた。来年度以降の七大戦についても特別措置で「学友会体育部」を責任者として許可を行う(佐藤課長・松村課長補佐)。

→大学・体育部ともにきちんと申し送りを行い、人が入れ替わっても引き継がれることが重要(小田中先生)。

・その他質疑

Q.七大戦3連覇おめでとうございます。総長が力を入れており、4連覇したいと思っている。冬競技がスタートしたので、気合を入れて頑張してほしい(滝澤先生)。

Q.UNIVASに関して、七大学間で何か話が進展しているか(滝澤先生)。

→特に今のところ進展はなく、議題には上がっていない(体育部)。

Q.学友会費は現在ある程度安定している。また大学基金では、4月から使用目的を特定して寄付を募る新しいシステムを導入する予定(主に保護者からの寄付)。そこに課外活動支援の寄付金等も含む予定。今後、財政面では今の水準は最低限維持す

るような形で進んでいくと思う。基金は現在取り崩し状態なので、このシステムによって財政面の改善も見込めるのではないかと思う。そのためにも、勝ち続けられるよう頑張ってください（滝澤先生）。

○生協学生委員会（おおわん）からの要望

1. オープンキャンパス企画における宣伝範囲の拡大

【背景】

例年行っている「オープンキャンパス企画」では、各キャンパスの生協店舗の前にテントを張り、「お話コーナー」というブースを作っている。オープンキャンパス企画は、委員が高校生の不安解消や、大学への興味を持ってもらおうと行っている企画だが、宣伝活動の範囲が限られている。

【要望】

多くの高校生に参加してもらいたいため、キャンパスの広い範囲での宣伝をさせていただけないか。

・滝澤先生からの回答・コメント

Q.OCのパフレットにおおわん企画の案内は入っているか。現在どこのキャンパスで企画を行っているか（滝澤先生）。

→OCのパフレットには入っていない。企画は、工学部・理薬学部・川内北キャンパス・川内南キャンパス・農学部で実施（おおわん）。

→OCのパフレットに入れてもらうと良い。パフレットに関しては、大学で1つ、あとは各部局がそれぞれ作成している。OCの手提げに入れられるように、入試課（OCの実行委員会担当）へ確認する。高校生へ向けた企画なので良いと思う（滝澤先生）。

2. 機関紙「TCC」やポスター等の設置

【背景】

私たちが年に6回発行している機関紙「TCC」では、大学生活に役立つ内容を掲載していて、東北大学の先生方へのインタビュー記事などがある。現在は各キャンパスの食堂や購買店に置いているが、読者数拡大が課題となっている。この機関紙を学生が手に取りやすい位置に置くことでもっと多くの方に読んでいただきたい。

また、私たちの活動は「東北大生のより豊かな学生生活」を目的とした福利厚生者の活動であるため、多くの学生に参加していただきたいと思っている。しかし、企画への参加者数の伸び悩みがある。さらに、私たちの企画では投票やアンケート調査を行うことが多い。今年度の例としては、レトルト食品のメニューの投票、TCCの記事執筆のための情報収集が挙げられる。これまではTwitterや生協店舗にポスターを貼る等の手段を使っていたが、より多くの学生に参加していただきたい。

【要望】

多くの学生が利用する場所（講義棟など）にTCCやポスター等を置いていただけないか。サイズはA4で、1年に6回発行。各2000部発行。

・滝澤先生からの回答・コメント

Q.談話室に設置しているか。東北大学新聞は置いていると思う（滝澤先生）。

→談話室には現在置いていない（おおわん）。

→教室は難しいが、自習室や談話室は置いていい。教育・学生総合支援センターの入り口もよい（滝澤理事・松村課長補佐）。

→他のキャンパスについては、具体的に設置したい場所を教えていただければこちらでサポートできる（小田中先生）。

・その他質疑

Q. 掲示板のルールはどのようになっているか（滝澤先生）。

→ 掲示板全面に貼る、など非常識な貼り方さえしなければ、学生は自由に掲示してもよい（松村課長補佐）。

→ 外の掲示板も今後使用したい（おおわん）。

課外・ボランティア活動支援センター学生スタッフ SCRUM からの要望

1. 交通費の補助を出して欲しい。

（具体例）

① 交通費の補助制度を設ける。

② ハイエース等の荷物を多く運搬できる車両を公用車として設置して欲しい。

③ 課外活動・ボランティア活動に学生が利用できる車両が欲しい。

④ レンタカーの法人カードを大学名義で作成する等より、定額で借りられる仕組みを作って欲しい。

（背景・理由）

・ ボランティア活動、特に震災復興関連の活動に対する助成金は年々減少・減額している。そのような中で、現地でのボランティア活動とは直接関係のない交通費によって、現地のニーズに答えることができなくなるということは非常に遺憾である。また、ボランティア活動では現地までの移動や多くの荷物の運搬のため、大きな車両を借りることが多い。そのため交通費の出費が多く、現地での活動が制限されてしまうことが多い。

2. ボランティア募集などについて情報発信の手段の幅を広げてほしい。

（具体例）

① 電光掲示板の使用について、現在は「センター主催」のイベントの告知に限られているが、「センター共催」のイベントも掲載可能にしてほしい。

② 特に電光掲示板等の大学が使える情報発信ツールを利用する際のルール（手続き・可能な範囲）を明確化し、学生でもアクセスできるようにする。

（背景・理由）

・ 学生団体が有するツールでの情報発信の範囲には限界があり、活動の募集情報などの周知を徹底することは難しく、学生の間で共有されている情報があまりにも少ない。

3. コーディネーター専任の教員を置いて欲しい。

（具体例）

① 課外ボランティア活動支援センターに被災地の現状に明るい人を増やして欲しい。

（背景・理由）

・ 現在は研究職員がコーディネーター業務を兼ねており、会議や派遣活動への参加を空いた時間の中で何とかやりくりしている状態である。

・ 他大学のようにコーディネーター専任教員を置くことで役割を分担し、多様化する学生ニーズに対応できるようにするべきである。

・ 滝澤先生からの回答・コメント

→ これから大学としては東北大学基金を充実させていく予定。寄付をいただく方に、使用目的として「課外活動」欄にチェックを入れてもらうような制度にしていく。この制度が整えば、ある程度支援できるようになるのではないかと考えている。

センター専任の教員体制は、高教機構内部の問題。国立大学は6年ごとに目標・計画期間が決められていて、現在3期目にあたる。2022年から第4期に向けて、組織の教員の再配置を議論する予定。特に、大学の中の学生支援を担う専門の研究者・教育者は非常に重要だが、どこの学部とも学術的つながりを持っていない。そういった教員を大学全体の資産として再構築していきたいと思っている。

→台風派遣にかかる裁量経費のように、自分の裁量で手当てできる分は支援したい（課外・ボランティア活動支援センター経由で学生を支援する形）。課外活動の支援金を大事にしてほしいし、発信を大事にしてほしい。「感謝の集い」などで、活動報告を行うなど、見える化ができるとうい。寄付をした人からしても、「こうやってお金が使われているんだな」と思う。特別支援の学生グループが学祭で出展したところ、展示に感動した一般の方から寄付をいただいた例もある（滝澤先生）。

国際交流支援団体@home からの要望

1. 青葉山寮共有スペースの使用許可

【背景】

現在@homeが行っているイベントはユニバーシティハウス三条の国際交流会館をイベントの開催拠点にしている。しかし現在青葉山寮の共有スペースの使用の許可はでていない。なぜがそれが問題なのか。それは去年青葉山寮が完成したことで、留学生の移動が起こったからである。特に立地条件から多くの理系の学生が青葉山に住むようになった。東北大学の留学生の部局間の総数は令和元年5月現在2162人。そのうち文系はたった563人で、理系が1559人。およそ3対1の比率で在籍している。この数字から見ても、多くの留学生が青葉山に移動したことがわかる。つまり今までは三条に集中していた留学生が分散してしまったということである。その影響からイベントの参加人数が過去と比べて減っているのが現状で、三条でイベントをすると告知しても、なかなか青葉山の学生が地下鉄にのり、駅から30分以上かけて歩いてくることは難しい。そこで、従来の三条の会場だけでなく、三条の学生には三条で、青葉山の学生には青葉山でイベントを行いたいと考えている。このままだと青葉山の学生に国際交流の機会を提供することが難しい。もし許可を頂ければもっとたくさんの学生に国際交流の機会を提供できるのではないかと考えている。

【要望】青葉山の共有スペースの使用許可を頂いて、国際交流の活発化にお力添えしていただけないか。

・学生支援課からの事前回答

→今年5月にGLCからも使用許可申請があった。使用予定者に、UH青葉山に入居している方がいることを条件として、〈12/9訂正〉@home顧問の島崎先生の承認を得たうえで支援課に申請し使用可能。使用予定者の中に入居者がいない場合は、〈12/9訂正〉「大学として使用する」という理由の元、顧問の島崎先生の許可・引率のうえ、支援課に申請し使用可能（佐藤課長）。

・その他質疑

Q.UH青葉山での飲酒について、許可をいただけないか。数年前に、救急車で運ばれた留学生がいた。その時は留学生が勝手にお酒を飲んでしまったため、現在はカウンターの後ろにお酒を隠したり、学生証の提示を徹底したりしている。パーティー企画については、お酒を提供することで留学生の参加者が増え、場が盛り上がり、非常に重要である（例：和菓子や映画の企画だと10~30人くらいしか集まらない）。できればUH青葉山でもお酒を提供できないか。他の国際系サークルとは、イベントの日程を確認して、飲酒のイベントが連続しないようにするなど、工夫したいと考えている。何年かかけて、様子を見て前向きに検討していただけるだけでもありがたい。天候によって留学生の参加意欲が変わったりするので、寮で企画を行うことができるというのは強みである(@home)。

→三条の国際交流会館は例外。UH については、青葉山に限らず、原則として飲酒不可となっている。UH の専門委員会にかけてみるが、飲酒して騒いだ留学生が一般の方から通報されたりした実例もあるので、難しい面もある（佐藤課長）。

→まずはアルコール抜きできちんとイベントができるということを見せることが大事。

工学部の工学部中央食堂なども、飲酒可能なパーティースペースにできる。生協に確認して、借りてみてはどうか（滝澤先生、小田中先生）。

Q.広報について、生活支援課に許可を依頼したが断られたことがある。図書館のグローバル学習室についても、「お金を取っているのは貼れない」と言われた。キャンパス内の掲示板についても同様の理由で不可と言われたことがある。予算もあまりない中、お金を取らなければイベントが開催できない。遊んでいるサークルのように思われることもあるが、真剣に企画をしている (@home)。

→営利目的でなければよい。書き方の問題。「参加費実費相当(500 円)」など、集金目的のイベントではないという書き方を工夫するとよい（滝澤先生）。

→川内ホールのシアターでイベントを行う際も有料で、演劇部では「入場料」ではなく「カンパ」という言い方をしている（小田中先生）。

〈最後に〉

大学における諸規則も、学生をがんじがらめに縛り付けるためにあるわけではない。6000 人の教職員は、学生のためにいる。規則は時代によって変えていかなければいけないが、学生の皆さんにはほとんど声をあげていただけないと、気づかないこともある。そこで声をあげてほしい。周りにも、「こういうことを話したらこう変えてくれた」ということを言うてくれれば、また別の声を上げることができる。大学が過ごしやすい場所になるように、またこういう機会を作るので、ぜひ周りにも声をかけていただければと思う（滝澤先生）。

1-10. 学友会との連携

1-10-1. 学生団体の登録ならびに説明会の開催

今年度の学友会団体は、全 191 団体、約 10,000 名の総数の学生から、学生団体登録継続届・登録申請書を受け付け、これらの団体の自主的な活動支援を行った。また、10 月 24 日には、全ての届け出のなされた団体の代表者に対する説明会を開催し、当日、139 団体の代表者ならびに顧問教員が参加し、課外活動時における様々な注意喚起を行った。

1-10-2. 新入生歓迎会および大学祭の支援

平成 31 年度の新入生歓迎行事ならびに令和元年度の大学祭においては、それぞれ学生の自主的な実行委員会が組織され運営は全て学生に任されているが、それら運営を指導・サポートする教職員による体制を構築し支援を行ってきた。

【表】新入生歓迎会行事

日時	行 事 名	場 所	主 催
4/6	Spring Festival	川内北キャンパス	新入生歓迎会実行委員会
4/14	新入生歓迎合同演奏会	川内課外活動共用施設川内ホール	学友会吹奏楽部
4/21	春のスポーツ大会	川内北キャンパス	学友会体育部

また、第 71 回東北大学祭は 11 月 2 日から 11 月 4 日の 3 日間にわたり、川内北キャンパスを主会場として開催され、約 45,600 名の来場者（大学祭実行委員会報告）で賑わった。今年のテーマを「舞わん現世（うつしよ）、生きん夢」とし、「非日

常」を来場者に楽しんでもらいたいという考えのもと、参加団体による日頃の課外活動の成果発表や展示、野外ステージや模擬店、講演会、研究発表などの多数のイベント、そして趣向を凝らした装飾により非日常的な空間が繰り広げられた。



【写真】大学祭 川内北キャンパスの様子 11/4



【写真】大学祭 広場ステージの様子 11/2



【写真】大学祭 企画「ペットボトルロケット打ち上げ体験会」の様子 11/2



【写真】大学祭 屋内企画（学友会吹奏楽部）11/3

1-10-3. サークル・リーダーシップセミナーの開催

令和元年度サークル・リーダーシップセミナーが12月14日に開催された。学友会に所属する団体の主将や主務、次期主将が集まって各部の活動や飲酒問題をはじめとした様々な問題について意見を交換し合うことで解決案やリーダーとしてどうあるべきかを再確認、新たに発見する機会となった。またその話し合いをきっかけとして各部が親しくなれる場を提供した。

外部の講師による講演会を開催し、リーダーとしての役割・認識等の基本的知識の習得に役立つものとなった。



【写真】サークル・リーダーシップセミナー 分科会の様子

12/14



【写真】サークル・リーダーシップセミナー 講演会の様子

12/14

2. 学生スタッフチーム SCRUM の活動報告

課外・ボランティア活動支援センターでは、教職員主体の事業に加えて、教職員・学生の共同企画事業や、学生の主体となった事業・活動が展開されている。とりわけ学生スタッフチーム SCRUM では、直轄部、参加団体、担当等それらを統合する本体組織がそれぞれ基盤となり、多彩な活動が行われてきた。以下では、本年度における SCRUM 本体組織の運営と、本体組織における主な活動について報告する。

2-1. 2019 年度学生スタッフチーム SCRUM の概要

課外・ボランティア活動支援センターの活動は、教員と学生スタッフチームが一体となって企画・実施している。学生スタッフチームは、2015 年度よりスクラム(SCRUM)という愛称が定まり、メンバーのアイデンティティを形成してきた。さらに 2016 年度からはメンバーの安定的な増加や上級生のコミットにより、幅広い活動を行ってきた。現地でのボランティア活動は 2017 年度から引き続き、岩手・宮城・福島のそれぞれで SCRUM の参加団体(詳細は後述)が担当して継続した。震災から 9 年目を迎え、支援活動は一概に「被災地支援」と言えなくなった。ポスト震災期にあたり、SCRUM 及び各参加団体の現地での活動も、活動の在り方について考え直す時期になった。テーマ型の活動主体である直轄部においては、2018 年度に機構が協定を結んだ Gakuvo (日本財団学生ボランティアセンター) との事業「東日本大震災の経験を世界と未来につなぐプロジェクト」が始動し、「地方活性化」や「防災」といった、より一般的なトピックを取り上げたグループが増加し、東日本大震災の復興の過程から見える様々な側面を切り取った活動が行われるようになった。

今年度は、新入生のリクルーティングに成功し、30 名を超えるメンバーが参入し、団体がより活発となる契機となった。前年度までは活動の内容がより多様化し、大きくなり続ける一方で、それらを維持・発展していくだけのマンパワーが不足し団体内の至るところで問題を抱えていた。しかし、今年度は人数が増えたことにより、団体を縮小させることなく円滑に活動することができたと考えられる。その反面、個々の意識の低下や参加団体や直轄部をはじめとする各活動主体の独立性の高まりと SCRUM の位置付けの兼ね合いの難しさが露呈し、SCRUM 内部の組織的課題の改善に取り組み続けることが重要となった。SCRUM の主な活動となるボランティアコーディネートの充実を図るため、各県・地域での支援活動を継続してきたが、それらの活動が活性化し、幅も広がったことにより、活動の軸が現地での活動に移るメンバーが増加し、学内で主に行われる SCRUM 本体との関連性が薄くなって来たのである。現地での活動は住民の方々や被災地の現状を五感で感じることができ、得るものが多い活動ではある。しかしながら、被災三県につながりを持つことで「東北」支援を考えることができ、学内のボランティアの充実を図る SCRUM 本体の活動を疎かにすることは非常に残念である。また、このような問題以外にも、全体会議の内容の形骸化、メンバーの共通目的となる理念の不浸透など改善していかなければならない点は多々ある。早期の解決は難しいことではあるが、皆が同じ問題意識を持ち、その都度の議論を大切にしながら、徐々に各主体の連携を変えていくことが来年度以降も必要になるだろう。以下、2019 年度における SCRUM の特筆した変化や活動を紹介していく。

2-1-1. 変化 1 担当の制度の変更

前述したとおり、SCRUM 内部の組織的な課題として、SCRUM 本体との関連性が薄くなってきており、SCRUM で行う活動の運営が回らなくなっていく問題が顕著になった年になった。そのため、体制自体を変えて、SCRUM 本体の運営に携わる人数を増やすことにした。具体的には、昨年と今年は担当の運営を個人で行っていたが、来年度より担当を複数で行うことにした。これにより、負担が 1 人に集中する問題が改善されるだけでなく、より多くの人と議論して活動を行うことにより、活動の内容がより良いものとなることが期待できる。一方で、過去には複数制から単独制に変更した経緯があるので、慎重に適宜見直しを行いより良い活動につなげていきたい。

2-1-2. 変化2 緊急災害への対応

2019年度は台風、豪雨など大きな災害が多い年であった。9月に発生した台風15号により千葉県で大きな被害が発生した際には、有志のメンバーがGakuvoのプロジェクトに参加した。また、10月に発生した台風19号は、広い範囲において甚大な被害をもたらした。東北地方においても各地で被害が生じた。SCRUM参加団体のインクストーンズ・福興youthは、それぞれ活動先の石巻市・いわき市で、ボランティアセンターを通して活動をした。また、宮城県南に位置する丸森町では町全域で被害を受けたため、SCRUM、課外・ボランティア活動支援センターは、GakuvoやSCRUM以外のボランティアサークルと連携しながら、バス派遣や炊き出し活動への参加、土砂かきなど派遣活動を実施した。(詳細はB1-8 緊急災害時の学生ボランティア派遣を参照。)

また、今後も今までの活動のノウハウをもとにハード系支援と並行して、できる場所を探りながら住民に寄り添うソフト系支援やそのほかのニーズを探し、活動を続けていきたい。これまでに行った様々な緊急災害支援を記録し、参考にすることで、それぞれの被災地への思いを忘れず、さらに今後の充実した活動につなげていきたい。

2-2. 総務

総務は、新歓イベントの企画、事務局会議や全体会議、集中会議の運営、倉庫整理などを行っている。

2-2-1. 新歓イベントについて

本年度の新歓イベントも、昨年に引き続き幹部学年を中心にプロジェクトチームを作り企画した。運営権参加の「ボランティアフェア」に加え、スクラム独自の新歓イベントとしては、「スタッフ説明会」、「晩宴会」を例年から継続して実施するとともに、新たに「お花見」を考案し、担当者をつけて実施した。これらのイベント費用はスクラムメンバーからの集金によって賄い、「副代表(会計)」が管理を行った。今年度は過去最多の30人越えの人員確保に成功した。

2-2-2. 火曜会議について

本年度も火曜日を「SCRUMの日」として放課後にミーティングなどを実施し、「全体会議」では全体決定を行いつつも主には情報共有を行い、メンバーの親交を深めることを行い、込み入った議論は「事務局会議」で行うこととした。また、センター主催の課外・ボランティア活動に関わる研修会として「研修会議」も行った。本年度実施テーマは「大学における学生ボランティア支援の未来—東北大学からの展望—」、「課外活動におけるセクハラ防止のために」、「仙台市災害ボランティアセンター 運営サポーター養成講座」、「学生団体の組織運営」の4つであり、これらの企画は教員によって行われた。全体としては、月に1回「全体会議」、月に2回「事務局会議」、不定期に「研修会議」を行った。これらの日程は「事務局会議」により決定された。

2-2-3. 集中会議について

本年度も、春・夏の長期休みにおいて「集中会議」を実施した。「集中会議」の内容は「全体会議」や「事務局会議」によって議論し、主にプロジェクトチームとして募ったメンバーのみの「集中会議ミーティング」にて企画をした。「春の集中会議」(3月)では、今年度のセンターの教員体制について阿部さん、金田さんからご紹介いただいた後、参加団体や直轄部、各担当、緊急災害支援(熊本・広島)からの報告や会計報告を行った、その後、団体理念、SCRUMと部門の距離、SCRUMの優先順位に関してワークショップを行い、今年度につながる有意義な会となった。また、前年度より開始した団体交流会も継続して実施し、退任する江口さん、菊池さんの講話を聴き、東北大学のボランティア活動の歩みについて振り返るとともに、他団体との親交を深める良い機会となった。「秋の集中会議」(10月)では、新任の松原さんよりSCRUMの歴史についてご紹介していただき、SCRUMの理念についてワークショップを実施した。午後には、レクリエーションを挟んだのちに、各直轄部が30分ずつ自由に時間を使い、メンバーと直轄部との距離感を近づける取り組みを行った。2

日目には、各担当についてディスカッションしたのちに、SCRUM の理念や全体ミーティングについてワークショップを実施した。

2-2-4 倉庫整理などについて

本年度は6月と12月に倉庫・ボランティア室の整理・清掃を実施した。特に12月は、台風19号の発生による緊急災害支援活動に伴い長靴等の物品が増えたことで、倉庫内のレイアウトを大幅に変えることになった。部室棟の倉庫も活用しながら、今まで以上に使いやすいように物品を整理することができた。今後は、倉庫内の物品を把握するために物品リストを見直すとともに、他団体も物品を使いやすいように物品管理のマニュアルなどを作成していきたい。

【表】主な会議・イベント一覧

イベント名	開催日	内容
春の集中会議	3/25,26	2019年度のセンター体制、参加団体・直轄部・緊急災害支援活動報告、会計報告、団体理念・SCRUM と部門の距離・SCRUM の優先順位に関してワークショップ、ボランティア団体との交流会、江口さん・菊池さん送別会
スタッフ説明会・晩餐会	4/10,16,25	大学とSCRUM の関係紹介、SCRUM と参加団体・直轄部の活動紹介等・新入生との交流
新歓合宿	5/11,12	上回生の経験談などワークショップ、レクリエーション、観光
秋の集中会議	9/28,29	SCRUM の歴史、教職員紹介、理念・直轄部・全体ミーティングについてのワークショップ、レクリエーション、食事会

【表】SCRUM の運営会議一覧（2019年12月まで）

会議名	開催日
全体会議	4/2, 4/9, 4/23, 5/7, 5/21, 6/11, 6/24, 7/16, 10/8, 10/29, 10/30, 11/12, 11/19, 11/27,12/3
事務局会議	5/14,6/4,10/1,11/5,11/26
研修会	5/28, 7/9, 10/23, 12/4, 12/14



【写真】新歓合宿での集合写真

2-3. 渉外

渉外は、前年度に引き続き主にボランティアフェア(2回実施)、井戸端会議の企画・運営(7回実施)に携わってきた。それらを行うため今年度計9回の渉外ミーティングを重ねた。

2-3-1 ボランティアフェア

ボランティアフェアとは、東北大学内外のボランティア団体やNPO法人、一般社団法人などがブース形式で出展をし、新メンバー・ボランティア活動の募集や団体の活動紹介などを行う企画であり、各団体における新メンバーの発掘や活動の広報、団体間の相互理解や交流の促進の場となっている。

今年度は前年度より多くの様々な団体に出席いただいた。元々震災復興に関わるボランティアが多かったが、今年度は、より多様性に富んだ様々なジャンルの団体の出展が増加した。それにより、ボランティアフェアの来場者はより多くの選択肢の中から自身の興味関心に合ったボランティアを見つけることができたと考えられる。今年度2シーズン(計10日間)実施したボランティアフェアの参加者延べ人数は、369名と前年度の344名を上回る結果となった。今年度は4月の来場者数がとても多く、複数回ボランティアに足を運ぶ来場者が例年より多かったことが特徴的である。来年度以降も、ボランティアに興味がある学生・ボランティアをしたい学生と学内外のボランティア団体が繋がることの出来る貴重な場として、また学内外のボランティア団体のメンバー同士の繋がる事が出来る場として重要な役割を果たしていくと考えられる。

【表】4月ボランティアフェアの概要

日程	時間	会場	来場者人数	参加団体
4/6(土)	11:00~15:30	グローバル学習室	60	震災復興・地域支援サークル ReRoots、HARU、復興応援団、たなぼた、一般社団法人ワカツク、高校生支援団体 bridge、フェアトレード推進 amo、キッズドア、公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン、反貧困みやぎネットワーク、TSALL 東北、海辺のたからもの、国際ボランティア団体 As One、亙理いちごっこ、仙台自主夜間中学、NPO 法人 TEDIC、NPO 法人アスイク、アイセック仙台委員会
4/8(月)	13:00~17:00	グローバル学習室	99	
4/11(木)	16:00~18:30	図書館多目的室	50	
4/12(金)	16:00~18:30	図書館多目的室	40	
4/15(月)	16:00~18:30	図書館多目的室	25	
4/17(水)	16:00~18:30	図書館多目的室	20	
4/23(火)	16:00~18:30	図書館多目的室	29	

【表】11月ボランティアフェアの概要

日程	時間	会場	来場者人数	参加団体
11/13(水)	16:00~18:30	グローバル学習室	11	東北大学光のページェント Navidad、チャリティーサンタ仙台支部、高校生支援団体 bridge、アイセック仙台委員会、SCRUM、東北大学ボランティアサークルたなぼた、復興応援団、HARU、一般社団法人ワカツク、NPO 法人グッド!、キッズドア、環境系学生団体 海辺のたからもの、反貧困みやぎネットワーク、TSALL 東北、NPO 法人アスイク
11/14(木)	16:00~18:30	グローバル学習室	14	
11/15(金)	16:00~18:30	グローバル学習室	21	

2-3-2 井戸端会議

井戸端会議は、東北大学内外のボランティア団体などが集まって行う会議のことで、各団体の近況共有、ボランティアフェア開催概要、その他イベントの調整を行っている。2013年9月よりスタートし、2019年度末までに計49回開催された。会議には毎回10団体ほどの幹部が参加し、合同の企画の検討や団体間の垣根を超えた数少ない情報共有の場として機能してい

る。センター教職員からの連絡事項の伝達や、自団体の活動広報、プレゼン練習の機会などを行う場としての機能も併せ持つ。井戸端会議参加団体での団体間交流イベントを今年も行い、ボランティア団体同士の親交が深まり、東北大学のボランティア団体としての連帯感を共有することができた。2019年3月から2020年3月までの概要を以下の表にまとめた。

【表】2019年度井戸端会議の概要

回数	日程	主な議題	参加団体
第43回	3/26	4月ボランティアフェアについて いっぽこ合宿について	SCRUM、互理いちごっこ、ReRoots、たなぼた、復興応援団、HARU、bridge、反貧困みやぎネットワーク、TSALL 東北、海辺のたからもの、AsOne
第44回	5/10	4月ボランティアフェア反省 今年度の井戸端体制 いっぽこ合宿について	ReRoots、HARU、たなぼた、海辺のたからもの、AsOne、復興応援団、CFF、ワカツク、bridge、反貧困みやぎネットワーク、amo
第45回	7/5	団体感交流について オープンキャンパスについて 11月ボランティアフェアについて	SCRUM、キッズドア、ワカツク、海辺のたからもの、As One、HARU、Bridge、たなぼた、ReRoots
第46回	10/11	東北大学祭について 11月ボランティアフェアについて	SCRUM、AsOne、チャリティーサンタ仙台支部、海辺のたからもの、ワカツク、たなぼた、TSALL、HARU、bridge、復興応援団、宮城の水道×学生プロジェクト、反貧困みやぎネットワーク
第47回	12/13	11月ボランティアフェア反省 センター紀要・ジャーナルについて	amo、高校生支援団体 bridge、TSALL、ひとつも、HARU、たなぼた、海辺のたからもの、AsOne、反貧困みやぎネットワーク、ReRoots、SCRUM
第48回	2/7	4月ボランティアフェアについて 団体交流会について	SCRUM、AsOne、HARU、反貧困みやぎネットワーク、海辺のたからもの、ReRoots、たなぼた、掲示コミュニティ、特別支援室、ワカツク、復興応援団、アイセック仙台委員会、光のページェント NAVIDAD、キッズドア
第49回	3/27	4月ボランティアフェアについて	



【写真】4月ボランティアフェア（左）、井戸端会議（右）

2-4. 広報

広報は、前年度に引きつづき、ボランティアセミナージャーナルの発行や三角柱の設置を行ってきた。SCRUM のホームページの更新やボランティア情報メール配信サービスでの情報提供は、課外・ボランティア活動支援センターの学生アルバイトが主に担当した。その他、Facebook や Twitter は、各イベントや活動の担当者を中心に更新した。

2-4-1. ボランティアセミナージャーナルの発行

「ボランティアセミナージャーナル」とは、センター主催のイベントの報告や、ボランティア団体の紹介などを行うセンターが発行する刊行物のことであり、センターでは、2012 年度より、年 1~4 回ほど発行してきた。2019 年度は、4 月に 14 号を発行した。14 号では、より多くの新生に興味を持ってもらうため、現在実際にボランティア活動をしている学生へのインタビューや座談会の様子を写真やイラストを用いながら載せたりした。また、今号からはセンター教職員さんの負担を考慮し、入学式配布資料の中に同封する形をとった。

2-4-2. 三角柱の発行

2019 年は 5 本の三角柱を設置した。三角柱とは、ボランティアツアーの情報やイベントのお知らせなどを掲載した広報物であり、2019 年度は川内キャンパスと星稜キャンパスの食堂に 2 週間設置させていただいた。ボランティアフェアや、ボランティアツアーなどに来た人の中にも、三角柱を情報源としている人達が少なからずいるため、大変意味のある広報活動であると考えられる。また新歓時期には三角柱の作成に加え、宣伝用チラシも作成した。

【表】三角柱一覧、掲載時期 掲載内容(ツアー名、掲載団体など)

掲載時期	掲載内容
4 月	福島県浜通り縦断ツアー、福島県いわき市薄磯地区ボランティアツアー、地域づくり体験ツアー、福島県いわき市ボランティアツアー (GW)
4 月	ボランティア体験 (石巻)、ボランティアミーティングへの体験参加、新歓ツアー千賀の浦探検、南三陸探検、ボランティア体験 in 仙台
7 月前半	子どもの貧困問題解決に向けた取組みに学ぶボランティア体験プログラム、ボランティア募集説明会、仙台若者アワード 2019「説明会」、「1 億総貧困社会を乗り越える～『子どもの貧困』の先、ワーキングプア問題に取り組む～」、ボランティアミーティング体験会、
7 月後半	陸前高田ボランティアツアー ～納涼の巻～、福島をめぐる夏休みスタディーツアー、IDeS 3.11 Disaster Study Workshop
11 月	若者アワード 2019「最終審査プレゼンテーション」、永崎下神白クリスマスボランティアツアー、秋の新歓合同説明会 2019、シンポジウム「子ども食堂と大人食堂の時代～子どもと大人の貧困をつなぐワーキングプア問題～」、陸前高田秋のボランティアツアー、サンタクロースになってみませんか?
2020 年 1 月	青根温泉雪灯り、福島をめぐる春休みスタディーツアー、【1/18、2/1、2/9】丸森町ボランティア



【図】2020 年 1 月の三角柱

2-5. 会計

本年度も、SCRUMの会計担当及び参加団体で会計担当を置き、助成金の申請・通帳の管理・資金の収支管理等を行った。前年度同様、SCRUMの参加団体であるぽかぽか、インクストーンズ、福興 youth、直轄部の IDeS 及びもしとさにおいて、独自に助成金の申請を行った。その結果、前年度から取得していたものも含めて、以下の助成金を取得することができた。支援団体には深く御礼を申し上げたい。

【表】2019年度 取得助成金一覧

助成元	申請主体	金額 (円)	助成期間
Yahoo!基金 「夏休み被災地支援学生ボランティアプロジェクト」	ぽかぽか	299,520	2019年8月6日～11日 2019年8月23日～25日
AJOSC 全日本社会貢献団体機構	ぽかぽか	1,100,000	2019年4月1日～ 2020年3月31日
東北大学基金「学生団体の企画事業等に対する助成」	ぽかぽか	100,000	2019年4月1日～ 2020年3月31日
大和証券	ぽかぽか	300,000	2019年4月1日～ 2020年3月31日
東北ろうきん	インクストーンズ	300,000	2019年1月31日～ 2019年9月30日
宮城県共同募金会 「住民力・地域力・福祉力を高める支援事業」	インクストーンズ	107,000	2019年4月1日～ 2020年3月31日
東北大学基金「学生団体の企画事業等に対する助成」	インクストーンズ	100,000	2019年4月1日～ 2020年3月31日
みやぎ生協福祉事業助成金	インクストーンズ	350,000	2019年9月1日～ 2020年3月31日
中日新聞	福興 youth	1,500,000	2019年4月1日～ 2020年3月31日
世界宗教者団体	福興 youth	200,000	2019年4月1日～ 2020年3月31日
大和証券	福興 youth	300,000	2019年1月1日～ 2020年12月31日
東北大学基金「学生団体の企画事業等に対する助成」	福興 youth	100,000	2019年4月1日～ 2020年3月31日
Yahoo!基金 「夏休み被災地支援学生ボランティアプロジェクト」	福興 youth	53,034	2019年9月20日
Yahoo!基金 「夏休み被災地支援学生ボランティアプロジェクト」	IDeS	115,860	2019年8月20日～21日
2018年度こくみん共済 coop<全労済>地域貢献事業	もしとさ	300,000	2019年1月1日～ 12月31日
Gakuvo Style Fund 2019	もしとさ	200,000	2019年8月1日～ 9月30日
東北大学基金「学生団体の企画事業等に対する助成」	SCRUM	110,000	2019年4月1日～

			2020年3月31日
2019年度東北大学基金 奨励賞	SCRUM	50,000	-

2-6. 企画担当

企画担当は、高校生や他大学の被災地学習・活動等を受け入れる際に、SCRUM（学生）側の窓口となり、センター教員と連携しながら被災地学習・活動等の事前準備・当日の運営に参画している。また、例年 SCRUM が団体として取り組んでいる、東北大学祭やオープンキャンパスへの出展のノウハウを引き継いでいくことも行ってきた。

本年度は例年通り、センター教員と連携しながら高校生の被災地学習の事前準備・当日の運営に参画したほか、後述の「仙台散歩」など、SCRUM 内部でメンバー間の親睦を深める企画を新たに実施した。

2-6-1. 高校生の被災地学習・活動等の受け入れ

まず、高校生の被災地学習・活動等の受け入れについて記す。本年度は、以下の活動の他にも、センター主導で高校生・他大学生を受け入れた活動が多数存在するが、本項では鳥取県八頭高校の受け入れについて述べる。その活動の詳細に関しては、1-7.「国内外の高校・大学との交流」の部分を参照されたい。

7/24（水）に、鳥取県立八頭高等学校から生徒会執行部の生徒5名と担当の先生2名が本学を訪問され、SCRUM メンバー3名との交流会を学内で行った。交流会では、八頭高校の皆さんが翌日訪問される予定であった陸前高田に関することや、メンバーの体験談を紹介したのち、座談会を行った。座談会では、「何を目的してボランティアをしているのか」や「ボランティアをされていて嬉しかったとき」など、高校生の皆さんから多くの質問があった。今回参加されていた生徒の皆さんは、全員1年生で、東北をはじめ訪問された方々だったが、多くのことを学び取ろうと積極的な姿勢であったのが非常に印象的だった。なお、今回の交流は、SCRUM が熊本で活動する際にいつも一緒に活動していた熊助組さん（熊本大学）と八頭高校の生徒会執行部の皆さん（今回訪問された生徒の皆さんの先輩方）が2019年1月に交流されたことがきっかけとなって実現した。2016年度から2018年度にかけて継続的に行った熊本での活動のつながりが、こういった形で新たな交流を生むきっかけとなったのは嬉しい限りであった。



【写真】鳥取県立八頭高等学校の皆さんとの交流会 7/24

2-6-2. SCRUM 内部での企画：仙台散歩

続いて、企画担当が中心となり、SCRUM 内部で行った企画について記す。企画担当主導での SCRUM 内部での企画は、本年度新たに始まったものであり、SCRUM メンバーの親睦を深めることを目的として行われた。

5月19日(日)に5月内部企画として仙台散歩を実施した。対象は新入生である。目的は、仙台に土地勘のない一年生に早く仙台になじんでもらうことと、上級生との会話の機会の創出の2点である。仙台の地図を作成して、チェックポイントを100個程度列挙する。チェックポイントとしては仙台駅や市役所のような生活に必要なものから、大学生に必要な飲食店をも列挙した。チーム対抗戦にして、一番チェックポイントを回れたチームを価値にするというルールで実施した。

2-7. その他学内イベント

SCRUMでは、学内におけるイベント時にブース出展などを行ってきた。以下、それぞれの概要を報告する。

2-7-1. オープンキャンパス

SCRUMは、7月30日、31日に開催された2019年度オープンキャンパスにおいて、東北大学課外・ボランティア活動支援センターとして出展し、自身の活動について来場者に伝える活動を行った(来場者数は一日目82名、二日目80名、計162名)。以下、オープンキャンパスにおける活動の詳細を述べる。

本活動では、課外・ボランティア活動支援センターのスタッフとして、ボランティア活動や被災地について、様々な地域から東北大学を訪問した高校生に伝えることを掲げて運営を行った。また、情報を発信すること、伝えようとするを通し、メンバー全員が今まで参加した活動をふりかえる機会とした。

準備は、SCRUM所属のメンバーを中心して行った。運営組織内に役職を設け、それぞれ1年生を上級生がバックアップすることで、来年度への引継ぎをスムーズに行えるようにするとともに、1年生が仕事に馴染むよう体制を整えた。中心メンバーの提案内容をSCRUM全体で議論し、企画を完成させた。運営組織を明確に選出したため、企画・運営は比較的スムーズに行うことができた。

主な企画内容は、各団体のパネル展示と手芸の二つである。パネル展示では活動内容に加えてメンバーの感想を掲載することで、内容がわかりやすくなるよう工夫した。さらに、ポスターの掲載内容に関するクイズを作成し、参加者にアイスを配布することで、来場のきっかけにしようとするのと同時に、ポスターの内容に目を通してもらえるようにした。手芸体験では、東北大学のボランティア活動の特徴である傾聴ボランティアを疑似体験してもらい、実際に行われているボランティアのやり方を実感してもらった。手芸を通して高校生との会話の時間を確保することができた。加えて、ブース内ではSCRUMの活動の様子を写したスライドショーを上映した。写真という視覚的にわかりやすいメディアを用いることで活動時の楽しい雰囲気を感じ取ってもらえるようにするとともに、会話の話題の一つとしても用いることができた。

活動を振り返ると、改善点も挙げられた。運営チームを組織し、活動そのものは比較的スムーズだったものの、団体内での企画共有が少し甘かった点があった。その結果、高校生への対応にむらがあったように感じられた。ブース内に在学生在が多かった時間帯があり、高校生が入ることを渋っているよう見受けられたこともあった。これらを含めた反省は、次年度へ引き継ぐとともに改善できるように尽力したい。ただ、改善点だけではなく多くの良かった点もあった。以下の写真のように来場者でにぎわい、多く笑い声や楽しい会話を聞くことができた。ボランティア活動について高校生に伝えるという当初の目標を達成し、私たち団体内の結束も強めることができた。これらの点から、今年度のオープンキャンパスは無事成功したといえるだろう。来年度は今年度の反省点を踏まえながら、今回培った運営体制を活かし、今年度を超えるオープンキャンパスを企画・運営することを新たな目標として据えていきたい。



【写真】オープンキャンパスにて高校生との交流の様子 7/31

2-7-2. 東北大学祭 模擬店

東北大学 SCRUM は、令和元年 11 月 2、3、4 日に行われた第 71 回東北大学祭に下記の内容で出店した。昨年に引き続き「石巻焼きそばを出店し石巻の魅力を発信する」という目的を定め、石巻焼きそばを出店して SCRUM 全体で運営を行った。以下、①企画内容②実施への流れ③当日の様子とする。

① 企画内容

「食べてけさいん！石巻焼きそば」と題して、石巻焼きそばを提供することを通して、石巻という地域の魅力を発信した。売り上げについては SCRUM の口座に全額入金することとした。販売商品、値段については以下の通りである。

【表】販売商品、値段

商品名	石巻焼きそば	石巻焼きそば（目玉焼きあり）
値段	300 円	350 円

② 実施への流れ

夏休み以前は会議を行うこともコアメンバー全体で動くことも少なく、本格的に動き始めたのは 10 月以降だった。昨年と異なり、メンバーはインクストーンズに限らなかったため、月曜日のミーティングではなく昼休みに会議を行った。具体的には夏休み前に検便提出者の確定や材料、調理方法を確定し 10 月に入ってからコアメンバーの中で仕入れ班、買い出し班、企画班、シフト班に分かれて業務面を進めた。一週間前には「石巻焼きそばマイスター」の資格を得るために 10 名程度で石巻市を訪れ、「石巻茶色い焼きそばアカデミー」の方々の指導を受けた。学祭直前期には前日と 3 日前に事前講習会を 2 度木町通の市民センターで行い、調理練習を行った。

③ 当日の様子

模擬店の場所が今年の広場エリアとは違いエントランスエリアだったことを受けて麺の仕入れる数を今年の半分である 400 袋に変えた。三日とも昼の時間と夜の時間に特に多くの方に食べていただき、3 日目の昼には完売することができた。総売上は 25 万円を超え、諸経費を差し引いた利益は 10 万円を超えた。石巻から来た方の「美味しい」という声や、「初めて食べたが普通の焼きそばより美味しい」といった声を聞くことができた。



【写真】「石巻茶色い焼きそばアカデミー」の方の指導を受ける様子（左）、大学祭当日の様子（右）

2-8. 国際部

ここでは国際部が実施する、留学生向けのツアー、ワークショップならびに事前研修について報告する。東北大学には数多くの留学生が在学しており、留学生の東日本大震災に対する関心は高い。そこで SCRUM は、2015 年 12 月に、第一回留学生向けワークショップを開催し、そのあと 2016 年度には、東北大学の学生ボランティア活動を支援する支援室としては、留学生も対象として対応しようという目的で、国際局が設置し、2017 年度には国際部を設置した。今年度の特徴としては、宮城県南三陸町の活動拠点化及び南三陸町の訪問先の方々、関係者の方々との関係性の強化が挙げられる。以下、2019 年度の活動の報告を行う。

【表】2019 年度の活動一覧

日時	活動名	内容	参加人数 (国際部メンバー)
4/18,4/24	4 月震災学習ワークショップ	学内で実施した、留学生及び日本人学生対象のワークショップ	記録なし
4/21	荒浜研修	宮城県仙台市若林区荒浜で実施した、5 月の荒浜ツアーに向けた事前研修	4 (4)
5/6	荒浜ツアー	宮城県仙台市若林区荒浜で実施した、留学生及び日本人学生対象の震災学習ツアー	22 (4)
8/1	8 月震災学習ワークショップ	学内で実施した、留学生及び日本人学生対象のワークショップ（当初は 7 月に実施予定だったが、一般参加者の不足により 8 月に実施延期）	7 (5)
8/20-8/21	南三陸研修	宮城県本吉郡南三陸町で実施した、11 月の南三陸ツアーに向けた事前研修（Yahoo!基金のご支援を頂き実施）	5 (5)
10/12	稲刈りカップ参加企画（中止）	宮城県気仙沼市で実施される「稲刈りカップ」に参加する留学生対象の企画（台風 19 号の影響により実施中止）	10 (6)
11/16-11/17	南三陸ツアー	宮城県本吉郡南三陸町で実施した、留学生及び日本人学生対象の震災学習・地域住民交流ツアー（Gakuvo との共催事業として実施）	17 (6)

2-8-1. 4 月震災学習ワークショップ

新入生歓迎活動の一環として学内で留学生及び日本人学生対象のワークショップを実施した。SCRUM 及び SCRUM 国際部の活動紹介を行うとともに、東日本大震災についての説明を英語で行った。その後「クロスロード」というワークショップを行い、「ペットは避難所に持ち込んでも良いか、否か」など、震災関連の実践的な様々なテーマについて、日本人学生と留学生が意見を交わし、震災について深く学び、考える良い機会となった。

2-8-2. 荒浜事前研修

5月に実施する荒浜ツアーに向けてメンバーで荒浜を訪問し、企画の打ち合わせなどを実施した。

2-8-3. 荒浜ツアー

留学生及び日本人学生を対象に震災学習ツアーを荒浜で実施した。震災遺構の荒浜小学校を訪問したり、海岸で英語を使って津波被害について伝えたりするなどした。また、海岸では清掃活動のボランティアを行い、拾ったゴミを使用してアクセサリを作ったりするなど様々な活動を行うことが出来た。しかし、英語を使って現地で震災の情報を正しく、分かり易く伝えるということに関しては課題が残る活動になった。

2-8-4. 8月震災学習ワークショップ

震災の情報について伝えるだけではなく、国際部が活動の拠点としている南三陸町の被災状況及び地域の魅力を伝えるためのプレゼンを行った。

2-8-5. 南三陸研修

11月に実施する南三陸ツアーの事前研修として南三陸町を訪問し、震災学習活動及び地域住民との交流活動を実施した。一日目は震災語り部の佐藤誠悦氏と南三陸町を回りながら震災について学習し、二日目は志津川保育所の誕生日会に参加し子供たちと交流し、戸倉復興住宅ではお茶会を開催し、住民の方々と交流した。

2-8-6. 稲刈りカップ参加企画

国際部と親交が深い佐藤誠悦氏が実施に関わる、気仙沼市でのイベント「稲刈りカップ」に留学生と国際部メンバーとで参加する企画を実施予定だったが、台風19号の影響により実施中止となった。

2-8-7. 南三陸ツアー

留学生と国際部メンバーとで南三陸町を訪問し、震災学習活動及び地域住民との交流活動を実施した。一日目は佐藤誠悦氏と共に南三陸町を回り、町内の被災状況等についてお話をしていただき、ご講演もしていただいた。また、被災時の防災の方法としてロープ結索法についても指導していただいた。二日目は戸倉復興住宅でお茶会を開催し、留学生と住民の方々の橋渡し役として交流のサポートをすることができた。二日間の活動を通して、留学生に震災の記憶を伝承することができただけでなく、南三陸町の魅力についても沢山感じてもらうことができた。また、佐藤誠悦氏や南三陸町との方々との関係性もより強めることができ、2020年度の活動に活かせるものを沢山得ることが出来た活動になった。



【写真】佐藤さんのお話を聞く留学生 11/16（左）、戸倉復興住宅でのお茶会 11/17（右）

2-9. 震災伝承部

被災地に密着した活動を行うことが多い SCRUM だが、そのような活動にとどまらず、被災当時からこれまでの復興の記憶を忘れず、忘れさせずに、次の災害に備えることを目的として 2017 年度に震災伝承・災害救援部は設立された。前年度に引き続き、東日本大震災を様々な観点から考え、普段の活動地域に関係なく様々な震災遺構や震災伝承施設の視察、あるいは現地住民やそこに携わるボランティアとの交流を柔軟に行うことで自分たちの知識を深め、伝承につなげていくことを目的に活動を行った。以下、今年度の取り組みを紹介する。

2-9-1. いっぱこ合宿事後七ヶ浜ツアー

活動地域を限定せず、広く震災について学ぶという震災伝承部の強みを生かしたツアーとなった。いっぱい合宿の事後ツアーという位置付けながら、参加者は 4 名と少なかったが、その分内容の濃いツアーにすることができた。具体的な活動内容としては、七ヶ浜町の菖蒲田浜海水浴場を中心に活動している、地元内外の比較的若い世代による地域応援団体 SEVEN BEACH PROJECT 主催の「1000 人ビーチクリーン」というイベントへの参加、七ヶ浜町の主幹産業である観光業支援となる海岸清掃ボランティアであった。あいにくの空模様にもかかわらず、地元住民の参加もあり、その地域にとってビーチが大切な場所であることを改めて感じた。そのなかで SEVEN BEACH PROJECT の代表の方に話を伺った。その方は震災を受けて初めて七ヶ浜を知り、活動を始めてきた方で、「地域に根差した場所だからこそよそ者が入っていく難しさや外から見ているからこそ気づける魅力がある」といった普段なかなか触れることのできない視点からの意見を知ることができた。参加団体の活動では、特定の地域に継続的に入って、地元の方が町を復興、活性化しようとする話を聞くことが多いが、このように「元々その地域に関係のないよそ者がいかに地域の再生に貢献するか」というある種ボランティアの在り方にも通じる話を聞くことができたのは、伝承部の強みだといえるし、これからも様々な視点から震災や復興について考えられるようなコンテンツを盛り込んだツアーを企画していきたいと思う。

2-9-2. 伝承部×正課授業コラボツアー

本ツアーは、日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）と東北大学高度教養教育・学生支援機構の提携事業「東日本大震災の経験を世界と未来につなぐプロジェクト」の一環として実施した。課外ボランティア活動支援センターの教員である横関理恵先生と松原久先生が担当する 2019 年度東北大学基幹科目「社会の構造」（東日本大震災から見る現代社会）の受講生 15 名を迎え、SCRUM スタッフ 10 名とともに、石巻あゆみ野地区での収穫祭の手伝い、石巻市立大川小学校視察を行った。このツアーは、活動を通して、東日本大震災における被災地の被災状況及び復興の過程やその後の課題等を受講生に考えてもらうこと、また、震災伝承部の活動やボランティア活動に関心を持ってもらうことを目的に行ったが、普段机の上で東日本大震災について学んでいる受講生が、実際に自分の目で現地を見て、話を聞くことの意義は非常に大きいものであったと思う。特に大川小学校の視察の際には、「小さな命の意味を考える会」の語り部の方にお話を伺いながら視察を行い、被害について知るだけでなく、ご遺族の思いに触れる機会をつくることができた。また、運営メンバーとして参加した SCRUM スタッフにとっても、いかに自分たちの活動を広めるか、「伝承」とは何かについて考える良い契機になったと思う。

2-9-3. ビデオ鑑賞会

前年度に引き続き、東日本大震災について多角的な視点から考えるために、テレビで放映された番組などの視聴を行った。今年度は計 6 回実施することができ、新歓期には震災について考える入門編として、また各団体のツアー前には事前学習としての役割を担った。規模こそ大きくないが、参加者をその都度募り、各回ごとにテーマも顔ぶれも違うというフレッシュな活動ができたと思う。まさにテーマは多岐にわたり、ある時は津波についての番組を見て、防潮堤についての講義をしていただいたり、ある時は災害弱者にフォーカスし、福祉や支援の在り方について考えたりと、短い時間ながら充実したものとなった。

このように知識・関心の幅を広げる取り組みは、各団体の活動にも生きてくるはずである。映像を見てから実際に現地を訪れることによって感じることや気づくことも変わってくるだろうし、どんな活動を行っていくかという部分にもつながってくる。来年度もこのビデオ鑑賞会には力を入れたいと考えていて、実施回数を増やしたり、参加の呼びかけを積極的に行ったりして、気軽に立ち寄って、震災について考えられる場にしていきたい。



【写真】ビデオ鑑賞会の様子 4/9

2-10. 人権共生部

SCRUM 直轄部である人権共生部、通称「ひとつも」は前年度から活動を開始し、今年度で3年目となった。SCRUM が震災関連に限らず様々なボランティア活動を支援していく位置づけへと変化した中で、「ひとつも」は、SCRUM における新たな活動をインキュベートする（孵化させる）機能をもつことを目指し構想された。「勉強会」「フィールドワーク」「プロジェクト」などを通して、社会の様々な人権課題を座学・実地から学ぶことで、共生社会へ向けての歩みを考えることのできる人権感覚を養えるよう、様々な分野に目を向けて幅広く取り組んでいる。

夏には、前年度も実施したプログラム「子どもの貧困問題解決に向けた取り組みに学ぶボランティア体験プログラム」（通称「夏プロ」）を実施した。今年度は、「せんだいこども食堂」、「TEDIC」の2団体に受け入れをお願いし、21名の学生が参加した。体験前の事前説明会兼顔合わせとなる「ガイダンス」では、当団体から一般参加者に向けて「子どもの貧困」の一般的な説明をした後、「せんだいこども食堂」、「TEDIC」の両団体の方に来ていただき、それぞれの活動の背景や注意事項について説明していただいた。各自、何度かのボランティア体験を終了した後、11月に「体験ふりかえり会」を行った。活動先での体験の共有と、子どもの貧困問題と自分を結びつけることを目標とし、前半は主に活動内容やエピソードの共有を行った。後半はワークショップの形式である OST を参考にし、参加者自らの深く考えてみたいテーマを軸として4人グループ内のフリートークを行った。

このプログラムを通して、子どもの貧困や不登校、また、それと付随して起こる様々な社会問題について学び、実際にその問題に目を向けて活動している団体に参加することで、ただ大学に通うだけでは気づくことのできない現状に目を向けることができたと感じる。また、活動に向けて目標を立て、活動後に振り返りとして、活動の改善点やさらに考えるべき点を洗い出す、学びの深め方の大切さを実感する機会にもなった。

勉強会は、前期・後期を通して継続的に行った。人権共生部に所属していない SCRUM の大学院生の方や、基礎ゼミで自主夜間中学について学んだ一年生の学生2名に勉強会を担当してもらったこともあった。また仙台市内で、多様な性のあり方や、性的マイノリティ（LGBT）の方々が共に暮らしていることを知り、理解を深めるためのイベント「せんだいレインボーDay」が開催されたため事前に多様な性について勉強会を開き、その後「せんだいレインボーDay」に参加した。勉強会について、後期は特に人権共生部のメンバーが集まりにくかったため、人権共生部のメンバーの他に、前述した基礎ゼミの一年生の学生2人や、他の直轄部で活動している1年生に何人か参加をしてもらい、活動内容を伝えることができた。

今年度の活動を通し、ただ大学生生活を送っているだけでは学べないような人権問題を、学部学年の異なるメンバーや先生と議論することで、視野が広がることを実感した。来年度の活動でも、身近にある人権問題に目を向けることを軸とし、メンバーの興味関心に沿ったテーマを設定した夏プロを開催したいと思っている。また、自由に意見を述べる空間として、学びの深め方や議論の仕方を見直すこともできたらと思う。人権共生部では、人権共生部、SCRUM の所属や、学部学年を問わずフラットに話し合える場をこれからも作ってきたい。

【表】 ひととの活動一覧

活動名	開催日（内容、担当者等）
ミーティング	5/30 放課後、6/18 昼、6/25 昼、7/2 昼、7/18 昼、
	8/5 昼、9/19 午前、9/30 放課後、10/7 放課後
勉強会	4/22 放課後（ファストファッション、朝賀）
	5/10 放課後（孤独死・孤立死、礒部）
	5/20 放課後（LGBT と人権、赤田）
	6/17 放課後（ヘルプマーク、名古屋）
	6/25 昼（LGBT、礒部）
	7/1 放課後（進学率と男女比、高嶋）
	12/2 放課後（自主夜間中学、東泉・田嶋)(ヘイトスピーチ、赤田)
フィールドワーク	7/13（せんだいレインボーデー）
子どもの貧困問題解決に向けた取り組みに学ぶボランティア体験プログラム	8/7 放課後（ガイダンス）
	8月中旬から10月中旬（ボランティア体験期間）
	11/18 放課後（体験ふりかえり会）



【写真】 夏プロ体験ふりかえり会の様子 11/18

2-11. 東北大学災害伝承プロジェクト “もしとさ”

2-11-1. もしとさ活動概要

もしとさは、前年度「東日本大震災に向き合ってきた私たちだから高知の人たちを本気で震災から守りたい」というコンセプトのもとに SCRUM メンバーにより立ち上がった団体である。現在は、「東北での経験を高知へ伝え、地域住民 1 人 1 人が防災への意識を持ち続け、地域として防災に向け、自走できるようになる。」を目標に「未災地」高知県での防災に取り組ん

でいる。活動に際しては、災害科学国際研究所の先生方にご指導頂いている。本年度はゆりあげかもめの活動には参加せず、9月に高知派遣を一度行った。また、センター前任の江口怜特任助教のご縁で、和歌山県海南市での防災訓練・大学生交流プログラムへ参加した。その中で企画、あるいは実施した活動について以下に記す。

2-11-2. 第4次須崎派遣

高知大学との交流

高知大学のすけっと隊の学生3人と高知県出身の関西大学の学生で前年度の大阪北部地震以来SCRUMと交流のあった山崎くん、太平洋学園の伊藤さん、センター教職員の阿部さんなどと一緒に各団体の紹介や学生ボランティアの悩みなどを共有した。この様子は高知新聞にも取り上げられた。

須崎市内での避難体験

当初企画していた須崎小学校の親子を対象とした防災イベントが台風などの事情により中止となったため、代替案として今回初めて高知に来たメンバーに、地域の人口拠点となっているマルナカ付近から避難体験を実施した。逃げトレというアプリを用いながら避難経路を計測、やり直し（2回目の避難）を行うことで、看板の位置などについて改善点を見出すことができた。

マルナカでの防災意識調査

前日に続き人口拠点となっているマルナカにおいて買い物後のお客様を対象として意識調査を行った。避難経路の認識不足などの、一部ではあるが高知県の方々の防災意識における課題点、認識の程度を把握することができた。

潮江東小学校

須崎小学校での子供企画が実施できなかったこともあり、太平洋学園の伊藤さんの協力で潮江東小学校での防災イベントに急遽参加させていただき、ブース出展を行いながら当初の企画の反省点を考えるために、来場されていた親御さんを対象にヒアリングを行った。

黒潮町缶詰製作所

阿部さんが以前訪問されたことがあるとのことで、前回からの変化を伺ったり、今後の高知県の在り方として参考になるのではないかと考え、訪問した。第三セクターの事情について詳しく聞くことができた。

2-11-3. 第1次和歌山派遣

9/19-21に和歌山派遣を行い、9/20,21に行われた海南市主催の防災訓練に2名が参加した。9/19には、広川町を訪れ、稲むらの火の館や広川堤防などを視察し、津波の伝承・防災について学んだ。海南市主催の防災訓練の初日は、全国から集まった17大学・51名の学生同士の交流プログラムを行い、もしとさの活動紹介をさせていただいた。2日目の午前、地域の方々と災害ボランティアセンターの運営の訓練を行った。午後は、下津第二中学校にて、防災ワークショップを行い、中学生に東日本大震災を伝える活動を行った。

【表】もしとさ 2019年度活動表

日時	活動場所	活動内容	参加人数
9/5-10	高知県（高知市、須崎市、黒潮町）	高知大学との交流会、メンバーでの避難体験、須崎市のスーパー（マルナカ）での防災意識調査、潮江東小学校での防災イベントへの参加、株式会社黒潮町缶詰製作所での研修	11
9/19-21	和歌山県海南市、広川町	海南市防災訓練への参加（防災訓練、中学校での防災教育、大学生交流プログラム）、広川町視察（稲むらの火の館、広川堤防など）	2



【写真】潮江東小学校防災イベント 9/8、マルナカ須崎店での聞き取り調査 9/8

2-12. 地域共創部

地域共創部は 2018 年度後期より活動を開始し、本年度が 2 年目であった。活動の目的は「過疎地域の人と協力連携して、地域づくりを考え、その中で得た知識や経験をモデルとして活用すること」である。活動形態は、SCRUM 参加団体インクストーンスの活動を通じて関係性の構築できてきた石巻市雄勝町波板地区の支援が中心となっており、波板地区の資源「雄勝石」を使った商品づくりの提案、波板地区住民との交流を通じた地域の魅力・課題発見、交流人口拡大を目的とした学生に対する波板地区の魅力紹介などの活動を行ってきた。なお地域共創部としての活動は 2019 年 11 月の派遣をもって終了したが、今後も地域共創部のメンバーがそれぞれの関心から波板地区との交流・支援を続ける予定である。

2-12-1. 魅力体感ツアー①：4 月 13 日～14 日

波板の課題である交流人口拡大に向けて、地域の産物である石を使ったワークショップの開発および食事会を行なった。具体的にみていくと、食事会では、波板地区が所有するピザ窯で、住民の方にサポートしていただきながらピザを作り、食事をしながら交流した。食事会に来られない方も積極的にお話するために、戸別訪問もおこなった。ワークショップにむけては、波板で採れた「雄勝石」を小石に加工したものを使ってアクセサリー作りをおこない、住民の方から好評をいただいた。

2-12-2. 例大祭の参加：6 月 14 日～15 日

波板地区の八雲神社例大祭に参加し、例大祭終了後、波板地域交流センターにてごはん会を行った。(波板地区の住民さん 5 人、本団体 5 人、他ボランティア団体 2 人)

2-13-3. 魅力体感ツアー②：9 月 19 日～20 日

このツアーでは、地区の視察や住民との交流活動を行ない、初めて地区を訪れる学生を主な対象として、地区に関心をもってもらう契機をつくること、交流活動を通じて、普段話しを伺う機会の少ない、地域のリーダー層以外の住民の声や思いを拾うこと、波板地区で現在地域づくり活動の核として進めている商品販売の支援を行なうことを目的として行った。

具体的には、最初に地域の背景情報や、波板に限らず広く雄勝町について知る機会として、「石巻市復興まちづくり情報交流館雄勝館」で雄勝町のまちづくりについて学習した。住民との交流としては、波板地域交流センターでの足湯と、手作りの牛乳寒天の配布を行い、それぞれ異なる住民と顔を合わせてお話しすることが出来た。さらに、商品販売の支援として、ハンドメイド作品の販売サイトへの登録をお手伝いした。

2-13-4. 宗前すみれコンサートツアー：11月23日～24日

コンサートと食事会開催を通して、波板にとどまらず雄勝町全体から住民を集め、交流の機会とすることを目的として実施した。当日は、地域共創部代表である名古屋円花の友人で、シンガーソングライターの宗前すみれ（2018年に「波板の小舟の歌」を発表）がコンサートを開催し、雄勝町住民と現在は町を離れて暮らす雄勝町出身者25名程が集まった。雄勝町で活動していたOBにも呼びかけ、世代や地域を超えて多くの人が波板に集まって交流することが出来た。また最後に硯を使った体験として、習字ワークショップも行ない、波板地区の産品である硯の魅力に触れてもらう機会となった。

【表】地域共創部 2019年度活動年表

日時	活動場所	活動内容	参加人数	備考
4/13,14	石巻市雄勝町・波板	食事会・ワークショップ	5	住民参加者：3名
6/14,15	石巻市雄勝町・波板	例祭の手伝い	5	住民参加者：5名
9/19,20	石巻市雄勝町・波板	足湯・戸別訪問・販売支援	5	住民参加者（足湯）：3名
11/23,24	石巻市雄勝町・波板	コンサート・ワークショップ	5	住民参加者：25名・OB：7名



【写真】防潮堤に石張りをする様子 9/20、コンサートの様子 11/23

2-13. 東北大学ボランティア団体合同研修（いっぽこ合宿）

東北大学課外・ボランティア活動支援センターでは、6月8日、9日の1泊2日で、日本財団学生ボランティアセンターとの協定事業「東日本大震災の経験を世界と未来につなぐプロジェクト 2019」のもと東北大学ボランティア団体合同研修（通称：いっぽこ合宿）を豊かな自然に囲まれた宮城県栗原市にある国立花山青少年自然の家で実施した。合宿のタイトルである「いっぽこ」とは、「良いコラボの一步になるように」という願いから付けられたものであり、この合宿は今回で4回目となる。東北大学にある7つのボランティア団体から、1年生19人、2年生4人、3年生7人で計30人の学生が参加した。

2-13-1. 1日目

初めにアイスブレイクを兼ねて「LEGO SERIOUS PLAY」という、LEGOブロックを用いて「心」で考え直し、感性で捉えたことをまた論理で考えてみるというコンテンツを行った。大人の職場でも利用されている遊びと学びの融合したコンテンツで、ファシリテーターとして気仙沼高校の高橋唯先生に来ていただいた。LEGOブロックを用いて各自が作品を作り、それについて語り、各個人の感性の違いや価値観の多様性と向き合う場となった。

続いてのWS①では、「プロフェッショナル 個人の流儀」というタイトルのもと、「自分のやりたい事」「自分の失敗から学んだ事」という2つの視点から各「個人」を見つめ直した。また、ボランティアを続けてきた上級生がパワーポイントを使っ

て発表をし、その人自身がどのようなストーリーを持って歩んできたのかという、個人視点の価値観に触れた。4人の学生の発表に加え、2人目のSPゲストとして国立花山青少年自然の家の職員である高橋春菜さんにもご講演いただいた。学生時代に岩手県釜石市でずっとボランティア活動をされ続けてきた方で、大学を卒業して社会人になった後もずっと釜石に足を運び続けている方のお話を聞くことができ貴重な時間となった。

夜は交流を深めるようなコンテンツを多く行った。野外炊飯を行って皆でカレーを作り、スポーツ大会でバレーボールや椅子取りゲームをやって交流を深めた。その後は消灯時間まで部屋で語り合っただけで交流をさらに深めるとともにさらに踏み込んだ個人の話をし合うことができた。



【写真】自然の家の職員である高橋春菜さんのご講演（左）スポーツ大会の様子（右）

2-13-2. 2日目

2日目は自然の家の朝の集いから始まった。朝の集いでは自然の家に宿泊しているすべての団体が紹介を行い、ラジオ体操をした。前日のバレーボールで負けたチームの人が前に出て司会をし、団体について語った。

朝食後、WS②を行った。「“ボランティア”を見つめる ～東日本大震災を経て～」というタイトルのもと、東日本大震災の被災地の変化をみつけ、それに応じてボランティアはどう変化してきたかを考えた。過去8年間の震災関連の新聞記事を4～5人のグループで整理、分析し、その変化に応じてボランティアのニーズがどう変わってきたのかということ考えた。その後、「ボランティアの意味」というものに向き合った。1年生がこのようなテーマに向き合うのは初めてで、難しいながらも考え、何かを吸収しようとする姿が印象的だった。

最後は、「いっぼこのその先...」というタイトルのWS③を行った。これは例年恒例となっているコラボ企画を考えるWSで、普段は活動先も活動内容も学年も違う人が、3人1組になって新しい企画を考えるという、いっぼこ合宿ならではの機会である。はじめに過去のいっぼこ合宿で生まれた活動について知り、その後企画書を作成した。企画書に沿って各班でプレゼンテーションを行い、最も良い企画を考えた班に投票をした。企画をする上で様々な要素を踏まえて考えた結果、どの班も素晴らしい企画を提示することができた。また、「コラボをする意義」についても考えた。2日間を通じて各々が感じたことが反映されていた。運営面を知らない1年生が奇抜で面白い意見が出している印象だった。

合宿全体を通して、1年生から「色々なボランティアがあることを知った」「他団体に知り合いができた」「ボランティアに初めてきちんと向き合った」「先輩方のボランティアに対する想いを聞いた」「先輩方のようになりたいと思った」といった感想が、上級生から「自分達の活動を見直すきっかけになった」「新入生の価値観に触れることができた」「真面目な部分と楽しむ部分の両方があり充実した」「LEGOを用いて個人の価値観に触れるのが新鮮で面白かった」といった感想が寄せられた。参加者アンケートからもこの合宿が充実したものになったことがわかり、企画を運営するやりがいを感じることもできた。

【表】今年度いっぼこ合宿についての概要

日時	活動場所	活動内容	参加人数	備考
----	------	------	------	----

6/8	国立花山青少年自然の家	LEGO SERIOUS PLAY WS① スポーツ大会 野外炊飯	30	気仙沼高校 高橋唯先生 職員 高橋春菜さん
6/9	国立花山青少年自然の家	WS② WS③	30	



【写真】参加者全員の集合写真（左）、スポーツ大会の様子（右）

3. 学生ボランティア団体の活動

2019年度のボランティア登録団体は、前年度からの更新が10団体、新規登録団体が3団体の合計13団体となり、過去最高となった。本章では、登録団体の内、陸前高田応援サークルぽかぽか、インクストーンズ、福興 youth、地域復興プロジェクト"HARU"、震災復興・地域応援サークル ReRoots、国際ボランティア団体 AsOne、ボランティアサークルたなぼた、高校生支援団体 bridge、フェアトレード推進サークル amo、光のページェント Navidad の活動を報告する。

3-1. 陸前高田応援サークルぽかぽか

ぽかぽかは今年度の3本柱として以下の3つを目標として活動を続けてきた。1つ目は“仮設住宅への寄り添い”である。引越す人が多い中、いまだに仮設住宅での生活を余儀なくされる方々に寄り添っていくことを目的としている。2つ目は“災害公営住宅・集団移転地（高台）でのコミュニティ形成支援”である。公営住宅に住む方からよく「公営住宅には知り合いが少ない」「どこにだれが住んでいるのかわからない」といったような声を聞く。また、同様に高台などの集団移転地においても住民同士の交流が少ない現状がある。そこで、我々が集会所などで企画をすることで自宅から外へ出るきっかけを作り、住民さん同士の交流のきっかけを作りたいと考えた。3つ目は“地域活動の支援”である。これは以前から関わらせていただいている高田町和野地区でお祭りへの参加やNPO 法人パクトの実施する子ども支援のみちくさハウスに参加することである。

3-1-1. 上半期の活動 2019年4~9月

前年度に引き続き今年度も月に約1回のペースで陸前高田市にてボランティアツアーや子供支援などの活動を行った。4月・5月は東北大の新入生向けにボランティアツアーを行い、陸前高田市内の震災遺構の視察を行い、陸前高田市被災地語り部の釘子さんや、震災発生時避難場所になった気仙大工伝承館の館長さんのお話を伺い、東日本大震災についての知識を深めた。また、公営住宅で料理企画（たこ焼き、サンドウィッチ）を行い、住民さん同士の交流の場ができたのと同時に、新入生にとってもボランティアの楽しさを感じられる企画となった。6月は、ぽかぽかの学生のみでボランティアツアーを行い、陸前高田市の4か所の仮設住宅・災害公営住宅での「足湯・カフェ活動」に加え、石巻市を訪問し、被災地の現状や復興の理解を深めた。

8月は2回ツアーを行った。1回目は5泊6日と長期で現地に滞在し、陸前高田市の伝統行事「うごく七夕」に和野まつり組として参加したり、毎年恒例の高田小学校の児童を集めての子供企画、栃ヶ沢公営住宅での「夜ご飯企画」を行ったりした。今回のツアーでは、初めて集団移転地の一つである高台2にて流しそうめん企画を行った。21人の住民が訪れ、大盛況だった。また、初めて脇ノ沢公営住宅でも活動を実施し、塗り絵やたこ焼きをして良い雰囲気での活動ができた。

3-2-2. 下半期の活動 2019年10月~2020年3月

10月は集中会議の日を設け、上半期の振り返りと下半期の活動方針を決めた。ボランティアの意義や方針について、学年を越えて中身の濃い議論がなされた。

11月中旬はボランティアツアーではなくぽかぽかメンバーのみで三陸スタディツアーとして宮古から東松島市までの沿岸地域を視察や語り部さんのお話を聞くツアーを行った。実際に訪れ、自分の目で見ることで津波の恐ろしさを実感したり、様々な地域の復興の違いを感じることが出来たりと、充実したスタディツアーとなった。11月下旬のツアーでは、継続して活動したいという目的で、2回目となる高台2での料理企画（ひつつみ）を行った。このツアーではたかた☆ゆめキッチンにも参加した。

12月下旬のツアーでは、仮設住宅での清掃活動と子供企画を行った。仮設住宅での活動では、仮設に残っている住民さんが減少し、参加する方が少なくなる中、そのような現状だからこそ寄り添い活動に意義があるということを確認することができた。1月は和野地区の伝統行事「虎舞」の手伝いをした。

【表】2019年度活動の概要

日時	活動場所	活動内容	参加人数	備考
4/27,28	滝の里仮設住宅、今泉公営住宅、二又復興交流センター	足湯、手芸カフェ活動、料理企画（たこ焼き）、語り部さんの講演	16	
5/5,6	気仙大工伝承館、栃ヶ沢公営住宅、中田公営住宅	視察、語り部さんの講演、足湯、手芸カフェ活動、料理企画（たこ焼き・手巻き寿司）	14	
5/17,18	みちくさ派遣	子供支援	5	
6/1,2	石巻市(南浜つなぐ館、日和山)、大野公営住宅、栃ヶ沢公営住宅、中田公営住宅、滝の里仮設住宅	視察、足湯、手芸カフェ活動	14	
6/29	みちくさ派遣	子供支援	5	
8/6~11	和野七夕祭り、陸前高田ドライビングスクール、下和野公営住宅、栃ヶ沢公営住宅、和野会館、大野公営住宅、滝の里仮設住宅、高台2、脇ノ沢公営住宅	視察、お話を聞く、うごく七夕に参加、足湯、手芸カフェ活動、料理企画(流しそうめん・手巻き寿司・サンドウィッチ・流しそうめん・たこ焼き)、子供支援	22	「うごく七夕」は陸前高田市高田町の伝統行事
8/23~25	みちくさハウス、和野会館、今泉公営住宅	子供支援、和野の納涼祭に参加、足湯、手芸カフェ、料理企画（BBQ）	6	
9/14,15	キャピタルホテル、和野会館	和野の住民や東北大、岩手大、神戸大 OB・OG と交流	4	
11/16,17	宮古田老、釜石、鶴住居、雄勝、女川	街歩き・視察・お話を聞く	11	一般参加者無し
11/23,24	陸前高田レインボーハウス、今泉公営住宅、高台2（鳴石公民館）	子供支援、視察、足湯、手芸カフェ、料理企画（ひつつみ）	11	
12/21,22	滝の里仮設住宅、米崎中学校仮設住宅、和野会館	清掃活動、お茶っこ、子供支援	13	
1/11~13	和野会館、中田公営住宅	視察、虎舞練習・参加、足湯、手芸カフェ活動、料理企画（たこ焼き）	10	虎舞は陸前高田市の伝統行事
2/7~10 (予定)	大野公営住宅、脇ノ沢公営住宅、栃ヶ沢公営住宅、高台2	視察、お話を聞く、足湯、手芸カフェ活動、料理企画	10	一般参加者無し
2/28~3/1 (予定)	陸前高田グローバルキャンパス	「春呼び祭」の手伝い	7	一般参加者無し



【写真】「うごくセタ」和野組への参加 8/7（左）、米崎中学校仮設での掃除 12/21（右）

3-2. インクストーンズ

東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県石巻市において、雄勝町を中心に活動を始めたインクストーンズは、仮設住宅の集約・閉鎖による住民の移動に伴って復興公営住宅へと活動先を広げながら、継続的で柔軟な活動を展開してきた。住民の移動が少なくなり、復興公営住宅での活動が定着してきた現在では、活動を通して交流を深めた住民とより密な関係性を築くことを目標として、サロン活動や戸別訪問など様々な活動を行っている。

3-2-1. 前期の活動（2019年4～9月）

2019年度前期は、①石巻市の2か所の復興公営住宅でのサロン活動、②メンバーと関わりの深い住民への戸別訪問、③石巻市の2地区で開催された夏祭りのお手伝い、という3つの活動を実施した。

① サロン活動

コミュニティ形成支援・傾聴ボランティアとして、復興公営住宅でのサロン活動を計5回（門脇東復興公営住宅2回、吉野町復興公営住宅3回）実施した。毎回の活動の企画を考えるにあたっては、住民と学生との一対一の関係づくりを重視した。8月の活動では、世代の異なる住民間での自発的交流を達成するための一歩として、子どもが参加しやすい内容を企画したところ、それまで参加したことのない数名の子どもとその親御さんの来場につながった。

② 戸別訪問

これまでの活動を通して交流を深めた住民との関係をより密なものとするために、少人数に分かれての戸別訪問を実施した。今後も継続して行うことで、支援者・被支援者という枠組みを超えた関係を築いていきたい。

③ 夏祭りのお手伝い

新西前沼団地・二子団地にて開催された地域住民主催の夏祭りに参加し、当日の準備・運営に携わった。



【写真】吉野町復興公営住宅集会所でのサロン活動 8/9（左）、新西前沼団地での夏祭り 8/12（右）

3-2-2. 後期の活動（2019年10月～2020年3月）

2019年度後期は、メンバーのみの派遣と一般参加者を交えたツアーを合わせて計4回実施した。活動の内容は復興公営住宅でのサロン活動や、住民の方のお宅を回る戸別訪問だけでなく、台風19号の被害を受けての災害ボランティア活動なども実施した。また、12月に実施したツアーでは、1年生メンバーが初めて運営側となり、それまでの活動を通して学んできたことを一般参加者に伝えることができた。



【写真】大川小学校でのスタディ 12/22（左）台風19号の被害を受けた地域で泥をかきだしている様子 10/20（右）

【表】住民の方の声

内容	活動日・場所
娘が2人いるが、震災後、「津波が来る所にはもう住みたくない」と言われて、離れて暮らしている。寂しいが、無理に住ませるわけにはいかない。(60代女性)	4/27・吉野町復興公営住宅
幸せだと思っていればいいと思うの。みんな辛い過去はあるけどそれはもう変わらないから。(80代女性)	12/21・吉野町復興公営住宅
震災から10年経つと市からの助成金が貰えなくなる。色々なところからお金をいただいて町内会のイベントを運営することができるが、活動が段々と少なくなってきてしまい寂しい。(70代男性)	12/22・門脇東復興公営住宅

【表】参加学生の声

内容	活動日・場所
なかなかお話しするのは難しかったのですが、明るく話しているのにも関わらず見え隠れする震災の影を改めて実感しました。(文学部一年・女)	4/21・門脇東復興公営住宅
震災当時の河北新報の一面記事が見られて、ことの深刻さが段々と顕になっていくのを見て当時を思い出すことができた。(経済学部三年・男)	4/21・南浜つなぐ館
私の地元ではかなり震災の頃の面影はなくなってきたのですが、今回のツアーを通してまだ終わったことではないのだと感じました。自分にできることを考えたいです。(法学部一年・女)	12/21・大川小学校

【表】2019年度の活動一覧

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
4/21	南浜つなぐ館 門脇東復興公営住宅	南浜つなぐ館の見学、押し花（門脇）	16	新歓ツアー
4/27~28	大川小学校 復興まちづくり情報交流館・雄勝館 波板地区 吉野町復興公営住宅	大川小学校の視察、復興まちづくり情報交流館・雄勝館の見学、雄勝町の案内、ごはん会（吉野）	9	新歓ツアー
6/22~23	門脇東復興公営住宅 吉野町復興公営住宅	南浜つなぐ館の見学、石巻ニューゼの見学、大川小学校の視察、大川伝承の会のお話	16	メンバーのみで実施

	南浜つなぐ館 石巻ニューゼ 大川小学校 波板地区			
8/9~10	吉野町復興公営住宅 波板地区 ローズファクトリーガーデン	流しそうめん・かき氷・万華鏡づくり（吉野）、徳水先生のお話	16	メンバーのみで実施
8/12	新西前沼地区 二子地区	石巻あゆみ野夏祭りの手伝い、二子地区盆踊り大会の手伝い	16	たなぼた共同で実施
9/22~23	波板地区	波板地域交流センターにて会議	16	メンバーのみで実施
10/20	横川地区 飯野川地区 三輪田地区	家具搬出（横川）、土砂かき（横川、飯野川）、三輪田地区の視察と情報収集	10	メンバーのみで実施
11/2~4	東北大学祭	石巻焼きそばの模擬店		SCRUM 全体で実施
11/16~17	吉野町復興公営住宅 門脇東復興公営住宅 大川小学校 波板地区	芋煮会（吉野、門脇）、大川小学校の土砂かき、大川伝承の会のお話	15	メンバーのみで実施
12/21~22	大川小学校 吉野町復興公営住宅 波板地区 南浜つなぐ館 門脇東復興公営住宅	大川小学校の見学、南浜つなぐ館の見学、ケーキ作り（吉野、門脇）	17	東北大学生公募ツアー

3-3. 福興 youth

3-3-1. 福興 youth の沿革と現在

東北大学福興 youth は福島県浜通り地区をメインのフィールドとして活動している。今年度、前身のいわゆる「福島部門」から数えて、活動開始 7 年目を迎えた。2013 年に東日本大震災学生ボランティア支援室内に福島部門として誕生し、2015 年より「福興 youth」と名乗り、福島県内の仮設住宅、災害公営住宅、復興公営住宅等にてボランティア活動に従事してきた。今年度は、前年度に引き続き以下の 3 つの活動方針を掲げて活動した。

- ・住民の方の架け橋になり、コミュニティ形成を図る
- ・変化していく福島に寄り添い、支援が必要な人の受け皿となる
- ・福島の今に触れ続け、発信していく団体となる

2019 年度の活動の主な特徴としては、以下の 6 点が挙げられる。

- ① いわき市にある、災害公営住宅「市営永崎団地」および隣接する原発避難者入居の復興公営住宅「県営下神白団地」への定期的な訪問を活動の中心に据え、コミュニティ形成支援に取り組んだこと。
- ② スタディーツアーで、浜通り地域に加えて中通り地域にも訪問して、東日本大震災および東京電力福島第一原子力発電所事故について、多角的な視点で考える機会を団体の内外に設定したこと。
- ③ 富岡町の災害公営住宅である栄町団地に夏冬の長期休みに定期的に訪問し、コミュニティ形成支援に取り組んだこと。
- ④ 双葉郡楡葉町で稲の収穫の手伝いを行う等、震災復興支援にとどまることないボランティアに挑戦したこと。

- ⑤ 福島の記憶を遺していくアーカイブ事業を開始したこと。
- ⑥ 課外・ボランティア活動支援センター教員横関理恵特任助教の開講する授業「福島における人権問題と共生の課題・原発事故後を生きる人々に寄り添う」と連携した双葉郡川内村での活動、および福興 youth メンバーによる授業受講生への足湯講座やソフト系支援についての講演を行ったこと。

3-3-2. 2019 年度の福興 youth をめぐる主な出来事

👉 4月 代表が赤田に交代

2019年4月より youth の6代目代表を務めていた平野（工学部3年）に代わり、赤田（法学部2年）が7代目代表に就任。

👉 4月 「永崎下神白 春の大運動会ボランティアツアー」を実施

4月29日・30日に永崎下神白両団地でボランティアを実施した。初日は団地に住んでいる子供を対象とした運動会を実施した。大人の住民がベンチに座って応援をして、子どもが走り回っている状況をほほえましく応援している光景が印象的だった。2日目は youth ではあまり取り組んだことのなかった「ごはん企画」としてたこ焼き企画を実施した。住民からの評価が非常に高かった。1日目と2日目両方とも新企画を挑戦したが、充実したものとなった。

👉 5月 「いわき市薄磯地区 ボランティアツアー」を実施

東日本大震災の津波により甚大な被害を受け、福興 youth が2014年度より活動してきた薄磯地区を5月3日・4日の1泊2日で訪れた。薄磯地区の伝統行事である薄井神社・安波大杉神社の例大祭に参加し、祭りの担い手不足を補うための神輿の担ぎ手になった。少しずつではあるが、こども神輿の担ぎ手が現れたり、現地の若手世代が神輿を担いでいたりする姿をみることができた。

👉 6月 「富岡町 花植えボランティア派遣」を実施

6月2日に日帰りで富岡町の花植えに参加した。町民のみで100人以上集まっており、町民や町外からの来訪者が集う富岡町総合スポーツセンター付近を花で彩った。とりわけ施設に行くまでの坂道に植えた黄色のパンジーでできた「黄色い道」は、坂の上から下を眺める際に絶景であった。花植えを通じて住民との会話も生まれ、原発事故の被災地である富岡町が少しずつ復興している様子を肌で感じる事ができた。

👉 9月 「福島 スタディーツアー」を実施

9月16日～18日の3日間で福島県内をめぐり東日本大震災と原発事故を考えるスタディーツアーを実施した。初日はコミュニティタン福島で放射線関係について勉強した後、午後は永崎下神白団地で、十五夜企画として白玉をつくった。2日目は午前中に風評被害について小名浜漁業で話を伺い、午後いわき市の弁護士から原発の賠償問題や労働問題等について話を伺った。3日目は元東京電力社員で現在は一般社団法人AFW代表を務める吉川彰浩氏とともに福島の様々な地域を訪問し、更にはワークショップを行うことで、それまでの2日間の学びをさらに深める機会になった。多方面から話を聞くことができ、難解な内容も多々あったが、震災と原発事故が多なる影響を与えていることを肌で感じる事ができた。

👉 9月 「富岡町 栄町団地ボランティア派遣」を実施

9月20日に富岡町災害公営住宅栄町団地を訪問し、富岡町社会福祉協会と連携し、カフェ活動を実施した。クイズやバルーンアートで住民に楽しい時間を過ごしてもらうことができた。また、普段の活動ではあまり訪れない双葉郡の川内村や相馬市も訪問し、現地の公営住宅や震災伝承施設を視察した。

👉 10月 「檜葉町 稲刈りボランティア派遣」を実施

10月14日に檜葉町で前述の吉川彰浩氏が営む水田の稲刈りを行った。10月12日に台風19号が福島県を直撃したこともあり、稲刈りの実施が不安視されていた中で決行し、震災系の支援とは少し毛色の違う活動ではあったが、稲刈りをしながら親睦を深め、現地の住民の生活の生の声を聴くことができたり、福興 youth の応援で稲刈りを無事に成し遂げられたことを喜んでもらえたりするなど有意義な時間を過ごすことができた。

👉 10月 「永崎下神白 秋祭りボランティアツアー」を実施

10月26日・27日に永崎団地と下神白団地主共催の秋祭りに参加した。子供向けの出店として「輪投げ」・「ヨーヨー釣り」・「フルーツポンチづくり」のブース出展を行った。子供向けブースに大人も混ざり楽しむ姿があり、世代間交流に貢献できた。27日には昨年好評だったビンゴ大会を再び行った。大いに盛り上がり、住民から来年もビンゴをしてほしいとの声あげられた。

👉 11月 「川内村芋煮会ボランティア派遣」を実施

11月16日に双葉郡川内村にて、NPO法人コースター主催の芋煮交流会に参加。横関理恵先生開講の授業の受講生も連携し、学生は、運営の補助を行いながら、出し物により場を盛り上げた。

👉 11月 「福島アーカイブプロジェクト第1弾」を実施

11月17日に、NPO法人コースターと共催の、福島の住民の声を後世に遺すアーカイブ事業を開始。震災以前から富岡町小浜行政区で区長を務める松本政喜氏に、震災・原発事故発生前、発生直後から現在に至るまでの軌跡、町の展望についてインタビューした。今後も様々な立場の住民にインタビューを行い、2020年3月末発行予定である。

👉 12月 「いわき市台風ボランティア派遣」を実施

12月8日に、いわき市内の台風19号により大きな被害を受けた、平、好間、平窪、赤井地区を訪問。いわき市災害ボランティアセンターと連携して、住宅の流木撤去などを行った。

👉 12月 「永崎下神白 クリスマス会ボランティアツアー」を実施

12月15日に永崎団地と下神白団地でクリスマス会を実施した。今年は去年の企画重視から、傾聴メインの手芸活動へと性質が変更した。学生も住民とじっくり話す機会を作ることができ、非常に良かった。福興 youth の毎年恒例のイベントとして住民にも定着していることが実感できるなど、着々と学生と住民の関係性が深まっていると実感できた。

👉 1月 「川内村餅つき交流会 ボランティア派遣」を実施

2020年1月11日に、NPO法人コースター主催の川内村餅つき交流会に参加。横関理恵先生開講の授業と連携して行った。昔懐かしい餅つきに住民は盛り上がった。餅つきに不慣れな学生に住民が方法を教えながら応援し、一体となって楽しい時間を過ごすことができた。

【表】住民さんの声

内容	活動日/場所
中間処理場って言われるけど、その後の行き先がないから結局最終処理場になるんだよ。(男性)	4月/下神白団地
今年もおみこしを見て嬉しい。ありがとう。(お賽銭をおみこしに入れながら)今年もよい年を送れますように。(女性)	5月/薄磯地区
下神白にはこどもがなくてね…永崎にはたくさんいるんだけど。こどもの声がないのは寂しいですよ。(60代男性)	9月/永崎団地
あの津波で1階部分がきれいさっぱり流されてね。全壊ですよ。でも結局100万円支給されて終わりだった。いわきはしばらくは水道・ガソリンスタンドが止まっていて生活できなかった。避難所は体育館の床で仕切りも何もなかった。(80代男性)	9月/永崎団地
俺は(避難している人たちに対して)帰ってきてとは言えない。避難している人から「怖くないか」と聞かれたら「怖くねえよ」と答えるし、「寂しくないか」と聞かれたら「寂しくねえよ」と答えられる。「放射線はどうなんだ」と聞かれると、うまく説明できない(70代男性)	11月/富岡町
(下神白団地に飾られているイルミネーションを見て)うち(永崎団地)は銭さねえからできねえけど。(70代男性)	12月/永崎団地
今年の餅つきは楽しいなあ。きっと若い人がたくさんいるからだねえ。(70代男性)	1月/川内村

【表】2019年度の活動概要

日時	活動所在地	活動内容	参加人数
2/8(金)～2/10(日)	双葉郡川内村	授業(PBL演習)受講生と川内村でボランティアに従事。	15

3/9(土)	いわき市字町田	永崎団地・下神白団地にて、明星大学・いわき明星大学（現:医療創生大）との合同ボランティア活動。	3
3/14(木)～3/15(金)	いわき市、 双葉郡富岡町	1日目は永崎団地集会所にて、カフェ活動。2日目午前は栄町団地でカフェ活動。午後は富岡町3.11を語る会のガイドによる富岡町の視察、および被災体験の講話聴講。	12
3/28(木)	いわき市平豊間	豊間しおかぜ児童クラブにて、交流会を実施。夏井かわかぜ児童クラブの運営補助にも2名派遣した。また、同時進行で、薄磯地区とのかかわり方を考えるため、薄磯区長と公営住宅自治会長にヒアリングを行った。	8
4/13(土)	双葉郡富岡町中心 地他	富岡町の現地視察スタディーツアー。富岡町3.11を語る会によるガイドを受けた。	15
4/29(月祝)～4/30 (火祝)	いわき市字町田	永崎団地・下神白団地にて、ボランティア活動に従事。1日目は子供対象の運動会企画。2日目は全世代対象のごはん企画（たこ焼き）。	18
5/3(金祝)～5/4(土 祝)	いわき市平薄磯地 区	平薄磯地区にて、薄井神社・安波大杉神社の例大祭に、神輿の担ぎ手として参加。	12
6/2(日)	双葉郡富岡町	富岡町総合スポーツセンター付近にて、施設周辺の花植えの手伝い。	14
6/22(土)～6/23(日)	いわき市字町田	永崎団地・下神白団地にて、カフェ活動を実施。また、永崎団地主催の花植え交流会に参加、運営を補助した。	14
8/22(木)～8/23(金)	いわき市平豊間、 いわき市宮永崎団 地	1日目は豊間しおかぜ児童クラブにて、交流会を実施。2日目は、春に続いて、明星大学・医療創生大との、永崎団地での合同ボランティアを行った。	7
8/24(土)	郡山市	郡山市の応急仮設住宅にて開催された夏祭りにおいて、きぼうときずなさん主催の健康チェック運営に参加。	3
9/16(月祝)～9/18 (水)	郡山市、いわき市、 双葉郡周辺	1日目午前は郡山市のコミュニティ福島を視察。午後は永崎団地・下神白団地で十五夜企画実施。2日目午前是小名浜漁協で風評被害について講話を伺う。午後は浜通り法律事務所の三村先生から原発関連問題（賠償金問題、労務問題等）について講話を伺う。3日目はAFWの吉川さんに浜通り地区の現状を視察とともに案内してもらった。	22
9/20(金)	双葉郡富岡町	栄町団地にて活動	11
10/5(土)	仙台市太白区	ヨークベニマル仙台茂庭店にて、きぼうときずなさんによる健康診断のお手伝いをした。	3
10/14(月祝)	双葉郡楢葉町	木戸の交民家所有の水田にて、稲刈りのボランティア活動に従事。	7
10/26(土)～10/27 (日)	いわき市字町田	永崎団地・下神白団地の合同秋祭りに参加。1日目2日目共に子供対象の出店を開いた。	15
11/9(土)～11/10 (日)	双葉郡富岡町	富岡町総合福祉センターにて、富岡町福祉まつりに参加。両日ともに、足湯ボランティアをしつつ、NPO法人きぼうときずなの健康診断の手伝い。2日目は富岡社協の模擬店の手伝いにも従事。	9
11/16(土)	双葉郡川内村	川内村芋煮交流会に参加。上記⑥に該当。	6
11/17(日)	双葉郡富岡町	アーカイブ事業の一環で、松本政喜小浜行政区長にインタビューを実施。	2
12/8(日)	いわき市平中塩	いわき市の一般住宅にて、10月12日被災の台風19号に対するボランティアに従事。川からの漂流物の処理に従事	10

12/15 (日)	いわき市宇町田	永崎団地・下神白団地にて、持ち込み企画実施。傾聴ボランティアをしつつ、クリスマスリース、松ぼっくりツリーづくりをした。会の後半にはサンタがドーナツのブレゼント。	17
1/10 (金)～1/11 (土)	双葉郡川内村	五社の杜サポートセンターにて、餅つきの運営ボランティアを行った。上記⑥に該当。	16



【写真】5/4 (土) 例大祭 (いわき市平薄磯地区) で神輿を担いでいる (左)、6/2 (日) 富岡町総合スポーツセンター (右)

3-3. 地域復興プロジェクト“HARU”

HARU は、東日本大震災からの復興支援・地域再生を目的として 2011 年 3 月に結成された団体である。震災直後には物資支援や瓦礫撤去などの現地支援、ボランティア情報の提供を行い、2011 年 9 月よりさまざまなプロジェクトを立ち上げ、いちご農家の支援や仮設住宅における学習支援などに取り組んできた。被災地内外における多様なニーズに対応するため、2017 年 1 月に活動拠点を軸とした「石巻部門」と「山元部門」という部門制を採用し、現在まで宮城県のこの 2 つの地域で定期的な活動を継続しているほか、他大学・団体との交流やツアー等を企画している。以下では、各部門における今年度の活動についてまとめる。

3-3-1. 石巻部門

復興公営住宅への移転が終わりつつあるが、住民らは未だに新たなコミュニティを形成することに苦勞している。そこで我々は住民同士の交流の場を提供するべく、前年に引き続き門脇西復興公営住宅を中心に、お茶会やアート作成など様々なイベントを企画した。今年は住民主催のイベントにも参加し、そこでのニーズの吸収及び、今後の自立に向けた支援にも尽力した。近隣の公営住宅の人との交流も活発になり、住民の輪の広がりを日々実感している。

3-3-2. 山元部門

昨年度、活動成果として挙げられた地元 NPO 法人や行政関係者との繋がりに加えて、全国でボランティア活動を実施している「国際ボランティア学生協会 (IVUSA)」や「東北学院大学ボランティアステーション」といった、同じく山元町を活動地域としている学生団体との繋がりが深まった。その繋がりが新たな活動参加への契機となったこともあり、昨年度同様に山元町における活動の幅を広げた一年であったと言える。また、プライベートで山元町に関わるメンバーも増えるなど、ボランティア団体という枠組みを超えた地域活性化活動が見られるようになった。

【表】2019 年度の活動一覧

日時	活動場所	活動内容	参加人数	備考
4/7	山元町・坂元神社	御神輿担ぎの手伝い	3	
4/28	石巻市門脇西復興公営住宅	お茶会、語り部	20	
5/2	山元町・おもだか館	イベントの前日準備	6	

5/3	山元町・おもだか館	イベント当日（フラワーアート作成）	14	
5/4	山元町・おもだか館	出店ブース運営（ポップコーン販売）	13	子どもも大人もみんなで遊び隊実行委員会主催
6/29	山元町・沿岸部	松林管理	4	NPO 法人「生命と環境保全」と共同
6/30	石巻市門脇西復興公営住宅	お茶会、石巻探索	13	
7/27	山元町・坂元神社	夏祭りのお手伝い	2	
8/3	山元町・おもだか館	出店ブース運営（シャボン玉アート）	11	子どもも大人もみんなで遊び隊実行委員会主催
8/11	山元町・小平農村公園	夏祭りの参加（シャボン玉アート）	7	実行委員会主催
8/17	石巻市門脇西復興公営住宅	夏祭りのお手伝い	2	門脇町内会主催
8/23～8/27	山元町・普門寺	合宿	3	IVUSA との合同合宿
9/1	亘理町・鳥の海	音楽イベントのお手伝い	2	スタンドアップ亘理主催
9/21	石巻市門脇西復興公営住宅	お茶会	3	
9/23	山元町・体育文化センター	山元スポーツ祭りの運営	10	Yahoo!基金の助成により実施 山元町教育委員会生涯学習課及び山元ボランティアサークル虹が共催
10/6	石巻市門脇西復興公営住宅	町内会の芋煮会へ参加	2	
10/6	山元町・夢いちごの郷	出店ブースの運営	8	実行委員会主催 IVUSA・東北学院大学との合同企画
10/26	山元町・つばめの杜地域	ハロウィンイベントの実施	10	つばめの杜西区自治会主催
10/27	山元町・沿岸部	松林管理	2	NPO 法人「生命と環境保全」と共同
11/4	山元町・小平農村公園	イルミネーションイベントの準備	1	
11/23	山元町・小平農村公園	イルミネーションイベントの準備	2	
11/30	山元町・小平農村公園	イルミネーションイベントの準備	4	
12/1	石巻市門脇西復興公営住宅	町内会の忘年会へ参加	1	
12/4	山元町・小平農村公園	イルミネーションイベントの準備	4	
12/7	山元町・小平農村公園	イルミネーションイベントの準備	3	
12/8	山元町・小平農村公園	イルミネーションイベントの準備	2	
12/15	山元町・おもだか館	山元町ジュニアリーダーとの交流会	3	



【写真】山元町「山元スポーツ祭り」の運営 9/23

3-5. 震災復興・地域支援サークル ReRoots

ReRoots は、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の時に設立されたボランティア団体だ。当初は、仙台市青葉区の川内コミュニティセンターに避難した学生と地域住民による、避難所運営ボランティアとして動き出した。しかし若林区の農村地域の被害を目の当たりにし、住民目線で農村地域の生活を再建し、復旧・復興を支えるため同年 7 月に若林ボランティアハウスを設立、2014 年まで復旧支援を行った。他大学の学生や全国・全世界のボランティアを巻き込み、復旧支援には延べ 3 万人が尽力した。現在は農業を柱にした地域おこしへ向けた活動を長期的な見通しを持って活動している。以下では、2019 年度に行った活動について報告する。

2019 年度 2 月に行われた合宿にて若林区地域の現状分析やそこからどのように地域課題を解決していくかをまとめた政策プランを指針にした政策立案が行われた。前年度と基本的な取り組みはさほど変わらないが、地域の高齢化にともなう地域福祉づくりに本格的に取り組めるように新たな政策を立案した、組織体制としても前年度のコミュニティ再生部門では七郷と六郷で地域ごとに分かれていたが、今年度は七郷ツーリズム、六郷ツーリズム、六郷福祉、3つのプロジェクト体制に変更。農業再生部門は前年度と変更点はない。実際の新たな取り組みとしては、地域の稲わらを使って恐竜などの巨大アート作品をつくる“わらアート”を年間を通じたパッケージ企画として来場者に楽しんでもらえるよう田植えや稲刈りの企画も開催。福祉分野では地域住民の見回り活動を定期的に行い、また地域の福祉問題や地域の将来的な課題を専門家、ReRoots、地元のリーダーや町内会長、地域住民で話し合う福祉ワークショップを11月に開催。農業面では深刻な労働力不足に陥っている若手農家の労働力支援を半年間継続的に行った。以下の取り組み内容は主要なものだけ記載する

【表】2019 年度の活動一覧

活動内容	活動日	活動場所	備考
りるまあと	毎週土曜日	シャンポール第二荒町	野菜販売
わらアート	8月～12月	せんだい農業園芸センター	わらアートの制作展示・企画運営
地域の見回り活動	1年中		住民の訪問
福祉ワークショップ	11/3	東六郷コミュニティ・センター	地域の課題についての話し合い
ファーム	1年中	ReRoots ファーム	野菜づくり
市民農園	1年中		地域外部の方と共同で野菜作りや企画運営
りるサポ	7～8月、11月～12月		地元野菜の発送
農業労働支援	2019年8月～2020年1月		若手農家の労働力支援
イベント出店	不定期		地元野菜のイベント販売
おいもプロジェクト	5/19 8/25 10/6	ReRoots ファーム	さつまいもの生育・収穫体験

3-6. 国際ボランティア団体 “AsOne”

国際ボランティア団体 AsOne は 2013 年 11 月に発足しました。国際 NGO 団体 Habitat for Humanity の東北大学支部として発足し、Habitat の行う海外建築活動と、東北の被災地での活動の 2 つを中心にボランティアを行っています。

「AsOne」という名前の由来は主に 2 つの意味が含まれていて、1 つ目はボランティア団体として、我々の自己満足だけのボランティアはしたくないので、ボランティアする相手の人と同じ目線で AsOne (ひとつ) になってお互いプラスになるような活動にしたいということ。2 つ目はサークルのメンバーの中が良くないと、そもそも各人のポテンシャルも出せないと思って、サークルとして AsOne (ひとつな、家族のような) な仲の良い団体にしたいという意味が込められています。

2019年度は、多くの新入生を迎えることができ、様々な活動を行うことができました。これまで継続的に活動を行ってきた石巻市のこころの森や、セガサミーさんでのボランティアを引き続き行いながら、丸森町でのボランティアへも各メンバーが参加してきました。また、今年3月は20名のメンバーでミャンマーにて建築活動を行う予定です。

【表】 2019年度の活動概要

日時	活動場所	活動内容	参加人数
4/5,6	福島県檜葉町	スタディツアー、地域主催の春祭りのお手伝い	10
4/14	石巻市こころの森	公園整備のお手伝い、花まつりへの参加	10
5/11,12	女川、花山	新歓合宿、スタディツアー	20
5/26	南三陸	スタディツアー、牧場でのボランティア	12
6/1,2	石巻市	青山学院と合同スタディツアー、こころの森ボランティア	7
6/15,16	神奈川県足柄	JCC 東日本夏合宿	5
6/29	石巻市こころの森	公園整備のお手伝い	10
7/7	石巻市こころの森	七夕祭りでのお手伝い	5
7/28	石巻市新沼田第二公営住宅	夏まつりボランティア	10
8/24	東松島市	セガサミー主催夏まつりでのボランティア	5
9/21,22	静岡県御殿場市	JCC Fes	4
9/23	石巻市こころの森	植樹祭のお手伝い	4
9/26	女川町	セガサミー主催収穫祭のボランティア	5
11/9~12	菰ホール	世界防災フォーラムにボランティアスタッフとして参加	4
11/17	丸森町	台風ボランティア	8
11/24	石巻市こころの森	青山学院と合同でボランティア	5
12/14	仙台市	JCC 合同募金活動	4
12/15	石巻市新沼田第二公営住宅	クリスマス会に参加	6
12/21	東松島市	セガサミー主催クリスマス会のボランティア	5
1/12	石巻市こころの森	植樹のボランティア	10
2/5	東京都新宿区	Habitat の行う清掃活動に参加	4
2/9	石巻市こころの森	植樹ボランティア	7
2/13	女川、石巻市	スタディツアー	6
2/18	福島県相馬市	スタディツアー	8
3/7~18	ミャンマー	建築活動を行う予定	20
3/11	石巻市	祈念式典に参加予定	7
3/24	石巻市こころの森	高校生受入の手伝いの予定	未定



【写真】こころの森での作業の様子 6/2（左）、カンボジアでの建築活動の様子（右）

3-7. 東北大学ボランティアサークルたなぼた

「たなぼた」は、2016 年度前期の「ボランティア活動と地域課題」という基礎ゼミの受講生により結成された。この基礎ゼミは藤室玲治（当時特任准教授、現被災地に学ぶ会代表）によって開講されたもので、東日本大震災の被災地におけるボランティア活動の企画・実施を通して地域課題の解決に挑戦する姿勢を学ぶという内容であった。実際にボランティア活動を企画・実施することを通して「私たちにもできることがある」「ボランティア活動は継続することが重要である」ということを受講生の多くが感じた。また、仮設住宅での入居者減少による支え合いの難しさ、復興住宅での新たなコミュニティ形成の課題等を学んだ。そのような受講生が今後の活動のあり方について議論した結果、新たにボランティアサークルを立ち上げることを決めた。「たなぼた」は「たんいがなくともボランティアしたい」「棚からぼた餅」という 2 つの言葉から誕生した名称である。

3-7-1. たなぼたの活動目的・活動理念

様々な地域から住民が移り住んできた復興公営住宅では、家族や友人・隣人と支え合えるコミュニティの喪失による課題や、新たなコミュニティの形成という課題がある。これらの課題解決のために、住民の方々同士が交流し親睦を深める機会を増やすことが重要である。私たち学生が地域の集会所などをお借りして様々なイベントを企画、運営することで、その地域住民の方々が集い、知り合い、そして仲を深めるきっかけを作ることができる。さらに、活動を通じ住民の方同士や住民と私たち学生の交流を図ることで、私たちが企画するイベントが震災に関する心の傷や日常生活の悩みなどを吐露することができる場にもなると考える。

私たち「たなぼた」は「3Bota(Band, Beginner, iBasho)」を独自の活動目標として掲げ、東北大学生がボランティアを始めるにあたって、壁を感じずに気軽に参加できる企画作りを大切にしている。また、住民の方々が心を通わせる場所を作ると同時に、私たち自身にとってもボランティアを楽しく続ける居場所を作ることが重要だと考えている。今後も SNS や大学内の広報等を利用して私たちの活動を周囲の人に知ってもらい、気軽なボランティア活動参加を促すことで活動の輪を広げていきたい。

3-7-2. 2019 年の活動概要

仙台市・石巻市の復興公営住宅の集会所にて、コミュニティ形成の支援につながるサロン活動やお茶会の実施、自治会等が主催する地域行事の支援を主に行っている。昨年度に引き続き、従来の復興公営住宅内だけでなく、その周辺にある既存の住宅街や、震災後の自立再建による住宅街の住民も含めた町内会規模、街全体の復興目的のイベントにも関わった。今年度は、特に復興公営住宅の自治会等からの活動依頼が多く、地域の住民が開催するイベントの運営支援をしながら地域振興の一助となること、自治会役員を中心とする住民のニーズを聞くことにも重点を置くことができた。また、他のボランティア団体と連携しての活動も行った。

40名ほどのメンバーが活動、運営を行っている。また SNS や学内の広報により、サークルに所属していない東北大生・留学生とも一緒に活動に参加している。「ボランティア」「復興支援」と聞くと堅苦しいイメージを抱く人は少なくないが、未経験者でも気軽に楽しんでボランティアに参加できるような機会の提供も活動の一環である。サークル公式のゆるキャラ（ぼたちちゃん）を用いて、SNS 等を通じた参加の呼びかけや活動後の報告を行い、少しでも学生にとって身近で、ハードルの高さを感じないような工夫をしている。

【表】2019年の活動一覧表

日時	活動場所	活動内容	参加人数	備考
4/14	石巻市南浜・門脇地区、 ①石巻市新西前沼第二復興住宅、 ②石巻市新立野第二復興住宅	震災伝承施設視察、 各集会所にてお茶会（トントン相撲企画）	13	
4/27	仙台市旧荒浜小学校、 ①仙台市大和町市営住宅、 ②仙台市中倉市営住宅	震災遺構視察、 各集会所にてお茶会（トントン相撲企画）	16	
5/19	石巻市新西前沼第二復興住宅	集会所にてお茶会（ユニット折り紙企画）	6	
6/2	仙台市大和町市営住宅	集会所にて足湯、お茶会（七夕折り紙企画）	9	
6/23	石巻市新西前沼第二復興住宅	集会所にてお茶会（季節の折り紙企画）	6	
7/27	仙台市大和町市営住宅	集会所にて七夕飾り作りお疲れさま会（ちらし寿司作り）	6	自治会主催のイベント
8/11	仙台市中倉市営住宅	夏祭り支援（流しそうめん、ブースの手伝い）	6	自治会主催のイベント
8/12	石巻市あゆみ野公園、 新西前沼第一復興住宅	夏祭り支援（ブースの手伝い）	23	夏祭り実行委員会主催のイベント、東北大学インクストーンズと合同
8/18	仙台市若林区大和町松木公園	夏祭り支援（輪投げ企画）	4	大和町五丁目町内会主催のイベント
9/4	仙台市あすと長町第二市営住宅	お茶会支援	3	自治会主催のイベント
9/8	仙台市若林区大和町柳公園	夏祭り支援（ブースの手伝い）	6	社協主催のイベント、自治会・町内会と合同
9/11	仙台市あすと長町第二市営住宅	お茶会支援	3	自治会主催のイベント
9/21	石巻市新西前沼第二復興住宅	集会所にてお茶会（たこ焼きパーティー企画）	7	
9/23	仙台市大和町市営住宅	集会所にてお茶会（防災について会話企画）	7	
9/25	仙台市あすと長町第二市営住宅	お茶会支援	3	自治会主催のイベント
9/26	仙台市あすと長町第二市営住宅	こども食堂運営の手伝い	3	NPO 法人アートワークショップすんぷちゅ主催のイベント
10/6	仙台市大和町市営住宅	歌のコンサート参加	3	自治会主催のイベント
10/19	石巻市南浜・門脇地区、 石巻市新西前沼第二復興住宅	震災伝承施設視察、 集会所にてお茶会（折り紙企画）	4	

10/25	仙台市あすと長町第二市営住宅	こども食堂運営の手伝い	4	NPO 法人アートワークショップすんぶちよ主催のイベント
11/3	①仙台市大和町市営住宅、 ②仙台市若林区大和町柳公園	①芋煮会支援、 ②防災訓練参加	6	大和町、中倉各自治会主催のイベント
11/10	仙台市大和町市営住宅	アクセサリ作り手伝い	3	自治会主催のイベント
11/16	石巻市新西前沼第二復興住宅	集会所にてお茶会（ユニット折り紙企画）	3	
12/22	仙台市大和町市営住宅、 仙台市荒浜地区、旧荒浜小学校	集会所にてクリスマス会	7	



【写真】あゆみの夏祭り 8/12

3-8. 高校生支援団体 bridge

本団体は、「高校生に“架け橋”を」という理念のもと、一人でも多くの高校生と共に夢への架け橋を探ることを目的として活動している。多様な将来の選択肢を提示して共に考えを深める場を設けることにより、将来像を明確に持ち夢を見つけた高校生が自発的に行動し、そして支援を受けて夢を見つけた高校生が次世代へと還元する社会をつくってほしいという思いから、高校生対象の座談会やプレゼンテーション等の企画を実施している。本年度は、企画の実施に加え、他団体との連携や、新たな活動の策定・実施を行ってきた。これらについて、以下に示す。

3-8-1. 2019 年度の実施企画・活動

① 大学生図鑑の作成

大学生のサンプルをさらに増加させた。

② 東北大学オープンキャンパスでの企画

オープンキャンパスという直接に高校生と話ができる機会を利用して、高校生の学習や進路選択を助けるために以下の企画を行った。

- ・本団体の学生が高校生の時に書いた、授業用や自習用のノートを展示した。
- ・高校生に大学での学びをイメージしてもらうために、大学の講義で学んだことの一部を講義形式で分かりやすく伝えた。
- ・座談会を開き、高校生の悩みを直接聞いて助言したり、進路選択や将来像についての相談に乗ったりした。
- ・本団体の LINE@や Twitter といった SNS 活動を紹介し、企画後でも支援を受けられる体制を任意で取ってもらった。

③ 盛岡中央高校企画（1 年生対象）

一般社団法人ディークレア様からの依頼で、当団体から3名が参加した。グループに分かれ、高校生自身が自分の「今まで」と「これから」を考え、将来に向けた一歩を踏み出せるよう、大学生ボランティアと「対話」を行う形式の授業を行った。前向きに一歩を踏み出せた高校生が多々いて、とても良い時間であった。



【写真】 オープンキャンパスの企画と MANABIPPO

3-8-2. 2019 年度の新たな取り組み

① MANABIPPO

尚綱学院大学、仙台高等専門学校の学生と協同で、12月5日・15日の2日間にわたり、中高生および大学生を対象とした学習会イベント「MANABIPPO 学び×一歩」を開催した。この企画の目標は④自らの力で課題を発見し、解決することができる。⑤課題と必要な情報を得た上で、それを活用し解決案を組み立てることができる。⑥自分の意見を伝え、議論することができる。の3つであった。この3つの能力は現行の教育課程では養成が難しいという現状を踏まえ、本企画を通してこれらの能力を中高生と大学生に身につけてほしい、という願いを込めた。弊団体は第1回目の企画運営を担当し、「アイディアが湧く頭脳へ～グループディスカッションの極意～」と題して、ブレインストーミングとコンセンサスゲームを通じて、アイディアが出せる柔軟な発想、ディスカッションの仕方や合意形成の過程について学んでもらった。

参加した高校生からは「『100%の答えはいらない』という言葉のおかげで積極的に発言できた。学校でのグループワークに生かしたい。」という声も寄せられた。本企画に込められたいが参加者の心に届いたことは、大きな成果と言えるだろう。また、第2回目は参加者として本企画に関わった。「エンジニアリングデザイン」の手法の一つである「ファンクショナルアプローチ」を用いて、図書館の機能の現状分析を行った上で、未来の図書館を考案するという内容であった。

2回に分けて行われた今回の企画は、運営側としても学ぶことが多く非常に有意義なものになった。弊団体の理念である「高校生に架け橋を」を実現するべく、こうした活動をさらに展開していきたい。

【表】 2019 年度の活動一覧

日時	活動場所	活動内容	参加人数(当団体)	備考
7/30,31	東北大学川内北キャンパス	ワークショップ・座談会	6	
11/25	盛岡中央高校	講演会	3	ディークレア様の紹介
12/5,15	太白区中央市民センター	ワークショップ	7	尚綱学院大学、仙台高等専門学校の学生と協同

3-9. 東北大学フェアトレード推進サークル amo

我々の団体は、東北大学を中心として東北地方へのフェアトレード活動の普及を目指しています。「フェアトレードが当たり前前の世の中を目指して」というスローガンを掲げ、イベント、大学構内における活動を通してフェアトレードの推進活動を行

なっています。以下では「東北大学フェアトレード推進サークル amo」の活動を、前期の活動、後期の活動、活動のまとめの順に紹介します。

3-9-1. 上半期の活動 2019年4～9月

2018年度の活動に引き続き、週に一度のミーティングではイベントの準備を行いました。また、昨年度と同様にせんだい地球フェスタ（※1）をはじめとする国際系の団体が集まるイベントに積極的に参加することによって、学外の団体との横のネットワークを形成することに注力しました。イベントでは、一般の来場者にフェアトレード商品を実際に販売することによって多くの方々にフェアトレードや国際課題について、そして我々が行っている活動について知ってもらうことができました。

学内では、前年度に引き続き不定期で東北大学の学生を対象としたフェアトレード認知度調査を行いました。年々フェアトレードの認知度が高まってきているため、推進活動を引き続き行っていきたいです。また、上記の前期の活動で国際系の活動をしている多団体と関わる中でSDGsについての話題が多く取り上げられていたのが印象的であったので、今後の勉強会の課題として向き合っていきたいです。

3-9-2. 下半期の活動 2019年10月～2020年3月

主に東北大学祭で出店するフェアトレードカフェ（※2）の運営に向けたミーティングを毎週木曜の昼休みに継続的に行いました。また、国際系のイベントに参加しフェアトレード商品を販売することによる周知活動に力点を置いていた前期とは異なり、イベントが少なくなる後期では所属メンバー自身のフェアトレードに対する理解をより深めるためにミーティングの場で勉強会を行いました。メンバー間で行われる勉強会は週ごとに発表担当のメンバーが論文や書籍を購読し、PPT等にまとめて発表した後にその内容に関する質疑応答・議論をするという形式で行いました。アカデミックな内容が多かった昨年度とは異なり、今年度の勉強会ではフェアトレード商品が置いてある仙台にある店舗の紹介など、比較的フランクな内容が多かったのが特徴的でした。フェアトレードの推進を行なっている団体として自分たちがその取り組みに対する理解をより深いものにするために来年度以降もこの勉強会を継続的に行うつもりです。



【写真】せんだい地球フェスタの様子（左）、勉強会の様子（右）

【表】2019年度の活動一覧

日時	活動場所	活動内容	参加人数	備考
4/17	東北大学付嘱図書館多目的室	フェアトレード映画上映会	10	
5/24	東北大学川内北キャンパス	フェアトレード認知度調査	7	
9/23	国際センター	せんだい地球フェスタ	6	※1
11/2,3,4	東北大学川内北キャンパス	東北大学祭（フェアトレードカフェ出店）	8	※2
通年	東北大学川内北キャンパス	ミーティング、勉強会	8	

3-10. 東北大学光のページェント Navidad

3-10-1. 東北大学光のページェント Navidad について

Navidad(ナビダ)は、SENDAI 光のページェントの実行委員会のうち、大学生メンバーで構成された「ユース部会」の中の東北大学生を集めて 2019 年に新しく設立された団体である。団体設立理由は宮城県内の大学のなかでも、とくにさまざまな地域から学生が集まる東北大学で新人勧誘活動を行うことで、光のページェントの可能性をより広げられると考えられたからである。Navidad はスペイン語で、光のページェント開催期間にもあるクリスマスを表す。

3-10-2. 活動について

(1)活動のスタンス

我々が Navidad として行う活動は大学内で行われるボランティアフェアのみであり、基本的にほかの活動はすべて他大学の学生(=ユース部会のメンバー)とともに行われる。したがって、ここに記す活動はユース部会の活動と同じである。

(2)おもな活動

ユース部会の活動は以下に分類される。

- ① 定例会: 年間を通して月に 1~2 度行われ、今年度のユース部会の活動について話し合う。
- ② 街頭募金: 10 月~12 月の土日祝日に社会人のボランティアとともに行う。
- ③ 広報活動: ポスターや SNS、サイト等にて広報活動を行う。

《光のページェント開催期間中》

- ④ サンタの森の物語: 多くの団体が定禅寺通りにて大規模なパレードを行う。ユース部会はその運営に携わる。
- ⑤ おもてなしステーション: 総合案内所であり、公式リーフレットの配布、グッズの販売、質問対応を行う。
- ⑥ トイレトペーパー補充・清掃活動
- ⑦ 緑道(定禅寺通りの車道の間にある歩道)での写真撮影

3-10-3. ボランティアフェアについて

Navidad として秋にボランティアフェアに初参加した。基本的にユース部会に入るにはまず定例会の見学に来てもらうことが第一なので、このボランティアフェアでは我々がどんな活動をしているのかを説明し、見学に来ることをうながすようにした。秋はボランティアフェアに来るお客さんの人数が春と比べて少ないということはあるが、我々ユース部会側からすると、光のページェント本番直前であるため、人員確保をはかりたかった。しかし実際、このボラフェアに来てくださり、その後ユース部会の見学にも来てくださった方はいなかった。

次年度以降もボランティアフェアに参加したいと思っているが、たくさん来客する春のボラフェアでは次の光のページェントの方針がまだ決定しておらず、細かい日程等はまだわからない。また、ボラフェアのための勧誘ポスターやどんなことをするのかをまとめたスライドなど、資料づくりも分担せねばならない。光のページェントは 4 月ごろは閑散期ではあるが、人員を確保するためには新入生に合わせて春休みから準備を進めるとよいと思われる。

【表】2019 年度活動のまとめ

日時	活動内容	備考
4/13	第 1 回定例会	局制度について。
5/18	第 2 回定例会	ポスター掲示のための電話がけ申請について。
6/15	第 3 回定例会	おもてなしステーションとサンタパレードについて。
7/13	第 4 回定例会	募金活動について。
8/17	第 5 回定例会	年間スケジュールについて。

9/14	第 6 回定例会	社会人講話: 社会人の方よりユース部会発足の歴史等お話を聞いた。
	募金活動	10月12日～12月15日の土日祝に行った。
10/12	第 7 回定例会	社会人講話。
10/26	第 8 回定例会	社会人講話、各局での活動報告。
11/9	第 9 回定例会	社会人講話、各局での活動報告。
11/14、11/15	ボランティアフェア	Navidad のみの活動。初参加。
11/23	第 10 回定例会	社会人講話。本番直前の定例会。
12/6～12/31	光のページェント点灯期間	おもてなしステーションは 12/6～12/25。
12/6	点灯式	光のページェントがはじめてつく日。おもてなしステーション開始。
12/7	第 11 回定例会	サンタの森の物語について。
12/21	第 12 回定例会	サンタの森の物語の最終確認。
12/22	サンタの森の物語	
1/11	第 13 回定例会	活動報告、全体反省等の共有。
2月(予定)	4年生卒業式	
2/15	第 14 回定例会	次年度について。
3/7	第 15 回定例会	次年度について。



【写真】おもてなしステーションの様子 12/8 (左) 、サンタの森の物語 青いスタジャンを着ているのがユース部会 12/22 (右)

4. 第Ⅱ部執筆者一覧

名前	所属	章番号	章タイトル
横関理恵	課外・ボランティア活動支援センター 特任助教	1-1	概括
		1-6	授業開講
		1-7	国内外の高校・大学との交流
松原久	課外・ボランティア活動支援センター 特任助教	1-1	概括
		1-6	授業開講
		1-7	国内外の高校・大学との交流
		1-8	緊急災害時の学生ボランティア派遣
		1-9	課外活動団体合同研修会および滝沢理事への要望
		2-12	地域共創部
金田理紗	課外・ボランティア活動支援センター 事務職員	1-2	事務連絡会議（運営会議）
		1-3	Gakuvo 協定事業
		1-5	ボランティア登録団体の支援
		1-7	国内外の高校・大学との交流
松村礼子	学生支援課活動支援係長	1-10	学友会との連携
渡邊勇	工学部 4年		第二部全体を執筆・編集
		1-4	課外・ボランティア団体活動研修会
		1-6	授業開講
		2-2	総務
高嶋優佑	工学部 2年	2-1	学生スタッフチーム SCRUM（全体の動き）
石塚奈緒	法学部 2年	2-2	総務
		3-2	インクストーンズ
赤田丞	法学部 2年	2-2	総務
		2-6	企画
		3-3	福興 youth
野村俊介	工学部 2年	2-3	渉外
辻壹万	経済学部 2年	2-4	広報
		2-11	もしとさ
千葉隆司	理学部 2年	2-5	会計
山本賢	文学部 4年	1-6	授業開講
		2-6	企画
関口琢朗	工学部 1年	2-7	その他学内イベント（オープンキャンパス）
小原直将	文学部 1年	2-7	その他学内イベント（東北大学祭）
		2-13	いっぽこ合宿
三條祐貴	文学部 2年	2-8	国際部
田中駿介	理学部 1年	2-9	震災伝承部
清水陽花	工学部 1年	2-10	人権共生部

名古屋円花	文学研究科修士 2 年	2-12	地域共創部
砂山風磨	理学部 2 年	3-1	陸前高田応援サークルぽかぽか
藤城莉子	法学部 3 年	3-4	地域復興プロジェクト “HARU”
北河凌	工学部 2 年	3-5	震災復興・地域支援サークル ReRoots
遠藤諒平	経済学部 2 年	3-6	国際ボランティア団体 AsOne
瀬下彩香	法学部 2 年	3-7	基礎ゼミ・展開ゼミ継続サークル” たなぼた”
関野准貴	法学部 2 年	3-8	高校生支援団体 bridge
大友裕太	経済学部 2 年	3-9	フェアトレード推進サークル amo
尾田恵	経済学部 2 年	3-10	東北大学光のページェント Navidad

2020（令和2）年3月31日 発行

2019年度 課外・ボランティア活動支援センター紀要

発行：東北大学 高度教養教育・学生支援機構 課外・ボランティア活動支援センター

<連絡先>

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41 番

東北大学高度教養教育・学生支援機構 課外・ボランティア活動支援センター

センター長 小田中直樹 特任助教 横関理恵

TEL : 022-795-4948 E-mail : volu-s@grp.tohoku.ac.jp

2019年度

課外・ボランティア活動支援センター紀要

the Journal of the Center for Service Learning and
Extra Activities 2019

東北大学 高度教養教育・学生支援機構
課外・ボランティア活動支援センター
2020年3月発行